

STUDIA TIBETICA No. 25

チベット論理学研究

第四卷

サキャ・パンディタ著

『正しい認識手段についての論理の宝庫』

第四章「〈顕現〉と〈他者の排除〉」(1)

テキスト・和訳・注解

財団法人 東洋文庫

1992

STUDIA TIBETICA No. 25

STUDIES IN TIBETAN LOGIC

Volume 4

Tshad ma rigs pa'i gter of Sa skya Paṇḍita

Chapter 4

Text, Translation and Notes

THE TOYO BUNKO

1992

まえがき

本書は、東洋文庫において1961年以来行われている「チベット人との共同によるチベットの言語・歴史・宗教・社会の総合的研究」の成果の一部である。

本シリーズは、数年来東洋文庫において続けられているチベット論理学研究会の研究成果である。研究会ではチベット論理学の名著サキャ・パンディタ著『正しい認識手段についての論理の宝庫（リクテル）』の講読を行っている。本巻は第四章「〈顕現〉と〈他者の排除〉の考察」の前半部分を収めている。従来巻では一巻で一巻を扱ってきたが、本章はこれまでの巻に比べて長いこともあり、残念ながら第四章の最後まで講読を終えることができなかった。本年度の研究会の出席者は、李鐘徹氏、斎藤直樹氏、西脇正人氏、福田洋一である。福田が訳を提出し、全員で討議を加え、その結果を踏まえて最終的には福田の責任で訳を確定する、という手順は従来通りである。その他の序論、注解、付表も福田の手になる。

本巻の主題は、前巻と同様、仏教論理学の言語理論である〈他者の排除〉理論である。この理論の眼目は、人間の思考に根深く巣食っている概念の実体視の構造を論理的に解明し、〈差異〉に基づいた新たな意味理論を構築することにある。このような内容のために、この理論の内的構造は決して分かりやすいものではない。サパンやダルマキールティの言葉を、その議論の道筋通りに要約するだけで理解したとするならば、仏教論理学の他の理論と比しても〈他者の排除〉理論が特に難解ということではない。しかし、一度かれらの常套的な文言を離れて、その思想自体の何であるかを考えようとすると、途端にわれわれの常識的な言葉と思考法とは力を失ってしまう。抽象的な思想的営為の未踏査の地帯を歩いていくのは、大変な労力を必要とする。言葉によって、しかも実物の支えを持たない言葉によって作り出さなければならない思想の妥当性は、そのようなねばり強い思索によってのみ掴み得るものであろう。われわれにそれだけの大きな課題を担うことのできる資質があるかどうかは定かではないが、それでも毎回自分たちのできる限りの検討を加えてきたとは言えるように思う。本巻の訳が人間の思考の内的構造の探求に資するところを少しでも有しているとするならば、それは研究会に出席したメンバーの努力の結果であり、また不明確な部分があるとするならば、それは研究会の成果を正しく表現することのできなかった福田の責任である。

本巻でも、時間に余裕がなかったこともあり、参考文献を十分に渉猟することができなかった。また思わぬ誤解を犯していることも多々あるであろう。御叱正を乞うと同時に、今後一層の努力を積み重ねていきたいと思う。

なお、本巻からは、従来巻と異なった編集方法を採用している。特に、テキスト部分を全てチベット文字で表記することにした。チベット語に関しては、ローマナイズされたテキストよりも、チベット文字で表記されたテキストの方が可読性がはるかに向上す

るであろう。本書で使用したチベット語の書体は、Macintosh上で福田が作成したものである。その他、編集は全てMacintosh上のレイアウト・ソフトであるPageMaker™で行なった。まだ経験が浅く、十分納得の行く出版物となっているとは言えないので、今後更に工夫を重ねて行きたい

平成四年三月

福田 洋一

目 次

『リクテル』における〈他者の排除〉論.....	3
1. 〈他者の排除〉という表現の意味するもの.....	3
2. 同一錯視について.....	8
3. 直接知覚と確定知.....	10
第四章「肯定的存在と〈他者の排除〉の章」.....	19
C2 〈顕現〉および〈他者の排除〉によって対象を認識する仕方	
D1 対象への働きかけ方の一般論.....	19
D2 それぞれの本質の確定	
E1 〈顕現〉	
F1 〈顕現〉一般の特質.....	19
F2 それぞれの意味内容の決定	
G1 錯誤している〈顕現〉	
H1 特質.....	19
H2 分類.....	19
G2 錯誤していない〈顕現〉	
H1 特質.....	19
H2 分類.....	21
H3 特質の担い手において上述の特質が確かに成立していることの論証	
I1 対象の存在の仕方.....	21
I2 意識による把握の仕方.....	21
I3 意識と実在物との一致	
J1 一致の仕方.....	21
J2 以上の説を正しい認識手段によって論証する	
K1 論証因の提示.....	23
K2 その論証因の三条件を論証する	
L1 主題所属性.....	25
L2 遍充関係.....	25
K3 上の論証に対して妥当ではないという論難を斥ける	
L1 主題所属性について妥当ではないという論難を斥ける	
M1 論証因は存在しないという論難を斥ける.....	25
M2 論証因は存在するが必要性はないという論難を斥ける.....	27
L2 遍充関係について妥当ではないという論難を斥ける	
M1 対象を有するもの(=意識)について過大適用の誤謬が帰結 するという論難を斥ける.....	27
M2 対象に関して過大適用の誤謬が帰結するという論難を斥ける	27
G3 従って、直接知覚は対象を確定しないということが成立する	

H1	対象を確定しないことが成立する根拠の本論	27
H2	以上の見解に対する妥当ではないという論難を斥ける	
I1	聖典と矛盾するという論難を斥ける	29
I2	直接対象を確定しないならば、正しい認識手段であることと矛盾するという論難を斥ける	
J1	対論者の論難を提示する	31
J2	返答	
K1	別の人の返答を斥ける	31
K2	われわれの返答	
L1	直接知覚によって否定・定立が行なわれる仕方	31
L2	対象を確定するならば、直接知覚であることと矛盾する	
M1	〈青いもの〉の〈異なり〉を確定する知は分別知であると論証する	33
M2	確定知が虚構を否定排除する仕方	37
M3	後続の確定知は〈他者を排除するもの〉となる	37
M4	以上の見解は論師の説かれたことである	37
H3	言葉および分別知は顕現対象に対して働きかけることはない	
I1	言葉や分別知の対象が顕現するとすれば、全ての属性の否定あるいは定立がそれぞれ同時に理解されることになるという過失がある	39
I2	同一の実在物を指示している名称は全て同義語であることになってしまう	39
I3	意味は〈異なり〉の違いによって区別されると言うならば、〈他者の排除〉が言葉や確定知の対象であると認めたことになる	41
E2	〈他者の排除〉	
F1	特質	41
F2	本質の確定	41
G1	〈他者の排除〉一般の設定	
H1	対象の存在の仕方	41
H2	意識の把握形態	
I1	相異なった複数の個別相を同一のものと把握する場合	
J1	相異なったものを同一のものであると虚構する根拠	43
J2	同一性を虚構する意識の形態	
K1	相異なったものを同一のものであると錯誤する仕方	45
K2	それに対する反論を斥ける	45
J3	相異なったものを同一であると虚構する効用	47
I2	一つのことを相異なったものと虚構する場合	
J1	虚構の根拠	49
J2	虚構する意識の形態	49
J3	一つのことを相異なったものと虚構する効用	49
G2	〈他者の排除〉の分類	51
H1	分類の本論	51
H2	実在物において〈他者の排除〉の存在を否定する	

I1 実在物において〈他者の排除〉があり得ない次第	53
I2 その理由	53
J1 〈他者の排除〉が〈顕現〉になってしまう	
J2 〈顕現〉においても同じことになる	53
訳 注	57
付 表	
『リクテル』第四章に対する各注釈書の科段表	69
1. 『リクテル』科段	69
2. コラムパ大註(G12)	72
3. コラムパ小註(G11)	75
4. シャーキャチヨクデン大註(S10)	77
5. シャーキャチヨクデン小註(S19)	78
6. ロオケンチェン (L.)	80
文献表	84

序 論

『リクテル』における〈他者の排除〉論

本巻では、前巻に引き続き、仏教論理学における言語哲学および分別知を巡る認識論という性格を持つ、所謂アポーハ論の問題圏域が扱われる。特に本第4章は、「〈顕現〉と〈他者の排除〉の考察」という表題からも分かるように、章の後半でアポーハ自体が主題的に論究されることになるが、そればかりではなく、章の前半で論じられる〈顕現〉についての理論もアポーハの存在を導出するための伏線となっていると言える。

さて、アポーハ論の一般的な内容については、前巻の序論で簡単に触れてあるので、ここでは本章を読む上で注意しておくべきこと、あるいは本章におけるサパンのアポーハ論の問題点を幾つか指摘することにした⁽¹⁾。

1. 〈他者の排除〉という表現の意味するもの

〈他者の排除〉は、サンスクリット語ではanyāpoha、チベット語ではgzhan selに対応する訳語である。一般にこの語は「他者の排除」という訳語以外に「他のものの否定」ないし「他のアポーハ」などとも訳されることがある。この術語を構成する二つの語のうち「他者」や「他のもの」と訳されるものの意味はそれほど難しいものではない。ある言葉が何かを指し示している場合、それは当の対象のある側面を取り上げ、〈それ以外のもの〉からの差異を述べることによって当の対象をある特定のものとして指示している、とアポーハ論は主張する。このときの〈それ以外のもの〉が「他のもの」「他者」なのである。

それに対して〈排除〉即ちアポーハという語は、一義的に規定することが困難である。〈排除〉ないし〈否定〉という働きそれ自体の意味は一応理解できたとしても、この語の実際に使用される文脈のなかでは、この語が「排除するもの」のことを指しているのか「排除すること」を指しているのか、あるいは「〔他者の〕排除されたもの」を指しているのかは必ずしも一定していないように思われる。あるいはそれは単にわれわれが正しい意味を理解していない、ということかもしれない。もし〈排除〉が「排除するもの」という意味であるならば、この語は〈他者の排除〉という働きを行なう主体を指していることになるが、一方「排除すること」という意味であるとするならば、それは〈他者の排除〉という働きそれ自体を指していることになり、また「排除されたもの」という意味であるとするならば、それは意識にとっての客体を指していることになる。

それでは、この点について『リクテル』の著者サパンがどのような理解を持っていたかを検討してみよう。

『リクテル』第3章ではサパンは自説の認識論的構図を次のように述べていた。

実体と普遍は対象であり、分別知と無分別知は意識であり、〈顕現〉と〈他者の排除〉は把握の仕方である⁽²⁾。

この三項——〈対象〉・〈対象を有するもの〉・〈対象を有するもの対象への働きかけ〉——に基づく認識論的枠組みはチベット論理学一般に見られるものであり、多くの論理学に関する著作は、この三つの項を順に説明していくという次第を取っている。それは『リクテル』全体の構成の仕方にも現われており、第1章が〈対象〉の考察、第2章が〈対象を有するもの〉たる意識の考察、第3章から第7章までが意識による対象の把握の仕方の種々相の考察に当てられている。この認識論的構図の中で〈他者の排除〉は分別知による普遍の把握の仕方であり、〈顕現〉は無分別知による実体（＝個物）の把握の仕方である。そのことはまた「〈顕現〉あるいは〔他者の〕排除」による把握の仕方」という本章のタイトルにも現われている。即ちこのタイトルは〈顕現〉および〈他者の排除〉が〈対象を有するもの（＝意識あるいは言葉）〉による〈対象〉への働きかけ方であることを示している。そもそも〈排除〉にしても〈顕現〉にしても、動作を示す言葉であるのだから、これが意識ないし言葉の対象への働きかけ方の種類であると考えられるのは極く自然な解釈であろう。

しかし『リクテル』の本文の中には〈他者の排除〉を働きかけ方と解することのできない表現が多数見られる。例えば、〈他者の排除〉の特質は次のように述べられている。

排中関係にある対立項を断ち切って〔対象に〕働きかけるもの（＝分別知および言葉）は、〈他者の排除〉を対象とするものであると〔ダルマキールティ論師は〕主張する⁽³⁾。

ここでは、〈他者の排除〉は分別知ないし言葉の対象と考えられている⁽⁴⁾。さらに、そのような対象としての〈他者の排除〉は、意識によって虚構された存在であることが指摘される。

〈他者の排除〉は〔意識によって〕構想されたものであるので、〔それは〕直接的な対象〔として〕は存在しない。〔人がそれを実在であると〕錯誤して活動を起こした〔ときに到達する〕対象は〔外界の実在たる〕個別相である⁽⁵⁾。

ここでは〈他者の排除〉は、分別知に、その対象として現われてくる虚構された普遍的形象を指しているように思われる。少なくとも意識の対象への働きかけ方であるとは考えられない。また、

無限の過去から〔蓄積されてきた〕潜在記憶〔の力〕によって、〔個々の木が〕〈枝〉を、〔個々の牛が〕〈喉の垂れ肉〉を、〔個々の火が〕〈燃やすこと〉を、〔個々の水が〕〈湿らすこと〉を、等々〔、それぞれの〕〈他者の排除〉を等しく有する諸対象を錯誤して〔、それら諸個物が〕同

一なる普遍〔を有している〕と把握するのである⁽⁶⁾。

これは、〈他者の排除〉は諸個物が等しく有しているものである、言い換えれば、一群の個物が有している、他のものからの〈異なり〉が〈他者の排除〉である、と解することができそうな表現である⁽⁷⁾。しかし、他方では〈他者の排除〉は対象の側に存在していないことも強調されている。

ある者が、「実在物としての〈他者の排除〉」と言って、〈他者の排除〉が、対象である物質的なもの自体に〔存在していると〕主張するのは、ダルマキールティが意図した〈異なったもの〉（＝個物）と〈異なり〉（＝虚構された〈他者の排除〉）の区別をつけていないにすぎない⁽⁸⁾。

従って、諸対象に〈他者の排除〉が共通にある、と言っても、それは〈他者の排除〉が共通に成立する、という意味であり、〈他者の排除〉自身の存在性格は意識によって仮構されたものである、ということになる。ただし、この引用の直前には、〈他者の排除〉が対象の側に存在しない根拠として、

〈他者の排除〉は意識〔に特有〕の対象への働きかけ方である。〔従って〕物質的なものである実在物には〈他者の排除〉〔という働き〕は存在しない⁽⁹⁾。

と述べられている。この点から言えば、〈他者の排除〉は意識の有する作用を指していることになり、決して意識の対象であると考えられているわけではない。

以上のように、〈他者の排除〉を巡るサパンの言明には一貫性が欠けているように思われる。このように、サパンが様々な意味でこの語を使っているという事情のためか、後代の注釈者の一人ロオケンチェンは〈他者の排除〉に二種類、即ち対象の側にあるものと主体の側にあるものがあることを指摘している。やや長くなるがここで紹介しておこう⁽¹⁰⁾。

ここで、〈顕現〉には〈対象〉〔としての〈顕現〉〕と〈対象を有するもの〉〔としての〈顕現〉〕という二種類は存在せず、〔全て〕〈対象を有するもの〉〔としての〈顕現〉〕に他ならない。なぜならば、錯誤した無分別知と錯誤していない無分別知と以外には〈顕現〉の種類は述べられていないからである。それならば〈排除〉についても同様である、と言うならば、同じではない。なぜならば、〈排除する主体〉に対して〈排除〉と名付けられる場合と、他のものが排除された〔客体〕に対して〈排除〉と説かれる場合という二つの場合があるが、〈顕現〉についてはそのようには述べられていないからである。「〈顕現〉は実在を対象としている」と説かれている通りである。

〈排除〉に二つの場合がある、ということは、〔以下の引用のように〕はっきり述べられている。即ち、〕『プラマーナ・ヴァールティカ』では

「従って、論証因〔に基づく推理知〕は〈排除する〉ところの〈対象を有するもの〉であると〔ディグナーガ師によって〕述べられたのである。⁽¹¹⁾」という〔詩〕によって〈対象を有するもの〉〔としての〈他者の排除〉が示され〕、また「従って、〈他者の排除〉が〔分別知と言葉の〕対象である〔という我々の主張〕を〔〈他者の排除〉〕を有する〔基体が言葉の表示対象であるという〕主張〔と解釈した上で〕投げ掛けられた〔批判〕は斥けられる。⁽¹²⁾」と述べられているのと、この論書（＝『リクテル』）の作者も「排中関係にある対立項を断ち切って〔対象に〕働きかけるもの（＝分別知および言葉）は、〈他者の排除〉を対象とするものであると〔ダルマキールティ論師は〕主張する。⁽¹³⁾」と〔いう詩によって〈対象〉としての〈他者の排除〉が〕はっきりと述べられているのである。

もし、そうであってもなお〔〈顕現〉にも〈他者の排除〉にも〈対象〉と〈対象を有するもの〉との2種類がある〕道理は同じ〔ように妥当する〕、と言うならば、同じではない。なぜならば、意識に依拠することなく対象相互に〈排除〉があるので、対象の〈排除〉を設定することはできるが、意識に依拠することなしに対象それ自身の側において〈顕現〉があるとすれば、実在物の個別相〔それ自身〕が顕現するものであることになり、眼の不自由な人は絶えていなくなってしまうであろう、と後に述べるような過失が生じてしまうからである。（中略）

また、前に〔第3章で〕〈顕現〉と〈排除〉は〔意識による対象の〕把握の仕方であると、両方とも〈対象を有するもの〉について説かれたのではないか、と言うならば、それは分別知と無分別知とが対象を把握する仕方に、〈顕現〉によって把握するのと〈排除〉によって把握するのという二つがあることを示したのであって、〈排除〉それ自身が意識の把握形態であると示したのではないのである。

ここでロオケンチェンは、〈対象〉としての〈他者の排除〉と〈対象を有するもの〉としての〈他者の排除〉という二つの場合を区別しているだけであるが、先に指摘したように、サバンの認識論的構図は〈対象〉と〈対象を有するもの〉と〈対象を有するもの〉の対象への働きかけ方という三項からなり、〈他者の排除〉はこの三つの項のいずれの意味でも使用されていると考えられたことと表面的には一致していないように見える。しかし、意識ないし言葉が〈他者を排除するもの〉であるというのと、それらが〈他者の排除〉という働きを有するというのとは、本質的には同じ事態を指している、と考えて差し支えないであろう。そこで、これらは共に〈対象を有するもの〉について述べられた〈他者の排除〉であると考えれば、このロオケンチェンの指摘のうち、主体の側における〈他者の排除〉の解釈は、概ねサバンの本文とも符合する有力な解釈

の一つであると言えるであろう。

しかし、ロオケエンチェンが、〈他者の排除〉は意識に依拠することなく対象それ自身の側でも成立するものであると主張しているのは、上述のサパンの主張——〈対象〉としての〈他者の排除〉は意識によって虚構されただけの存在であり、決して実在物において存在しているものではない——を考慮するならば、適切な解釈とは言えない。サパンの基本的な存在論の枠組みからするならば、存在しているものは個別相、あるいは個物のみであり、分別知に現われ、それによって把握される普遍（＝実在物における普遍 *don spyi*）は存在するものではないし、また分別知には対象は存在しない、ということにもなる。従って分別知が〈他者の排除〉を対象としているとしても、それは真の意味での対象ではなく、また分別知によって対象とされている〈他者の排除〉は個別相が存在しているのと同じ意味において存在しているのでもないのである。にもかかわらず意識は必ず何らかの〈対象を有するもの〉であるのだから、その〈対象〉はいかなる意味においても実在性を持たない虚構されただけの存在であるということにならざるをえない。このようなサパンの存在論・認識論においては〈他者の排除〉が意識に依拠することなく対象の側にも成立するという説は受け入れられないであろう⁽¹⁴⁾。

それならばサパンにとって、分別知および言葉がそれに対して〈対象を有するもの〉となるころの〈対象〉は何か、と言うならば、それは、ある箇所では普遍と言われ⁽¹⁵⁾、また別の箇所では〈他者の排除〉と言われているが、このような用語法は混乱を招くことは否定できないであろう。虚構された普遍と構想された〈他者の排除〉とは、対象の側に存在しているものではなく意識によって構想されただけの存在⁽¹⁶⁾であること、言い換えれば個別相ではないことは共通しているが、前者が分別知に直接現われているものであるのに対し、後者は意識に直接現われることはなく、しかも普遍的形象の成立する根拠として必ずその存在が前提されているものである⁽¹⁷⁾。普遍的形象は〈他者の排除〉に基づいて構想されるものであり、また普遍的形象を認識しているときには、論理的には〈他者の排除〉もまた認識されていることになる。言い換えれば、〈他者の排除〉は普遍的形象の論理的本質であるという意味では両者は表裏の関係にある。このように普遍的形象と〈他者の排除〉とは、同じく分別知の〈対象〉であるとしても、その位相が異なるのである。

ところが困ったことに、サパンは〈他者の排除〉を論じている文脈の中で特に断ることなく、虚構された普遍的形象の議論を展開することがある。例えば、本巻で、〈他者の排除〉一般の設定をする箇所が、実は意識の虚構の仕方の分類になっているのは、その典型的な例である。この箇所で論じられているのは〈他者の排除〉の本質如何の問題ではなく、分別知による対象の把握の仕方、即ち対象をどのように分節ないし総合の仕方である。このような叙述の仕方は読者の理解を混乱させることになる。あるいはサパンの用語法に混乱があったと言うべきかも知れない。このような混乱を翻訳で明確に訳

し分けることは難しいので、読む側が常にこのような用語法の混乱を念頭に置いておく必要がある。

さて、本書では上述のような〈他者の排除〉の意味の相違をできる限り訳し分けるように努めたので、その基本方針について、ここでまとめて述べておきたい。サバンの存在論・認識論あるいはアポーハ論一般において、〈対象〉と〈対象を有するもの〉と後者の前者への〈働きかけ〉という三つの項があり、そのそれぞれを指して〈他者の排除〉という語が用いられることは既に指摘した通りである。そのうち、サバンが明示的に言明しているのは、〈他者の排除〉が言葉および分別知の対象への働きかけ方である、という点である。そこで基本的には〈他者の排除〉は、〈他者を排除すること〉あるいはその作用、という意味を有していることになる。しかし言葉および分別知が〈他者の排除〉という働きを持つことは、言い換えれば、言葉および分別知が〈他者を排除するもの〉であることにもなるので、これを、作用としては〈他者を排除すること〉と訳し、主体としては〈他者を排除するもの〉と訳し分けることができる。一方、〈対象〉としての〈他者の排除〉は、対象化されていることを明確にするために〈他者の排除〉というように「排除」を名詞的に訳すことにしたい。また、この三者について特に区別することなく総称して言及されるときにも「〈他者の排除〉」という訳語を採用することとする。

さて、以上の用語法は直接そのままダルマキールティの場合にも適用できるものであるわけではない。筆者は以前それが可能である、ないしはサバンの読解がダルマキールティの理解の助けとなることを期待していたが、素直に原文を読んでいると、かれらの基本的な構えに若干の相違があることに気付くようになった。ただしそれもサバンの理解がダルマキールティの思想から逸脱している、ないしはそれを誤解している、と言えるほどのものではなく、むしろダルマキールティの中に萌芽的に含まれていた思想内容の一部が拡大され首尾一貫した解釈を施されたもの、と解すべきかもしれない。あるいは、このサバンの理解も、それ自体としては一貫したアポーハ論の一つの体系であるが、ただダルマキールティのオリジナルの思想とはやや異なったニュアンスのものである、と考えるべきかもしれない。

2. 同一錯視について

「同一錯視」という聞き慣れない訳語は、サンスクリット語の *adhyavasāya*、チベット語の *shen pa* を訳すために考えた造語である⁽¹⁸⁾。この訳語には「錯誤」している「同一視」という二重の意味が込められている。基本的なパターンは、あるものAをそれとは別のものBであると思いなすという働きを指している。仏教論理学、特にアポーハ論においてはそれは、意識に現われた形象を外界の实在そのものであると思いなす、という形で使われる。この概念の持っている重要性は、分別知においてわれわれが一次的に経験し

ているものである、意識に内在している普遍的な形象を、外界の事物自身であると同一視することによって、分別知を単なる独語に終わらせることなく、外界に向けての人間の活動を可能にせしめる働きを有することにある。もしこの同一錯視がなかったならば、我々は自分の意識内の世界を一步も外に出ることができず、分別知に基づいた如何なる行為も成り立たず、他人との有効なコミュニケーションをとることもできないであろう。サバンの言葉を引用するならば、

〔言葉の意味対象は、〕〈他者の排除〉に基づいて意識に相異なったものとして現われる通りに、実在物においても相異なったものとして存在していると虚構した上で同一錯視する⁽¹⁹⁾。

一つの実在が分別知においては様々な属性を持ったものとして現われるが、実在においてはそのような分節形態はない。しかし我々は、同一錯視によって分別知上の分節形態を実在それ自身の姿であるかのように思いなしているのである。このような同一錯視の対象は、チベット論理学の用語ではshen yulと呼ばれる⁽²⁰⁾。

一方、このような同一錯視の基本形態とは別に派生的な表現も見られる。それは、分別知に現われる普遍的な形象と外界の個別相とが区別されない、あるいは同一錯視される、という形をとる。これは厳密に言えば、上に述べた同一錯視の基本形と内容が異なっているように思われるが、サバンもダルマキールティも、これらを別のものとは特に意識していない。サバンの言葉を引用するならば、

なぜならば、言葉の意味対象に対して個別相であると同一錯視されたものについて否定や肯定が行なわれるからである。従って、最初に〔ものに〕名前を付けるときにも、実在物の個別相と言葉の意味対象を別々に区別せずに名前を付けるのであり、後にその言葉を使用するときにも、〔その言葉は個別相と言葉の対象を〕区別することなく機能するからである⁽²¹⁾。

この引用では、最初に言葉の意味対象、即ち分別知において虚構された普遍的な形象を外界の個別相自体であると思いなすという同一錯視の基本形が言及された後、その同一錯視の構造が、個別相と普遍的な形象とが区別されることなく意識されることとして、より具体的に言い直されている。

同一錯視の基本的意味は、意識が意識外の他者に向かって働くときの最も基本となる力である。分別知の意識内に、どのような意味であれ、普遍的な形象が現われるということを認める限り、この力の存在を前提としなければならない。仏教論理学では直接知覚においても対象の形象が意識内に現われる、と主張されるが、その形象は対象と同一形態であるので、それを外界のものと同じ錯視する、ということにはならない。というのも、同一錯視はAをAとは異なったBとして同一視することだからである。一方、分別知においては直接知覚におけるような対象自身の姿が現われないことは誰も否定できないであろう。その上でなお意識内容をなしているもの、例えば眼前にない隣室の本につい

て何かを語るとき、われわれはその隣室の本を巡る言葉によって、その言葉とは別の隣室の本そのものを意図している。このとき意識はその言葉によって喚起されるイメージと、それとは別のものである隣室の本とを同一錯視し、われわれはこの言葉によるイメージについてではなく、直接隣室の本について語っているものと思いなしている。実際にはわれわれの意識はその隣室の本自体を捉えることはできないが、それが可能であるかのように思い込んでいるのである。これが同一錯視である。

これはある意味では意識の指向性と似た概念である。両者とも意識の対象へと向かう働きの方を備えており、また外界の实在についての認識を成り立たしめる原動力となるからである。しかし、それらには大きな違いがある。まず第一に、同一錯視はく思いなし」という錯視の働きであるという点、第二にそれは分別知に特有の働きであって、直接知覚においては対象は直接に知覚されているのであって同一錯視の対象にならない、という点である。またこれらに伴ってそれらの働きを構成する諸項も違ってくる。意識の指向性が「意識は常に何ものかについての意識である」と規定されるにせよ、ノエシ的契機とノエマ的契機の相関関係として規定されるにせよ、結局主観的契機から客観的契機への働きとして考えられているのに対し、同一錯視は、意識に内在する客観的契機がどのようにして外界の实在個物へと関わっているのか、という点が問題となっているからである。

いずれにせよ、本章においては同一錯視という概念が特に主題的に取り上げられているわけではないが、分別知の構造や働きを問題とする場合には、この同一錯視の構造は暗黙の前提となっていることを忘れてはならない。

3. 直接知覚と確定知

本章でサバンはく顕現〉の働きとく他者の排除〉の働きを対比して論じている。後代のチベット論理学ではこれらはそれぞれく定立的働きかけ sgrub 'jug〉とく他者排除的働きかけ sel 'jug〉と術語化され、く対象を有するもの〉のく対象〉への働きかけ方の違いとして論じられるようになるが、サバンの段階ではまだそのような術語化は固定されていないようである。というのも、第一節で述べたように、サバンは働きかけ方としてのく他者の排除〉と分別知や言葉のく対象〉としてのく他者の排除〉を用語の上で区別していないからである。第一節では、く他者の排除〉について検討したので、本節では特にく顕現〉の働き方について、サバンの議論内容を分析してみよう。

サバンによれば、く顕現〉は「分別作用を持たない知 (= 無分別知) によって [対象が] 見えていること (mthong ba)」と規定されている。チベット人の語感では「見えていること (mthong ba)」と「現われていること (= く顕現〉 snang ba)」とはほぼ同じことを指していると、東洋文庫研究員ゲシェ・テンパゲルツェン師からご教示があった。とするならば、それは主観の側の把握作用のことでもなく、客観の側の意識への働

きかけでもなく、意識に対象が直接現われている・見えている、という原的な (original) 経験を指しているように思われる。直接知覚はそのような、見えていること・現われていることを通じて対象を認識しているのである。ただし、そのような〈顕現〉にも正しいものと錯誤しているものがある。その基準はその〈顕現〉に対応する实在個物が存在するかしらないか、という点にある。従って、見えている・現われている、という原的な経験は、それが正しいか正しくないかにおいて違いがない、正に原的な、一次的な経験だということになるであろう。

さてこのような〈顕現〉には、たとえ直接知覚という正しい認識手段においても、対象を確定するという働きはない、とサパンは主張する。この、直接知覚に対象確定作用があるのかないのか、という問題は従来の仏教学研究においてはあまり注目されて来なかったように思われる。チベットでは、ごく一部の論者⁽²²⁾が直接知覚に確定作用を認めているにすぎず、サパンを含めて大部分は直接知覚には確定作用がない、と主張している。それは、サパンも引用しているように、ダルマキールティが『プラマーナ・ヴァールティカ』の第一章「自己のための推理」に対する自注で、

(対論者：) それでは直接知覚によって把握されても〔対象が〕確定されないのはどうしてか。

(ダルマキールティ：) 直接知覚はいかなるものをも確定する〔働き〕はない〔からである〕⁽²³⁾。

と述べていることに基づいている。この『プラマーナ・ヴァールティカ』の文脈では、直接知覚は〈他者の排除〉の働きと対比され、対象を分節することなく全的に把握する働きを持つものとして考えられている。そのような文脈において「確定する」という語は、対象のある特定の相貌を持ったものとして限定する、ということの意味することになる。「限定する」とは対象をそれでないものとの差異によって規定する、ということと同義である。従ってそれは〈他者の排除〉に他ならない。直接知覚は対象をそのように限定することはないから、直接知覚には対象を確定する作用はない、と言われているのである。

それでは直接知覚は対象をどのように認識し、またそれは何故正しい認識手段であると言われるのであろうか。サパンによれば、当該対象に対して正しい認識手段であることと、その対象を確定していることとは別の事柄である。

(1)壺が直接知覚によって知覚されたとき、〈色彩〉と〈無常なもの〉とは両者とも直接知覚に顕現しているので、直接知覚が〈青いもの〉の実体に対して正しい認識手段となっているとき、〔それは同時に〕〈無常なもの〉の実体に対しても正しい認識手段となっている。これが〔正しい認識手段としての直接知覚〕である。(2)しかしながら〈青いもの〉の〔他者からの〕〈異なり〉については、〔認識を〕錯誤させる原因がないこと、認

識の補助条件である習熟性や明かり、注意を向けること〔などの諸条件が〕揃っているので、その知の力だけで確定〔知〕を引き出すことができる。(中略) (3)〔一方〕〈無常なもの〉の〔他者からの〕〈異なり〉については、〔現在のものと〕相似した別のものが〔後続の刹那に〕間断なく〕生じ〔続け〕ているなどの錯誤の原因によって捉えられているので、その知自身の力に基づいては〔その〈異なり〉を〕確定することはできず、従って別の知(=推理知)によって確定する必要がある⁽²⁴⁾。

この引用文は三つの部分からなる。まず、(1)正しい認識手段としての直接知覚、(2)その直接知覚の力だけで対象の確定知を引き出すことのできる場合、そして(3)他の知を媒介として対象の確定知を引き出す場合、である。サパンによれば正しい認識手段であると言っても対象を確定している必要はない。ただ、その正しい認識手段の力によって対象を確定する知を引き出すことができれば十分である。直接知覚の段階では、対象は全面的に知に〈顕現〉している。従って、その段階では対象をある特定のものとして確定することはできない。なぜならば、確定とは対象をある特定のものとして限定することであるが、直接知覚においては対象の全ての在り方は、余すところなく顕現しているからである。そこで、そのような直接知覚知に基づいて、十分な条件がそろっている場合には、そのいくつかの在り方については確定知を直接引き出すことができる。しかし、他のいくつかの在り方については、確定に対する阻害要因があるので、直接には確定知を引き出すことができず⁽²⁵⁾、他の認識手段、即ち推理などを介してそのいくつかの在り方を確定する必要がある、というのである。

この考え方は『リクテル』の後の章で、正しい認識手段、および確定についての定義を述べる箇所からも読み取ることができる。正しい認識手段は「〔対象たる個別相に対して〕欺かないこと(mi slu ba) ないしは「未知の対象物を明瞭にすること(mi shes don gsal)」によって規定されるが、この二つの規定は実際には同じことを意味しており、結局獲得されるべき個別相に対して欺かない知が正しい認識手段である、ということになる⁽²⁶⁾。欺かない、ということは、当の知が対象たる個別相の在り方と相違しないこと、と解することができるであろう。これは対象の在り方を確定していることとは別のことである。その「正しい認識手段の力によって確定が引き出される(tshad ma'i stobs kyis nges pa 'dren)」。その確定は「疑惑を絶ち切ること(the tshom chod pa)」と定義され、虚構することと矛盾関係にある⁽²⁷⁾。この確定と虚構の非両立関係は本章でもダルマキールティを引用しつつ述べられている⁽²⁸⁾。対象についてある確定が達成された状態は、虚構が排斥された状態と同じものであり、ここでは否定と定立は同時相即的に成立している。この確定の状態と正しい認識手段としての欺かない知の段階とは、少なくとも直接知覚においては別のものであるが、推理においては別のものではない。正しい認識手段としての推理は、必ず対象をある特定のものとして限定し、従ってその対象を確定して

いる。なぜならば、推理は正しい認識手段としての分別知であり、分別知は全て〈他者の排除〉を働きとするものであり、確定作用は〈他者の排除〉の働きに他ならないからである。

本節では、直接知覚には対象を確定する働きはない、とするサパンの主張の骨子をまとめてみた。ただし、本論におけるサパンの論述は以上の説明とはやや異なった議論の展開となっているので、併せ参照していただきたい。

注

- (1) なお、サパンのアポーハ論の全体については、拙稿「サパンのアポーハ論」『日本西蔵学会々報』第37号(1990)も参照されたい。ただし、以下の本論における立論は、拙稿の段階とは若干異なっている。拙稿においては、〈他者の排除〉は〈対象を有するもの〉の〈対象〉への働きかけ方である、という理解を一貫して取っていたが、以下の議論では他ならぬその点に検討を加え、結論としてはサパンの用語法が一貫していないことを指摘することとなっている。
- (2) 『リクテル』第三巻、p.14参照。
- (3) 本書p.39参照。
- (4) この「〈他者の排除〉を対象とするもの」という部分は、素直に読んだときの解釈であるが、「〈他者を排除するもの〉という〈対象を有するもの〉である」、あるいは「〈他者を排除すること〉[によって]対象を有する(=認識する)ものである」と解釈することも、可能ではある。この場合には〈他者の排除〉は、それを行なう主体、あるいは作用を意味していることになる。実際には、この序論の結論も踏まえて、本論ではこの後者の解釈を採用している。
- (5) 本書p.39参照。
- (6) 本書p.49参照。
- (7) ダルマキールティの見解はこれに相当する。
- (8) 本書p.51参照。
- (9) 本書p.51参照。
- (10) L, pp. 99~100.
- (11) तस्माद् अपोहविषयमिति लिंगं प्रकीर्तितम् ॥ (PV.47ab). 『リクテル』第三巻p.49参照。
- (12) तेनान्यापोहविषये तद्वत्पक्षोपवर्णनम् ॥ (PV.64ab). 『リクテル』第三巻p.53参照。
- (13) 注(3)参照。
- (14) ロオケンチェンの解釈にも一分の理がある。というのも、(ここで詳しく述べるわけに号(1991)はいかないが)ダルマキールティの用語法では〈他者の排除〉は意識とは独立に

対象の側に成立する〈事実〉にしか用いられないからである。このことは逆にサバンの用語法がダルマキールティの用語法と異なっている、ということも示している。もちろん、用語法が異なっても思想内容が同一である、ということもあり得るので、これだけのことからサバンの思想がダルマキールティのものから逸脱している、と言うことはできない。またロオケンチェンは、〈排除〉について〈他者の排除〉の特質を論じる箇所、「何が〈排除されている〉のか」と「何が〈排除〉するのか」と「どのように〈排除〉するのか」という三点に分けて説明している(L, pp.106~110)が、ここでは煩瑣になるので、他の注釈者の説の検討も含めて、別の機会に譲りたい。

(15) 注(2)に引用した第三章の文。

(16) ここで〈他者の排除〉(=〈異なり〉)あるいは普遍的象について「存在」という語が使われているが、個別相と同じ意味において存在しているのではないことは言うまでもない。〈異なり〉がある、というのは、分別知がそれらを他のものと異なっていると認識している、即ち他を排除して認識している、という事態を指しているにすぎないし、また普遍的象についても、それが分別知に現われている、ということの意味しているにすぎないことに注意されたい。

(17) この点については、上の注(6)の引用文を参照。

(18) この *adhyavasāya* は普通は「判断、確定、決知」などと訳されるが、ロシアの先駆的仏教学者スチェルバツキーが *Buddhist Logic* (Leningrad, 1930~1931) において "perceptual judgement" と訳して以後「知覚判断」という訳語も使用され、また梶山雄一博士は『タルカ・バーシャー』の訳や、後期仏教論理学の紹介論文では「間接的決定」という訳語を採用された(『認識と論理(タルカバーシャー)』『世界の名著2大乘仏典』中央公論社、1967年刊。『仏教における存在と知識』紀伊国屋書店、1983年刊)。これら従来の見解およびダルマキールティのテキストにおける用例とその構造的意味については別稿を用意しているので、それを参照していただきたい。サバンの「同一錯視」についても拙稿「サバンのアポーハ論」を参照。

(19) 本書p.47参照。

(20) *shen yul* を含む対象の分類については、拙稿「チャバ・チューキセンゲとサキャ・パンディタにおける対象設定理論」『東方学』第78輯(1989)および「把握対象と顕現対象について」『印度学仏教学研究』第37巻2号(1989)を参照。

(21) RT, p.99, ll.18~21。

(22) ゲシェ・テンパゲルツェン師によると、直接知覚にも確定作用があると主張したのはゲールク派のジャムヤンシェーパ、およびその系統を引くもの(=ゴマン寺系統)のみである。

(23) 本書p.27参照。

(24) 本書p.29参照。

(25) 例えば、直接知覚で対象が刹那滅であることは認識しているはずであるが、似たものが次々と生じてくるために、それが常住であると誤認する場合。

(26) RT, pp. 212~213。

(27) RT, pp. 214~215。

(28) 本書p.35参照。

本 文

•

བཞི་པ། ལྷ་བ་པ་དང་གཞན་སེལ་གྱི་རབ་ཏུ་བྱེད་པ།

གཉིས་པ་སྣང་བ་དང་སེལ་བས་ (179-1-4) རྟོགས་ཚུལ་ལ་གཉིས་ལས། འདུག་ཚུལ་སྤྱིར་བསྟན་པ་ནི།

རྟོག་མེད་སྣང་བའི་སྐོ་ནས་འདུག། །སྤྱོད་པ་མཚན་ཅད་གཞན་སེལ་ཡིན། །

དེ་དག་འབྱུང་དང་མ་འབྱུང་པའི། །དབྱེ་བས་གཉིས་གཉིས་རྣམ་པ་བཞི། །

སྣང་བ་ལ་འབྱུང་མ་འབྱུང་གཉིས་དང་། (179-1-5) སེལ་བ་ལ་ཕྱིན་ཅི་ལོག་མ་ལོག་གཉིས་ཏེ་བཞིའོ། །

གཉིས་པ་སོ་སོའི་རང་བཞིན་ངེས་པར་བྱ་བ་ལ་གཉིས་ཏེ། ལྷ་བ་པ་དང་སེལ་བའོ། ། དང་པོ་ལ་གཉིས་
ལས། ལྷ་བ་སྤྱིའི་མཚན་ཉིད་ནི། རྟོག་མེད་གྱི་ཤེས་པས་མཐོང་བའོ། །

གཉིས་པ་སོ་སོའི་དོན་གཏན་ལ་ (179-1-6) དབབ་པ་ལ་གཉིས་ཏེ། ལྷ་བ་པ་འབྱུང་བ་དང་མ་འབྱུང་བ་
པའོ། ། དང་པོ་ལ་གཉིས་ལས། མཚན་ཉིད་ནི། རང་མཚན་མེད་པ་མཐོང་བའོ། །

གཉིས་པ་དབྱེ་ན་དབང་ཤེས་འབྱུང་བ་དང་། ཡིད་ཤེས་བསྐྱེད་པ་གཉིས་སོ། ། དེའང་རྣམ་ངེས་ལས།

ཉེ་བར་བསྐྱེད་པ་ (179-2-1) ལྷ་བའི་བྱིར། །⁽¹⁾ མངོན་སྲུང་ལྟར་སྣང་⁽²⁾

ཞེས་གསུངས་པ་ལྟར་རོ། །

གཉིས་པ་སྣང་བ་མ་འབྱུང་བ་ལའང་⁽³⁾ གསུམ་ལས། མཚན་ཉིད་ནི་རང་གི་མཚན་ཉིད་ཡོད་པ་མཐོང་བ་
པའོ། །

(1) RTR : ། .

(2) PVin.I.33bc : विसंवादादुपप्लवः । प्रत्यक्षाभः (cf. PVinI, p.76, note 4)

(3) RTR, RT(M) : བའང་

第四章「肯定的存在⁽¹⁾と〈他者の排除〉の章」

G2 〈顕現〉および〈他者の排除〉によって対象を認識する仕方⁽²⁾

D1 対象への働きかけ方の一般論

無分別知は〔対象が知に〕顕現することを通じて〔対象に〕働きかける。言葉および分別知⁽³⁾は全て、〈他者を排除するもの〉である⁽⁴⁾。それらは、錯誤したものと錯誤していないものとに分けられるので〔それぞれに〕二つずつ〔で、都合〕四種類である。

〔対象の〕〈顕現〉には、〔当の対象に対して〕錯誤しているものと錯誤していないものとの二つがあり、また〈他者の排除〉には、〔対象から〕逸脱しているものと逸脱していないものとの二つがあり、〔全部で〕四〔種類と〕なる⁽⁵⁾。

D2 それぞれの本質の確定

E1 〈顕現〉

F1 〈顕現〉一般⁽⁶⁾の特質⁽⁷⁾

〈顕現〉一般の特質は、分別作用を持たない知によって〔対象が〕見えていることである⁽⁸⁾。

F2 それぞれの意味内容の決定

G1 錯誤している〈顕現〉

H1 特質

錯誤している〈顕現〉の特質は、個別相〔として〕存在していないものが見えていることである⁽⁹⁾。

H2 分類

〔錯誤した〈顕現〉を〕分類するならば、錯誤した感性的知覚と惑乱した非感性的知覚の二つである⁽¹⁰⁾。それは『プラマーナ・ヴィニシュチャヤ』にも、

惑乱した〔直接知覚知〕は〔対象に関して〕欺くものであるので、似非直接知覚である。

と説かれている通りである。

G2 錯誤していない〈顕現〉

H1 特質

錯誤していない〈顕現〉の特質は、個別相〔として〕存在しているものが見えていることである。

གཉིས་པ་དབྱེན་རང་རིག་དོན་རིག་གཉིས་སོ། །

གསུམ་པ་མཚན་གཞི་ (179-2-2) ལ་མཚན་ཉིད་ངེས་པར་བསྐྱབ་པ་ལ་གསུམ་ལས། ཡུལ་གྱི་གནས་
ཡུགས་ནི།

དོན་ལ་གནས་པའི་དངོས་པོ་རྣམས། །གཅིག་ལ་དུ་མ་མི་སྲིད་ཅིང་། །

དུ་མ་གཅིག་དུ་གནས་མི་སྲིད། །གཅིག་ལ་གསལ་དང་མི་གསལ་མེད། །

བེདྲུ་ལ་སྡོན་པོ་དང་། བྱས་པ་དང་ (179-2-3) མི་རྟག་པ་ལ་སོགས་པའི་ཚོས་ཐམས་ཅད་དོན་ལ་རྗེས་ཐ་དང་
ལྷ་ཞིག་ལྷོག་པའང་ཐ་དང་མེད་པས་ཐ་དང་གྱིས་སྦྲང་པ་དང་། སྡོ་ཅམ་གྱི་སྲི་གཅིག་མེད་པས་བེདྲུ་དང་ལྷ་རྩ་ལ་
ལ་སོགས་པའི་སྡོན་པོ་རྣམས་པན་ཚུན་རྗེས་སུ་འགོ་བས་སྦྲང་བར་གནས་སོ། །

གཉིས་པ་སློང་འཛིན་ (179-2-4) ལྷངས་ནི།

མངོན་སུམ་ཐམས་ཅད་དོན་བཞིན་སྣང་། །གཅིག་ལ་ཐ་དང་སྣང་བ་མེད། །

ཐ་དང་གཅིག་དུ་སྣང་མི་སྲིད། །སྣང་བས་འཇུག་ལ་རེས་འཇོག་མེད། །

བེདྲུ་མངོན་སུམ་ལ་སྣང་བ་ན་ཆ་མེད་དུ་འཇུག་སྟེ། སྡོན་པོ་ལ་སྡོན་པོ་ཉིད་དང་། དེའི་བྱས་མི་རྟག་ཀྱང་ (179-
2-5) ཐ་དང་མེད་པ་དང་། ཡུལ་དུས་རྣམ་པ་ཐ་དང་གྱི་སྡོན་པོ་རྣམས་ཀྱང་རྗེས་སུ་འགོ་བའི་སྲི་གཅིག་མེད་པས་
ཐ་དང་ཉིད་དུ་སྣང་ངོ། །

གསུམ་པ་སློ་དོན་མཐུན་པ་ལ་གསུམ་ལས་དང་པོ་ཇི་ལྟར་མཐུན་པའི་ཚུལ་ནི།

ཡུལ་ལ་ཇི་ལྟར་གནས་པ་ཡི། །སྟོབས་གྱིས་དབང་ཤེས་ (179-2-6) ལྟེས་པས་ན། །

H2 分類

〔錯誤していない〈顕現〉を〕分類するならば、自己認識と対象認識の二つである。

H3 特質の担い手において上述の特質が確かに成立していることの論証

11 対象の存在の仕方

実在物において存在している〔と構想される〕諸実在について
〔、まず〕一個〔の实在個物〕に複数〔の相異なったもの〕が存在
することはあり得ない⁽¹¹⁾。また複数のもの (=個物) が単一な
もの (=普遍) として存在することもない⁽¹²⁾。単一なるものにお
いて〔一部が〕現われ〔一部が〕現われていない、ということは
あり得ない⁽¹³⁾。

瑠璃〔という実在物〕における〈青いもの〉・〈作られたもの〉・〈無常なもの〉などの諸属性は全て、実在物において相異なった実体で〔ない〕ばかりでなく、〔各々の属性を規定するところの、他者との〕〈異なり〉⁽¹⁴⁾もまた〔実在物において〕相異なったものではないので、〔実在物において諸属性は凡ゆる意味で〕別体ではない。〔一方〕青一般のような単一なる〔実体的〕普遍は存在していないので、瑠璃やウトパラ樹など〈青いもの〉〔と総称される〕諸々のものは、相互の間に実体的共通性を持っていない。

12 意識による把握の仕方

直接知覚は全て実在物の〔あり方の〕通りに顕現する。単一なる
〔実在物〕において相異なった〔複数の〕もの (=諸属性) が顕
現することはなく、また相異なった〔複数の実在物〕が単一なる
ものとして顕現することもない。〔対象の〕〈顕現〉を通じて
〔意識が対象に〕働きかけるとき、〔対象にある各々の属性は一
挙に把握されるのであって、それらに対して意識が〕順次に生じ
〔て各々の属性を順々に把握す〕るのではない。

瑠璃 (=実在物) は直接知覚に顕現するとき部分に〔分れる〕ことなく顕現する。即ち、青いもの (=瑠璃個物) において、〈青いもの〉それ自身 (=基体) や、〈作られたもの〉・〈無常なもの〉〔などの諸属性〕も相異なっていないものとして〔顕現する〕。一方、場所・時間・形態が異なっている〔個々の〕〈青いもの〉 (=諸個物) は、〔それらに〕共通する単一なる普遍が存在しないので、全く相異なったものとして顕現する。

13 意識と実在物との一致⁽¹⁵⁾

対象における存在のあり様に基づいて感性的知覚が生じるので、
〔感性的知覚は対象に対して、〕〈それ無くしては生じ得ない〉

མེད་ན་མི་འབྱུང་ངེས་པའི་ཕྱིར། །སློ་དོན་ལན་ཚུན་འཚལ་བ་མེད། །

དེའང་ཡུལ་སློན་པོར་གནས་པ་ལྟར་སློ་ལའང་དེ་ལྟར་སྣང་། །སློན་པོ་ལ་བྱས་པ་དང་མི་རྟག་པ་ལ་སོགས་པའི་
ལྟོག་ཚེས་ རྣམས་ཐ་དང་མེད་པ་ལ།⁽⁴⁾ སློ་ལ་ཡང་ཐ་དང་མེད་པར་སྣང་། ཡུལ་ (179-3-1) ཏུས་རྣམ་པ་ཐ་དང་
རྣམས་ཐ་དང་དུ་གནས་པ་ལྟར་སློ་ལའང་ཐ་དང་ཉིད་སྣང་སྟེ་རྒྱ་ཐ་དང་གྱི་འབྱུང་བ་ཞིན་ནོ། །

དེའང་རྣམ་འགྲེལ་ལས།

དོན་གྱི་རང་གི་ངོ་བོ་གཅིག། །བདག་ཉིད་མངོན་སུམ་ཡིན་པ་ལ། །

ཚད་མ་རྣམས་གྱི་བརྟག་བྱ་གང། །མ་མཐོང་ཆ་གཞན་ཅི་ཞིག་ཡོད། །⁽⁵⁾

ཅེས་(179-3-2)བྱ་བ་དང་།

དམ་པའི་དོན་གྱི་དོན་རྣམས་ནི། །རང་གིས་འདྲེ་དང་ཐ་དང་མེད་⁽⁶⁾ །

དེ་ལ་ངོ་བོ་གཅིག་པ་དང་། །ཐ་དང་⁽⁷⁾སློ་ཡིས་བསྐྱད་པ་ཡིན། །⁽⁸⁾

ཞེས་གསུངས་པ་ལྟར་རོ། །

གཉིས་པ་དེ་ཚད་མས་བསྐྱབ་པ་ལ་གསུམ་ལས་རྟགས་དགོད་པ་ནི། གང་དོན་ངོ་བོ་དབྱེར་མེད་གྱི་གཅིག་
ཡིན་པ་དེ་ (179-3-3) ལ་སྣང་མི་སྣང་ཆ་གཉིས་མེད་དེ།⁽⁹⁾ བྱེད་མཐོང་བ་ན་⁽¹⁰⁾སློན་པོ་མཐོང་བ་བཞིན་བྱས་
པའི་བྱས་མི་རྟག་གང་དོན་ངོ་བོ་དབྱེར་མེད་གྱི་གཅིག་ཡིན་ནོ་ཞེས་བྱ་བ་རང་བཞིན་གྱི་རྟགས་སོ། །

(4) RTR, : || ; RT(P) omits |.

(5) PV.43 : एकस्यार्थस्वभावस्य प्रत्यक्षस्य सतः स्वयम्। कोऽन्यो न दृष्टो भागः स्याद् यः
प्रमाणैः परीक्ष्यते ॥

(6) PV.Tib. : མིན་

(7) PV.Tib. : ཏུ་ས་

(8) PV.87 : संसृज्यन्ते न भिद्यन्ते स्वतोऽर्थाः पारमार्थिकाः। रूपमेकमनेकं च तेषु
बुद्धेरुपप्लवः ॥

(9) RTR, RT(M) omit | .

(10) RTR, RT(M) : ནི

という限定的〔な依存関係〕にある。それ故、意識と実在物〔と各々の対応〕は、相互に〔他の意識と実在物との対応と〕紛れることがない。

〔意識の実在物との一致の仕方〕についても、〔それは次のようなものである。実在物としての〕対象が〈青いもの〉として存在している通り〔のあり方〕で意識にも顕現する。〈作られたもの〉や〈無常なるもの〉などの、〔他のものからの〕〈異なり〉としての諸属性は、〈青いもの〉〔という実在物〕において相異なる存在を持たない〔のと同じく〕、意識においてもまた相異なることなく顕現する。〔一方〕場所・時間・形態が異なっている諸々のもの（=個物）は、〔実在物としては〕相異なって存在している通りに、意識においても相異なったもの〔として〕のみ顕現する。例えば、相異なった印面〔の印字の模様〕の凹凸が相異なっているのと同様である。そのことはまた『プラマーナ・ヴァールティカ』に

実在個物それ自体は単一〔不可分〕なものである〔のだから、それが〕直接知覚された場合には、〔全てが知覚されてしまい、他の〕認識手段による認識を必要とする、未だ知覚されていない部分が何か〔残されて〕いるだろうか¹⁶⁾。

とあり、また

勝義的な意味での諸存在（=実在物）は、それ自体としては、〔一つの普遍として〕統合されることも、〔複数の属性へと〕分割されることもない。それら〔絶対的に個別的な諸実在〕において単一なるもの（=普遍）や複数なるもの（=諸属性）〔を構想するの〕は、意識の錯乱である。

と説かれている通りである。

J2 以上の説を正しい認識手段によって論証する

K1 論証因の提示

（遍充関係：）何であれ、存在の分離できない一体のものには、顕現している〔部分〕と顕現していない〔部分〕という二つの部分は存在しない。

（喩例：）瑠璃が知覚される時、〔同時に〕〈青いもの〉もまた知覚されるように。

（適用：）〈作られたもの〉および〈無常なもの〉〔という二つの属性〕もまた、壺において存在の分離できない一体のものである。

（帰結：）〔従って、壺の上におけるそれら二つの属性は、一方が顕現し、一方が顕現しないということはない。全てが一度に顕現する。〕

これは自己同一性に基づく論証因である¹⁷⁾。

གཉིས་པ་དེའི་ཚུལ་བསྐྱབ་པ་ལ་གཉིས་ལས། སྤྱགས་ཚེས་ནི་ལྷོས་མེད་དང་གནོད་པ་ཅན་གྱིས་འོག་ཏུ་
བསྐྱབ་ (179-3-4) ལ།

འབ་པའང་བྱེད་མཐོང་བ་ན་སྤོན་པོ་མཐོང་བར་སྤོང་བས་གྲུབ་པོ། །

གལ་ཏེ་སྐྱང་མི་སྐྱང་ཆ་གཉིས་མེད་པ་ལྷན་ཅིག་མཐོང་བ་ཙམ་ཡིན་གྱི་རང་བཞིན་འབྲེལ་པ་མི་ངེས་སོ་
ཞེ་ན། བྱས་མི་རྟག་ལྷན་ཅིག་མཐོང་བ་ས་ཡིན་ཏེ།⁽¹¹⁾ རོན་ངོ་པོ་གཅིག་ཡིན་པའི་ཕྱིར་རོ། །

རོན་གཅིག་ (179-3-5) ཀྱང་ལྷོག་པ་ཐ་དང་ངོ་ཞེ་ན། ལྷོག་པ་སྐྱོས་བྱས་ཡིན་གྱིས་རོན་ལ་མི་གནས་
སོ།། དེས་ན་བྱས་པ་དང་མི་རྟག་པའི་འབྲེལ་པའང་རོན་ལ་མི་གནས་པར་འོག་ཏུ་འཆད་དོ།།

གསུམ་པ་གྲུབ་པ་ལ་མི་འཐད་པ་སྤང་བ་ལ་གཉིས་ཀྱི་དང་པོ་སྤྱགས་ཚེས་ལ་མི་འཐད་པ་སྤང་བ་ལའང་
(179-3-6) གཉིས་ལས། རྟགས་མི་སྲིད་པ་སྤང་བ་ནི་བྱས་པ་དང་མི་རྟག་པ་ངོ་པོ་གཅིག་པ་དེ་རོན་དམ་གྱི་
གཅིག་ཡིན་ན་མི་སྲིད་ལ། ཀྱན་རྫོབ་ཀྱི་གཅིག་མ་ངེས་ཏེ་ལྷ་བའི་དཀྱིལ་འཁོར་གྱི་འོག་སྐྱང་ལ་སྤྱང་མི་སྐྱང་བ་
བཞིན་ལོ་ཞེ་ན།

ཀྱན་རྫོབ་ཀྱི་གཅིག་ཡིན་ནོ། ། དེའང་འཇིག་ (179-4-1) རྟེན་ལ་གྲགས་པ་ལྷ་བའམ། བྱས་པ་གཅིག་ལྷ་
བྱ་ས་ཡིན་གྱི་བསྐྱན་བཙོས་ལ་གྲགས་པའི་སྐྱེ་མཆེད་ཀྱི་རྣམ་གཅིག་ཡིན་ནོ། །

(11) RTR, RT(M) : | を省く。

K2 その〔論証因の三〕条件を論証する

L1 主題所属性

主題所属性⁽¹⁸⁾については、〔刹那滅性を論証するための論証因である〕「無依存性」および拒斥論証因に基づいて、後に〔第6章で〕論証する〔ことにする〕。

L2 遍充関係

また遍充関係は、瑠璃が知覚されるときに〔同時に〕〈青いもの〉が知覚されるという経験によって成立する⁽¹⁹⁾。

〔対論者：〕顕現する〔部分〕と顕現しない〔部分〕という二つの部分が存在しないというのは、単に〔それらが〕〈一緒に〉知覚されるというのにすぎないのであって、〔それらが〕自己同一の関係にあるとは限らない。

〔サパン：〕〔そうではない。〕〈作られたもの〉と〈無常なもの〉とは〈一緒に〉知覚されるのではない。なぜならば、〔一緒に知覚されるためには、それらは異なったものである必要があるが、ここでの遍充関係はそれらが〕一体の物である〔ということ的前提としている〕からである。

〔対論者：〕一体のものであっても、〔それぞれの内容を規定する、他者からの〕〈異なり〉が相異なっている〔ので、それら二つの属性は異なったものであり、従って一方は顕現し、他方は顕現しないということも成り立つ〕。

〔サパン：〕〔他者からの〕〈異なり〉は意識によって作られたもの（=構想されたもの）であるので、実在物においては存在せず、従って〈作られたもの〉と〈無常なもの〉との結合関係も実在物においては存在していない。このことは後に〔「関係の考察の章」で詳しく〕説明する〔予定である〕。

K3 〔上の〕論証に対して妥当ではない〔という論難〕を斥ける

L1 主題所属性について妥当ではない〔という論難〕を斥ける

M1 論証因は存在しない〔という論難〕を斥ける

〔対論者：〕〈作られたもの〉と〈無常なもの〉〔という二つの属性〕が同一実質であるという場合、勝義的な〔即ち、絶対的な〕意味で同一であるとするならば〔それは〕あり得ない⁽²⁰⁾。また世俗〔的な意味で〕同一〔であるとするならば、それは〕不確定〔論証因となる、即ち世俗的には同一のもので一部は見え一部は見えないという場合があり得る〕。例えば、〔一個の存在である〕月輪の下側は見え、上側は見えないという場合のように。

〔サパン：〕〔二つのものは〕世俗〔的な意味で〕同一である。それもまた、世間一般で認められている、月や壺が単一であるという〔意味での同一性〕ではなく、〔哲学〕論書で一般に認められている、〔同一〕原因〔から生じたものとしての〕同一実体性なのである⁽²¹⁾。

གཉིས་པ་སྲིད་ཀྱང་མི་དགོས་པ་སྤང་བ་ནི། གལ་ཏེ་སྲོན་པོ་སྤང་བ་མངོན་སུམ་གྱིས་བྱུང་བ་ན་ཚུགས་
ཚོས་ངེས་པའི་ཚད་མས་ (179-4-2) སྲོན་པོ་མི་རྟག་པར་དངོས་སུ་རྟོགས་པས་སྲོ་འཛིན་ལ་མི་རྟག་པ་སྤང་བ་
ཤུགས་ལ་བྱུང་བའི་སྤྱིར་ངོ་བོ་གཅིག་པའི་རྟགས་དོན་མེད་དུ་གྲུབ་ལོ་ཞེ་ན།

མི་རྟག་པ་སྤང་བའི་དོན་བྱུང་ཀྱང་སེལ་བའི་ངོར་བསྐྱབ་པོ། །

གཉིས་པ་བྱུང་བ་ལ་མི་འབྲང་བ་སྤང་བ་ལ་གཉིས་ལས་ཡུལ་ཅན་(179-4-3)ལ་ཉ་ཅང་གྲུབ་བ་ནི།
རྗེས་གཅིག་ལ་སྤང་མི་སྤང་ཆ་གཉིས་མེད་པ་ལྟར་རྗེས་དཔག་དང་དེ་སྲོང་བའི་རང་རིག་གཉིས་ཀྱང་སྲོ་དོན་
འཛིན་མི་འཛིན་ཆ་གཉིས་འགལ་ཏེ་རྗེས་གཅིག་པའི་སྤྱིར་ངོ་བོ་ཞེ་ན།

མི་འགལ་ཏེ་ཤེས་པ་གཅིག་ཉིད་རང་རིག་ཁ་ནང་ལྷ་སྤང་བས་འཇུག་ལ་རྗེས་ (179-4-4)དཔག་བྱི་ལྟ་
གཞན་སེལ་གྱིས་འཇུག་པས། མར་མི་རང་གསལ་བ་དང་སྤྲོན་པ་སེལ་བ་མི་འགལ་བ་བཞིན་ འོ།།

གཉིས་པ་ཡུལ་ལ་ཉ་ཅང་གྲུབ་བ་ནི། སྤང་མི་སྤང་ཆ་གཉིས་མེད་ན་ངེས་མ་ངེས་ཆ་གཉིས་འགལ་ལོ་ཞེ་
ན།

སྤང་བ་རྗེས་ཀྱི་ཡུལ་དང་ངེས་པ་གཞན་(179-4-5)སེལ་གྱི་ཡུལ་གྱི་དང་པས་མི་མཚུངས་སོ། །

གསུམ་པ་དེས་ན་མངོན་སུམ་མ་ངེས་པར་བྱུང་བ་⁽¹²⁾པ་ལ་གསུམ་ལས་དང་པོ་མ་ངེས་པར་བྱུང་བའི་
འབྲང་བ་དངོས་ནི།

དེས་ན་མངོན་སུམ་ཚད་མ་ཡང་། །རྟོག་མེད་ཡིན་སྲིད་ངེས་མི་དགོས། །

(12) RT(P) : འགྲུར་

M2 【論証因は】存在するが必要性はない【という論難】を斥ける

〔対論者：〕直接知覚によって〈青いもの〉の顕現が成立しているときには、〔論証因の〕主題所属性を確定するための認識手段によって〔、その〕〈青いもの〉が〔同時に〕〈無常なもの〉であること〔も〕直接的に理解されてしまう。従って、〈青いもの〉を把握している〔直接知覚〕において潜在的に〈無常なもの〉の顕現が成立することになる。故に、同一存在であるという論証因は必要のないものになってしまうであろう。

〔サバン：〕〔確かに、〈青いもの〉の顕現において〕〈無常なもの〉〔も〕顕現するということは〔既に直接知覚のレベルでは〕成立しているけれども、〈他者の排除〉のレベルで〔それを〕論証する〔必要がある〕のである。

L2 遍充関係について妥当ではない【という論難】を斥ける

M1 対象を有するもの（=意識）について過大適用【の誤謬】が帰結する【という論難を斥ける】

〔対論者：〕〔もしあなたの言うように〕同一実体に、顕現している〔部分〕と顕現していない〔部分〕という二つの部分が存在しない〔とするならば、それ〕と同様に、推理およびそれを感じている自己認識の二つについてもまた、言葉の意味対象を把握している〔部分（=分別知）〕と、それを把握し得ない〔直接知覚としての自己認識の〕部分という二者が存在していることは矛盾する〔ことになる〕。なぜならば、〔それらは〕同一実体であるからである。

〔サバン：〕矛盾しない。なぜならば、同じ一つの知が、内部へ視線を向ける自己認識としては〔自らの〕〈顕現〉を通じて〔自分自身に〕働きかけ、外界に視線を向ける推理としては他者を排除することを通じて〔対象に〕働きかけるからである。〔それはちょうど一つの〕灯下に、自分を明るくする〔働き〕と闇を払いのける〔働き〕とがあるのが矛盾しないのと同様である。

M2 対象に関して過大適用【の誤謬】が帰結する【という論難を斥ける】

〔対論者：〕〔対象自体に〕顕現している〔部分〕と顕現していない部分の二つが存在しないとすれば、〔その対象において〕確定されている〔部分〕と確定されていない〔部分〕という二つの部分があるというのは矛盾する。

〔サバン：〕〈顕現〉は実体を対象とし、確定は〈他者の排除〉を対象としている〔ので、それらは対象が〕別である。従って同じこと（=〈顕現〉に二つの部分がないのと同様に確定にも二つの部分がないということ）にはならない。

G3 従って、直接知覚は〔対象を〕確定しないということが成立する⁽²²⁾

H1 【対象を】確定しないことが成立する根拠の本論

従って、直接知覚としての正しい認識手段も無分別知であるの

དེའང་སྟོང་སྟག་ཕྱེད་དང་བཞི་(179-4-6)པ་ཡས།

ད་ནི་ཇི་ལྟར་ས་ངེས་པ་མངོན་སྲུང་གྱིས་ཀྱང་བརྒྱུང་བ་ཡིན་ཞེ་ན། མངོན་སྲུང་ནི་གང་གིའང་
ངེས་པར་བྱེད་པ་ས་ཡིན་ཏེ།⁽¹³⁾

ཞེས་བྱ་བ་དང་། རྣམ་ངེས་ཡས་ཀྱང་།

བདེ་བ་ལ་སོགས་པ་རྣམས་ཀྱི་བདག་ཉིད་རིག་པ་བརྗོད་པ་དང་ས་འབྲེལ་བ་དེ་ནི་མངོན་སྲུང་
(180-1-1)ཀྱི་ཚད་མ་ཡིན་ནོ།⁽¹⁴⁾

ཞེས་བྱ་བ་དང་། གཏན་ཚིགས་ཐེགས་པར་ཡང་།

དེ་ལ་དང་པོར་ཡུལ་གྱུན་མོང་ས་ཡིན་པ་མཐོང་བ་གང་ཡིན་པ་དེ་⁽¹⁵⁾ཁོ་ན་ཚད་མ་ཡིན་
ནོ།⁽¹⁶⁾

ཞེས་གསུངས་པ་ལྟར་རོ། །

གཉིས་པ་དེ་ལ་མི་འབྲས་པ་སྤང་བ་ལ་གཉིས་ཡས་དང་པོ་ལྷུང་དང་འགལ་བ་སྤང་བ་ནི། (180-1-2)

རྣམ་འབྲེལ་ཡས།

ཡོད་མེད་ངེས་པའི་འབྲས་ཅན་མིན། །ཕྱིར་ན་ཚད་མ་ཉིད་ས་ཡིན། །⁽¹⁷⁾

ཞེས་བཤད་པ་དང་འགལ་ལོ་ཞེ་ན། མི་འགལ་ཏེ་རང་ངམ་གཞན་ཡས་ངེས་པ་འདྲིན་རྣམས་པའི་ཕྱིར་རོ། །

(13) PVS.V.31.20~22 : कथमिदानीमनिश्चीयमानं प्रत्यक्षेणापि गृहीतं नाम । न प्रत्यक्षं कस्य-
चिन्निश्चायकम् । तद्यमपि गृह्णाति तत्र निश्चयेन ॥

(14) PVin.I, 62.27~29. Cf. PVin.I, 62.25~27 : དེ་ཕྱིར་དེ་དག་རང་རིག་ནི། བརྗོད་དང་རྗེས་འབྲེལ་ཅན་ས་
ཡིན། (k. 21: = PV.III.249cd: तेषामतः स्वसंवित्तिर्नाभिजल्पानुषङ्गिणी ।) བད་མི་རྣམས་པའི་ཕྱིར་ན་
བདེ་བ་ལ་སོགས་པ་རྣམས་ཀྱི་བདག་ཉིད་རིག་པ་བརྗོད་པ་དང་ས་འབྲེལ་བ་དེ་ནི་མངོན་སྲུང་གྱི་ཚད་མ་ཡིན་ནོ། །

(15) RTR, RT(M), RT(P) omit དེ་

(16) HB.32.24~25 : तत्र यदाद्यमसाधारणविषयं दर्शनं तदेव प्रमाणम् ।

(17) PV.200ab : सदसन्निश्चयफला नेति स्याद् वाऽप्रमाणता ॥

で、〔対象を〕確定する必要はない。

そのことはまた、『プラマーナ・ヴァールティカ』第一章自注にも、

(対論者：) それでは直接知覚によって把握されても〔対象が〕確定されないのはどうしてか。

(ダルマキールティ：) 直接知覚はいかなるものをも確定する〔働き〕はない〔からである〕。

とあり、また『プラマーナ・ヴィニシュチャヤ』にも、

言語表現と結びついていない、安楽であることなどの自己の〔状態の〕認識は、直接知覚としての正しい認識手段である。

とあり、また『論証因小論』にも

そのなかで、〔他のものと〕共通でない (=限定性を持った⁽²³⁾) 対象の最初の知覚のみが正しい認識手段である。

と説かれている通りである。

H2 以上〔の見解〕に対する妥当ではない〔という論難〕を斥ける

I1 聖典と矛盾する〔という論難〕を斥ける

(対論者：) 〔あなたの言うように、直接知覚には対象を確定する働きがないとするならば、〕『プラマーナ・ヴァールティカ』に

有無を確定するという結果を持たないが故に、正しい認識手段ではない⁽²⁴⁾。

と説明されていることと矛盾する。

(サパン：) 矛盾しない。なぜならば、〔正しい認識手段は〕自分自身に基づいて、あるいは他〔の知〕に基づいて確定〔知〕を引き出すことができるものであるからである⁽²⁵⁾。

གཉིས་པ་དངོས་སུ་མ་ངེས་ན་ཚད་མར་འགལ་བ་སྒྲུབ་པ་ལ་གཉིས་ལས་(180-1-3)དང་པོ་ཚད་པ་
དགོད་པ་ནི། གལ་ཏེ་དངོས་སུ་ངེས་པ་མེད་ན་ཚད་མར་འགལ་ལོ་ཞེས། །

གཉིས་པ་ལན་ལ་གཉིས་ཏེ། གཞན་གྱི་ལན་དགག་པ་དང་། རང་གི་ལན་གདབ་པའོ། །
དང་པོ་ནི་ཁ་ཅིག་ན་རེ་ངེས་པ་ལ་གཉིས་ལས་རྟོག་པས་ངེས་པ་མེད་ཀྱང་རྟོག་མེད་ཀྱིས་ངེས་(180-1-4)པ་ཡོད་
དེ་མངོན་སུམ་གྱིས་སྐྱོ་འདོགས་གཅོད་པའི་ཕྱིར་རོ་ཞེ་ན།

སྐྱོ་འདོགས་ཚད་པ་དེ་ཅི་སྒྲུབ་བ་ཙམ་ལ་ཟེར་ན་མངོན་སུམ་ལ་སྐྱོ་འདོགས་མ་ཚད་པ་མི་སྲིད་ལ། གཞན་
སེལ་གྱིས་སྐྱོ་འདོགས་གཅོད་པ་ལ་ཟེར་ན། རྗེས་དཔག་ལྟར་རྟོག་པ་ལས་མ་འདས་སོ། ། དེས་ན་ངེས་(180-1-
5)པའི་མིང་བཏགས་ན་འཇིག་ཤོ། །

གཉིས་པ་རང་གི་ལན་ལ་གཉིས་ལས་དང་པོ་མངོན་སུམ་གྱིས་དགག་སྐབ་བྱེད་པའི་རྒྱལ་ནི། འོ་ན་མངོན་
སུམ་ཚད་མ་གང་། (18) དེས་དགག་སྐབ་ཇི་ལྟར་བྱེད་ཅེ་ན།

མངོན་སུམ་རྟོག་བྲལ་མ་འབྲུལ་བ། ། ཉིད་ཀྱིས་ཚད་མ་བྲལ་པ་ཡིན། ། (180-1-6)

དེའམ་གཞན་གྱི་སྐྱོབས་ཉིད་ལས། ། ངེས་པའི་དབང་གིས་དགག་སྐབ་བྱེད། །

བྲལ་པ་མངོན་སུམ་གྱིས་མཐོང་བ་ན་ཁ་དོག་དང་མི་རྟག་པ་གཉིས་ཀ་མངོན་སུམ་ལ་སྒྲུབ་བས་མངོན་སུམ་སྐྱོན་
པའི་རྗེས་ལ་(19)ཚད་མར་སོང་བ་ན་མི་རྟག་པའི་རྗེས་ལའང་ཚད་མར་སོང་བ་(180-2-1)དེ་ཉིད་ཡིན་ནོ། །

འོ་ན་ཀྱང་ཁ་དོག་གི་ལྡོག་པ་ལ་འབྲུལ་པའི་རྒྱ་མེད་པ་དང་། རྟོགས་(20)པའི་རྒྱུན་གོམས་པ་གསལ་བ་
དང་། ཡིད་གཏད་པ་ཡོད་པས་རང་སྐྱོབས་ཀྱིས་ངེས་པར་འདྲིན་རྒྱས་ཏེ།

(18) RTR, RT(M) omit |.
(19) RTR, RT(M) : ལས་.
(20) RTR, RT(M) : རྟོག་.

I2 直接〔対象を〕確定しないならば、正しい認識手段であることと矛盾する〔という論難〕を斥ける

J1 〔対論者の〕論難を提示する

〔対論者：〕もし〔その知が〕直接〔対象を〕確定するのでないとするならば、〔それが〕正しい認識手段であることと矛盾する。

J2 返答

K1 別の人の返答を斥ける

〔ある者⁽²⁶⁾：〕確定にも二種類あり、〔直接知覚には〕分別知による確定はないけれども無分別知による確定がある〔ので矛盾はない〕。なぜならば、直接知覚は虚構を否定排除するものであるからである。

〔サバン：〕「虚構を否定排除している」というのを、何であれ顕現している限りのもののことを指して言っているとすれば、〔直接知覚でないものも含めて全ての〕無分別知⁽²⁷⁾は虚構を否定排除している〔ことになってしまうであろう〕。また、もし〈他者の排除〉によって虚構が否定排除されることを指して言っているとすれば、〔そのような知は、〕推理と同様に分別知に他ならないであろう。従って〔、いずれにせよ直接知覚に〕「確定」という名前を与えるとするならば、〔それが直接知覚であるということ〕は崩れ去ってしまうであろう。

K2 われわれの返答

L1 直接知覚によって否定・定立が行なわれる仕方

〔対論者：〕それでは、正しい認識手段としての直接知覚とはどのようなものであり、それによって〔対象の〕否定と定立とはどのように行なわれるのか。

〔サバン：〕

錯誤していない無分別知である直接知覚は、〔その知〕だけで正しい認識手段であることが成立する。その〔知〕あるいは他〔の知〕から〔引き出される〕確定〔知〕によって〔当該対象についての〕否定と定立とが行なわれる。

壺が直接知覚によって知覚されたとき、〈色彩〉と〈無常なもの〉とは両者とも直接知覚に顕現しているので、直接知覚が〈青いもの〉の実体に対して正しい認識手段となっているとき、〔それは同時に〕〈無常なもの〉の実体に対しても正しい認識手段となっている。これが〔正しい認識手段としての直接知覚〕である。

しかしながら〈青いもの〉の〔他者からの〕〈異なり〉については、〔認識を〕錯誤させる原因がないこと、認識の補助条件である習熟性や明かり、注意を向けること〔などの諸条件が〕揃っているため、その知の力だけで確定〔知〕を引き出すことができる。それは〔『プラマーナ・ヴァールティカ』に〕

མངོན་སུམ་གྱིས་ནི་བཟུང་བ་ལ། ། རྒྱད་པར་ཆ་གས་(180-2-2) རྣམ་སྤངས་པ་(21) །

རྒྱད་པར་གང་ལ་རྟོགས་པ་ཡི། ། རྣམ་ཡོད་དེ་ནི་རྟོགས་པར་འགྱུར། །(22)

ཞེས་པ་ལྟར་རོ། །

མི་རྟག་པའི་ལྡོག་པ་ལ་འདྲ་བ་གཞན་འབྱུང་བ་ལ་སོགས་པ་འབྲུལ་པའི་རྒྱ་མཚན་གྱིས་ཟིན་པས་རང་
སྤྱོད་ས་གྱིས་ངེས་མི་རྣམས་པའི་ཕྱིར་གཞན་ལས་ངེས་ (180-2-3) དགོས་ཏེ།

གཞུགས་ཚེས་མཐུན་པ་(23) མཐོང་བ་ལས། ། ཉ་ཕྱིས་ལ་དུལ་རྣམ་པ་ལྟར། །

གལ་ཏེ་འབྲུལ་པའི་རྒྱ་མཚན་གྱིས། ། ཡོན་ཏན་གཞན་སྤྱོད་མི་བྱེད་ན། །(24)

ཞེས་བྱ་བ་དང་།

དེ་ཕྱིར་དངོས་པོ་མཐོང་བ་ཡི། ། ཡོན་ཏན་མཐའ་དག་མཐོང་བ་ཉིད། །

འབྲུལ་(180-2-4)པས་ངེས་པར་མི་བྱེད་པས། ། བསྐྱབ་པ་རབ་ཏུ་འཇུག་པ་ཡིན། །(25)

ཞེས་གསུངས་པ་ལྟར་རོ། །

གཉིས་པ་ངེས་ན་མངོན་སུམ་དུ་འགལ་བ་ལ་བཞི་ཏེ། ལྗོ་ལྡོག་ངེས་པ་རྟོག་པར་བསྐྱབ་པ། །ངེས་པས་སྐྱོ་
འདོགས་གཅོད་པའི་ཚུལ། །རྗེས་སུ་སྐྱེས་པའི་ངེས་ཤེས་ (180-2-5) སེལ་བར་འགྱུར་བ། །(26) དེ་སྐོབ་དཔོན་གྱི་
དགོངས་པ་ཡིན་པའོ། ། དང་པོ་ནི། གལ་ཏེ་སྐད་ཅིག་གི་ལྡོག་པ་ལ་གཞན་སེལ་འཇུག་མོད། ལྗོན་པའི་རང་ལྡོག་
(27)ངེས་པ་འདི་རྟོག་པ་ཡིན་པས་མངོན་དུ་མི་རུང་ལ། རྟགས་ལ་མ་ལྟོས་པས་རྗེས་དཔག་ཀྱང་མ་ཡིན་ (180-2-
6) གྱི། འགལ་ལྡོག་མ་བཅད་པས་གཞན་སེལ་དུ་འདར་མི་རུང་ངོ་ཞེ་ན།

(21) RTR, RT(M) : རྣམས་སྤངས་པ།. サンスクリット語のvivarjitelは、チベット語のnam spangs paに対応する。またPVのチベット語訳では、第1句と第2句が逆になっている。

(22) PV.58 : प्रत्यक्षेण गृहीतेऽपि विशेषेऽश्विविर्जिते । यद्विशेषावसायेऽस्ति प्रत्ययः स प्रतीयते ॥

(23) RTR, RT(M) : བར་. PVのチベット語訳もབ་.

(24) PV.44 : नो चेद् भ्रान्तिनिमित्तेन संयोज्येत गुणान्तरम् । शुक्तौ वा रजताकारो रूपसाध म्यदर्शनात् ॥

(25) PV.45 : तस्माद् दृष्टस्य भावस्य दृष्ट एवाखिलो गुणः । भ्रान्तेर्निश्चीयते नेति साधनं सम्प्रवर्तते ॥

(26) RTR, RT(M) omit ||; RT(P) : |.

〔ある対象が〕直接知覚によって把握されるとき、〔そのものの有する〕諸部分としての特質は捨て去られ〔全体として把握されるが、それらの諸〕特質のうち、それを認識するための条件の揃っているもののみが認識されるのである⁽²⁸⁾。

と説かれている通りである。

〔一方〕〈無常なもの〉の〔他者からの〕〈異なり〉については、〔現在のものと〕相似した別のものが〔後続の刹那に中断なく〕生じ〔続け〕ているなどの錯誤の原因によって捉えられているので、その知自身の力に基づいては〔その〈異なり〉を〕確定することはできず、従って別の知 (=推理知) によって確定する必要がある。〔それは『プラマーナ・ヴァールティカ』に〕

例えば、色形の類似が知覚されたことにより貝殻に対して銀であるかのような表象が〔結び付けられる場合の〕ように、錯誤の原因によって他の〔誤った〕属性が付託される。もしそうでないとするならば、〔直接知覚によって全てが認識され、他の認識の起こる余地はなくなってしまうであろう⁽²⁹⁾〕。

とあり、また、

従って、直接知覚された実在の諸属性は全て知覚されるが、錯誤があるために〔それらの属性全てを〕確定することはできない。それ故、〔その錯誤を排除するために正しい〕論証因〔に基づく、推理という他の認識手段〕が〔有効に〕機能するのである。

と説かれている通りである。

L2 〔対象を〕確定するならば、直接知覚であることと矛盾する

M1 〈青いもの〉の〈異なり〉を確定する知は分別知であると論証する

〔対論者：〕刹那的存在の〔他者からの〕〈異なり〉については〔推理されるべきものである〕ので、錯誤を排除するために〕〈他者の排除〉が働く〔必要がある〕けれども、〔直接知覚されるだけで理解される〕〈青いもの〉〔であるという〕〈異なり〉自身⁽³⁰⁾を確定する〔知〕は、分別知であるので直接知覚知ではなく、また論証因に依拠していないので推理知でもなく、対立項 (=それでないもの) を否定排除していないので〔他者の排除〕でもない。

སྔོན་པོའི་ལྷོག་པ་ངེས་པ་ནི། །རྟོག་པ་ཡིན་ཕྱིར་གཞན་སེལ་ཡིན། །

འཁྲུལ་ནས་འཇུག་ཡུལ་རང་མཚན་ཐོབ། །ནང་དུ་རང་རིག་ཚད་མར་འདོད། །

དོན་ཆ་གས་སྤྱི་མ་བྱེ་བ་མངོན་ (180-3-1) སྤྱི་གྱིས་མཐོང་ནས་དེའི་རྗེས་ལ་⁽²⁸⁾ བྱང་བའི་ཤེས་པས་སྔོན་པོའི་
ཞེས་སྔོ་ལྷོག་སྤྱིའི་ཚུལ་དུ་ཤེས་པ་དེ་རྟོག་པ་ཡིན་ལ་རྟོག་པ་དེས་འགལ་ལྷོག་གཞན་གྱི་ཆ་གས་སྤྱི་མ་བཏགས་
པ་དེ་ཉིད་ཀྱིས་སྔོ་མིན་བཅད་པས་གཞན་སེལ་གྱི་ཡུལ་ཅན་ཡིན་ཞིང་སེལ་བ་ལ་དངོས་ཡུལ་མེད་ (180-3-2)
པས་འཇུག་ཡུལ་སྔོན་པོའི་རང་མཚན་ཉིད་ཐོབ་ལ་ཁ་ནང་ལྷ་རང་རིག་ཡིན་པས་མ་འཁྲུལ་བ་ཡིན་ནོ། །

དེའང་མདོ་ལས།

རྟོག་པའང་རང་རིག་ཉིད་དུ་འདོད། །དོན་ལ་མ་ཡིན་དེ་རྟོག་ཕྱིར། །⁽²⁹⁾

ཞེས་བྱ་བ་དང་། རྣམ་འགྲེལ་ལས།

མཐོང་བ་འགལ་ལའང་ཤེས་ (180-3-3) པ་གང་། །སྤྱི་ཡི་དོན་ཅན་རྣམ་རྟོག་པ། །

གཞན་གྱི་⁽³⁰⁾ ཆ་སྔོ་མ་བཏགས་པ། །དེ་ཙམ་སེལ་བའི་སྤྱོད་ཡུལ་ཅན། །⁽³¹⁾

ཞེས་གསུངས་པས་སོ། །

(27) RTR, RT(M) : རང་བཞིན་ལྷོག་ .

(28) RTR, RT(P), RT(M) : ལས་ .

(29) PS.7ab : कल्पनापि स्वसंवित्ताविष्टा नार्थं विकल्पनात् ।; 本文テキストをVasudharakṣita 訳に基づいて訂正。RTR, RT(M) 7b: དོན་ལས་མ་ཡིན་དེ་* རྟོག་ཕྱིར།།; RT(P) : དོན་ལས་མ་ཡིན་དེར་ རྟོག་ཕྱིར།།; Kanakavarman 訳 : དོན་ལ་མ་ཡིན་དེར་རྟོག་ཕྱིར།།;

(30) RTR, RT(M) : གྱིས་ . PVのチベット語訳も 同

(31) PV.48 : क्वचिद् दृष्टेऽपि यज्ज्ञानं सामान्याथं विकल्पकम् । असमारोपितान्यांशे तन्मात्रापोहगोचरम् ॥

(サパン：)

〈青いもの〉の〈異なり〉を確定する〔知〕は分別知であるので
〈他者を排除するもの〉である。〔その確定知に現われている形
象を意識外に実在するものであると〕錯誤して〔活動を起こすこ
とによって〕志向対象である個別相に到達する。〔その分別知は
意識の〕中においては自己認識〔であり、従って〕正しい認識手
段であると認められる。

諸部分に分割されることのない実在物が〔ありのままに〕直接知覚によって知覚されたのち、後続の知によって「〔これは〕青いものである」というように〈青いもの〉の〈異なり〉が普遍的な仕方で（=他のものと共通する相のもとに）理解される。また、その分別知によって対立項（=それでないもの）としての他者が〔対象の在り方の〕一面として虚構されていない〔場合〕、まさにその〔知〕によって〈青いものでないこと〉が否定排除されている〔ことになる〕ので、〔その知は〕〈他者を排除すること〉によって対象を有する（=認識する）ものである。また〈他者の排除〉には直接的な対象は存在しないので、〔錯誤して活動を起こしたとき〕志向対象である〈青いもの〉の個別相自体に到達する。〔その分別知は、それ自身に即して言えば〕内界を見る自己認識〔としての正しい認識手段の直接知覚〕であるので錯誤したものではない。そのことは『プラマーナ・サムッチャヤ』にも、

分別知もまた自己認識にほかならないと認められる〔が、しかし外界の〕実在物に対して〔自己認識であるわけ〕ではない。なぜならば、〔分別知は〕それ（=外界の実在物）を分別するものであるからである。

とあり、また『プラマーナ・ヴァールティカ』には、

（対論者：）また、ある〔対象〕が〔直接知覚によって〕知覚された場合でも、〔その直後に、誤った内容が虚構されることなく対象を確定する〕分別知〔が生じる〕ことがあるが、〔その場合には虚構は存在しないのでそれを排除しているとは言えず、従ってそれは〕普遍を対象としている〔はずである〕。

（ダルマキールティ：）〔その知は、それ〕以外のものが虚構されていない場合、それ（=それ以外のもの）全ての排除を働きの対象としているのである。

と説かれているからである。

གཉིས་པ་ནི།

གང་ལ་ངེས་པ་ཡོད་པ་དེས། །སྐྱོ་འདོགས་བཅད་པར་ཤེས་པར་བྱ། །

ངེས་པ་དང་སྐྱོ་འདོགས་ (180-3-4) གཉིས་ལྷན་ཅིག་མི་གནས་པའི་འགལ་བ་ཡིན་པས་ངེས་པ་ནམ་ཡོད་པ་ན་
སྐྱོ་འདོགས་མེད་པ་ཡིན་ཏེ།

ངེས་པ་དང་ནི་སྐྱོ་འདོགས་ཡིད། །གནོད་བྱ་གནོད་བྱེད་ངོ་བོའི་ཕྱིར། །

འདི་ནི་སྐྱོ་འདོགས་དབེན་པ་ལ། །འཇུག་ཅེས་བྱ་བར་ཤེས་པ་ཡིན། །⁽³²⁾

ཞེས་གསུངས་ (180-3-5) སོ། །

གསུམ་པ་ནི་གལ་ཏེ་སྐྱོ་འདོགས་ཀྱིས་དབེན་པ་ལ་འཇུག་མོད་ཇིས་སུ་སྐྱེས་པའི་ངེས་ཤེས་སེལ་བའི་ཡུལ་
ཅན་མ་ཡིན་ཞོ་ཞེ་ན།

སྐྱོན་མེད་དེ་བྱེད་དང་བཞི་པ་ལས།

དེས་དབེན་པ་ཉིད་སེལ་བ་ཡིན་ནོ། །⁽³³⁾

ཞེས་གསུངས་སོ། ། དེས་ན་མངོན་སུམ་གྱི་ཇིས་ལ་ (180-3-6) བྱང་བའི་ངེས་ཤེས་ཀྱིས་ཁ་དོག་ངེས་ལ་སྐྱད་ཅིག་
མ་མ་ངེས་པའི་ཕྱིར་སེལ་བའི་ཡུལ་ཅན་ཡིན་གྱི་སྐྱང་བའི་ཡུལ་ཅན་མ་ཡིན་ནོ། །

བཞི་པ་ནི།

ངེས་པ་དང་ནི་སྐྱོ་འདོགས་ཡིད། །གཉིས་ཀ་སེལ་བས་འཇུག་པའི་ཕྱིར། །

དེ་དག་མངོན་སུམ་མ་ཡིན་ཞེས། །རིགས་པ་ (180-4-1) མཁྱེན་པས་གསུངས་པ་ཡིན། །

ངེས་པ་དང་སྐྱོ་འདོགས་གཉིས་ཀའང་གཞན་སེལ་གྱི་སྐྱོ་ནས་འཇུག་གི། མངོན་སུམ་གྱིས་མི་འཇུག་གོ་ཞེས་རིགས་
པའི་དེ་ལོ་ན་ཉིད་མཁྱེན་པས་གསུངས་སོ། ། དེས་ན་མངོན་སུམ་གྱིས་སྐྱོ་ལྷོག་ངེས་ཞེས་བཟོད་ (180-4-2) ཀྱང་

(32) PV.49 : निश्चयारोपमनसोर्बाध्यबाधकभावतः । समारोपविवेकेऽस्य प्रवृत्तिरिति गम्यते ॥

(33) PVS.28.19 : तद्विवेक एव चान्यापोहः ।

M2 確定知が虚構を否定排除する仕方

〔対象を〕確定している〔知〕は〔同時に〕虚構を否定排除して
いると知るべきである。

〔対象を〕確定している〔知〕と〔誤った内容を〕虚構している〔知〕という二者は共存不可能なる対立項であるので、〔ある知が対象を〕確定している場合、〔その知は誤った内容を〕虚構していることはない。〔そのことは『プラマーナ・ヴァールティカ』に〕

〔対象を〕確定している〔意識〕と〔誤った内容を〕虚構している意識とは、排斥するもの・排斥されるものの関係にあるので、確定知〔が現にあるならば、それ〕は虚構されていないものに対して機能していると知られる。

と述べられている。

M3 後続の確定知は〈他者を排除するもの〉となる

〔対論者：〕〔直接知覚の〕後に生じる確定知は、確かに〔誤った内容の〕虚構されていない〔対象〕に対して働くけれども、〔それは虚構を〕排除することによって対象を有している（＝認識している）ことにはならない。

〔サパン：〕過失はない。〔なぜならば、〕『プラマーナ・ヴァールティカ』第一章自注に、

それ（＝誤った虚構）が行われていない、ということは、〈他者を排除している〉ということなのである。

と述べられている〔からである〕。従って、直接知覚の後に生じる確定知は〔その対象の〕色彩を確定するが、〔その対象が〕刹那的な存在であることは確定しないので、〔確定知は対象の在り方を選択的にしか認識しないのであり、従って〕〈他者を排除すること〉によって対象を有する（＝認識する）ものであって、〔対象が知に全面的に〕〈顕現すること〉によって対象を有する（＝認識する）ものではない。

M4 以上の見解は論師の説かれたことである

〔対象を〕確定する意識と〔誤った内容を〕虚構する意識とは、
二つとも〈他者を排除すること〉によって〔対象に向かって〕働
きかけるので、それらは直接知覚ではない、と論理の智者は説か
れた。

〔対象を〕確定する意識と〔誤った内容を〕虚構する意識とは、二つとも〈他者を排除すること〉によって〔対象に〕働きかけるのであって、直接知覚によって〔対象に〕働きかけるのではない、と論理の智者（＝ダルマキールティ）は説かれた。従って、直接知覚によって〈青いもの〉の〈異なり〉が確定される、と述べられていたとしても〔、そ

རྟོག་པས་ཡིན་ནོ། །

གསུམ་པ་སྐྱང་ཡུལ་ལ་སྐྱ་རྟོག་མི་འཇུག་པའི་ཚུལ་ལ་གསུམ་ལས་དང་པོ་སྐྱང་ན་དགག་སྐབ་ཅིག་ཅར་
རྟོགས་པར་ཐལ་བ་ནི། གལ་ཏེ་སྐྱ་དང་ངེས་པ་ཡང་དངོས་པོ་སྐྱང་བས་འཇལ་ན་སྐྱོན་ཅི་ཡོད་ཅེ་ན།

སྐྱ་རྟོག་སྐྱང་བས་འཇལ་ན་ནི། ། (180-4-3) དགག་སྐབ་ཅིག་ཅར་རྟོགས་པར་འགྱུར། །

བུམ་པའི་བུས་པ་དང་མི་རྟོག་པ་དོན་ངོ་བོ་དབྱེར་མེད་ཡིན་པས། བུབ་ན་ཅིག་ཅར་བུབ་པ་དང་འགོག་ན་ཅིག་
ཅར་ཁེགས་པར་འགྱུར་ཏེ། དོན་ལ་ཁྱད་པར་མེད་པའི་ཕྱིར་རོ། །

གཉིས་པ་དོན་གཅིག་གི་མིང་ཐམས་ཅད་ (180-4-4) རྣམ་གྲངས་པ་ཡིན་པ་ནི།

གཅིག་ལ་དུ་མར་བཏགས་ན་ཡང་། ། རྣམ་གྲངས་ཡིན་གྱི་ཐ་དད་མིན། །

དོན་ཁྱད་པར་མེད་པ་ལ་སྐྱ་དང་ངེས་པ་ཇི་སྟེན་ཅིག་གིས་བརྗོད་ཀྱང་དོན་དེ་ཉིད་ལས་མ་འདས་པས་མིང་གི་རྣམ་
གྲངས་ཁོ་ནར་འགྱུར་གྱི། ཐ་དད་ཀྱི་མིང་དང་ཐ་སྐྱད་ (180-4-5) ཐོབ་མི་སྲིད་དེ། རྣམ་འགྲེལ་ལས།

གཞན་དུ་དངོས་པོ་གཅིག་བུ་ལ། ། སྐྱའམ་སྐྱོ་གཅིག་གིས་ཁྱབ་ན། །

ཡུལ་གཞན་མེད་པ་⁽³⁴⁾ དེ་ཡི་ཕྱིར། ། རྣམ་གྲངས་པ་ནི་ཉིད་དུ་འགྱུར། །⁽³⁵⁾

ཞེས་གསུངས་སོ། །

(34) PV.Tib : གཞན་ཡུལ་མ་ཡིན་

(35) PV.51 : अन्यथैकेन शब्देन व्याप्त एकत्र वस्तुनि। बुद्ध्या वा नान्यविषय इति पर्यायता
भवेत् ॥

れは、直後に生じる] 分別知によって [確定される、という意味に解さなければならない]。

H3 言葉および分別知は顕現対象に対して働きかけることはない

I1 [言葉や分別知の対象が] 顕現するとすれば、[全ての属性の] 否定あるいは定立が [それぞれ] 同時に理解されることになる [という過失がある]

(対論者:) 言葉や確定 [知] もまた、実在が [知に] 顕現することによって [その対象を言表する、あるいは] 認識するとしたら、どのような過失があるのか。

(サパン:)

言葉および分別知は、[対象が知に] 顕現することによって [その対象を] 認識するのだとすれば、[実在の有する全ての<異なり>の] 否定が [全て] 同時に理解され、あるいは [それらの] 定立が [全て] 同時に理解されることになってしまうであろう。

壺 [という実在個物] において <作られたもの> や <無常なもの> [などの <異なり>] は実在物 [としては] 存在を分離することのできないものであるので、[一つの <異なり>] が 成立すれば、同時に [全ての <異なり>] が 成立し、[一つの <異なり>] の 存在を否定するならば、同時に [全ての <異なり>] の 存在が否定されることになってしまうであろう。なぜならば、[一つの実在物に存する全ての <異なり>] は 実在物においては違いがないからである。

I2 同一の実在物を [指示している] 名称は全て同義語である [ことになってしまう]

一個のものに複数 [の名前] を付けたとしても、[それらの名前は] 同義となって、異なった [意味を持た] ない [ことになってしまう] であろう。

分割することのできない実在物⁽³¹⁾を、[その実在物に対して名付けられた複数の] 言葉や確定 [知] のうちのいずれによって言表したとしても、その同じ実在物以外のもの [を指すこと] はないので、[それらは] まさに同義語になってしまい、異なった名称や異なった言語行為は得られないことになってしまうであろう。[それは] 『プラマーナ・ヴァールティカ』に、

もしそうではなく、一つの実在を、ある一つ言葉や一つの意識 (=確定知) が覆い (=捉え) 尽くしてしまうとするならば、[その実在には、未だ認識されていない] 他の対象はない [こととなる] ので、[一つの実在に対して用いられる言葉や確定知は全て] 同義になってしまうであろう。

と説かれている [通りである]。

གསུམ་པ་ལྷོག་པས་འབྱེད་ན་སེལ་བར་འགྱུར་བ་ནི། (180-4-6) རོན་རོ་མོ་དབྱེར་མེད་ཀྱི་གཅིག་ལ་
བྱས་པ་དང་མི་རྟག་པ་ལ་སོགས་པ་སྐྱེ་བ་དང་ཀྱིས་བརྗོད་ཀྱང་རྣམ་གྲངས་པར་མི་འགྱུར་ཏེ་དེ་དག་ལྷོག་པ་ཐ་
དང་པའི་སྤྱིར་རོ་ཞེ་ན།

ལྷོག་པས་འབྱེད་ན་སེལ་བ་ལ། །དངོས་པོའི་མིང་གིས་བརྟགས་པར་ཟད། །

དེ་ལ་སྣང་བར་ (181-1-1) རྫོམ་པ་འབྲུལ། །

རོན་གཅིག་ལ་ལྷོག་པ་ཐ་དང་པས། ཞེས་ཟེར་བ་ཉིད་ཀྱིས་གཞན་སེལ་དུ་བྱུབ་པོ། ། ལྷོག་པ་ལ་སྣང་བར་མིང་
འདོགས་པ་ནི་རྟོག་གའི་ཐ་སྣང་མི་ཤེས་པར་ཟད་དོ། །

གཉིས་པ་གཞན་སེལ་ལ་གསུམ་ལས་མཚན་ཉིད་ནི།

དངོས་འགལ་ (181-1-2) བཅད་ནས་འཇུག་པ་ནི། །གཞན་སེལ་ཡུལ་ཅན་ཡིན་པར་བཞེད། །

གཉིས་པ་དེའི་རང་བཞིན་ངེས་པར་བྱ་བ་ལ་གཉིས་ཏེ། སེལ་བའི་རྣམ་གཞག་དང་། དེའི་རབ་དུ་དབྱེ་
བའོ། ། དང་པོ་ལ་གཉིས་ལས་ཡུལ་གྱི་གནས་ལྷགས་ནི།

བརྟགས་སྤྱིར་སེལ་བ་དངོས་ (181-1-3) ཡུལ་མེད། །འབྲུལ་པའི་འཇུག་ཡུལ་རང་མཚན་ཡིན། །

གཞན་སེལ་བརྟགས་པ་ཡིན་གྱི་རོན་ལ་ས་གྲུབ་པས་དངོས་ཀྱི་ཡུལ་མེད་ལ་འབྲུལ་ནས་འཇུག་པ་ན་ཐོབ་པའི་
ཡུལ་རང་མཚན་ཉིད་ཡིན་ནོ། ། རོན་རང་མཚན་དེ་ཡང་བྱས་པ་དང་མི་རྟག་པ་ལ་སོགས་པ་རོན་ལ་ (181-1-4)

I3 [意味は] 〈異なり〉 [の違い] によって区別されると言うならば、〈他者の排除〉 [が言葉や確定知の対象であると認めたこと] になる

(対論者：) 存在を分離できない単一なる実在物は「作られたもの」や「無常なもの」などの相異なった言葉で言表されるけれども、[それらの言葉は] 同義とはならない。なぜならば、それらは [それぞれ他者からの] 〈異なり〉が相異なっているからである。

(サパン：)

[言葉や分別知は実在を対象としているが、それぞれは他者からの] 〈異なり〉 [の違い] によって区別されると言うならば、 [それは] 〈他者の排除〉に対して「実在するもの」という名前を与えているにすぎない。その [〈他者の排除〉] を顕現するものであると思ひなすのは錯誤である。

「実在物としては単一であるが、〈異なり〉が相異なっているので [同一の実在物に対して用いられた複数の言葉は同義語とはならない] 」という [あなたの主張] それ自身が、[言葉の意味対象が] 〈他者の排除〉であることを既に論証しているのである。〈異なり〉に対して「顕現するもの」という名前を与える者は、論理学の用語法を知らないにすぎない⁽³²⁾。

E2 〈他者の排除〉

F1 特質

排中関係にある対立項を断ち切って [対象に] 働きかけるもの (=分別知および言葉) は、〈他者を排除すること〉によって 〈対象を有するもの〉であると [ダルマキールティ論師は] 主張する⁽³³⁾。

F2 本質の確定

G1 〈他者の排除〉 [一般] の設定

H1 対象の存在の仕方

〈他者の排除〉は [意識によって] 構想されたものであるので、 [それは] 直接的な対象⁽³⁴⁾ [として] は存在しない。 [人がそれを] 実在であると] 錯誤して活動を起こした [ときに到達する] 対象は [外界の実在たる] 個別相である。

〈他者の排除〉は [意識によって] 構想されたものであって、実在物においては成立していない。従って [それに対応する] 直接的な対象は存在しないが、 [人がそれを] 実在であると] 錯誤して働きかけたときに到達する [ことになる] 対象は [実在物の] 個別相に他ならない。その実在物の個別相も [どのように存在しているのかと言うと]、〈作られたもの〉や〈無常なもの〉など (=諸属性) は実在物においては相異なることな

ཐ་དང་མེད་པར་གཅིག་ཉིད་དུ་གནས། ཐ་དང་ནམས་པམ་ཚུན་འདྲེ་བ་མེད་པར་ཐ་དང་ཉིད་དུ་གནས་སོ། །

འོན་པར་བཅའ་བའི་སྤྱོད་པ་གཅིག་རྟགས་སུ་འགྱུར་བ་དང་། རྟགས་རྗེས་འགྲོ་མེད་པར་འགྱུར་རོ་ཞེས་
བྱེད་བྲག་པས་བརྗོད་པའི་སྐྱོན་ཇི་ལྟར་སྤང་ཞེ་ན།

འདིའི་ (181-1-5) ལན་ལ་གཉིས་པ་སྐྱོད་འཛིན་སྤངས་ཤེས་དགོས་པ་དེ་བཤད་ན།

རང་མཚན་གཅིག་དང་ཐ་དང་ལ། །སེལ་བའི་འཛིན་སྤངས་སུ་བཞི་སྲིད། །

དོན་རང་མཚན་དེ་ལྟར་གནས་ཀྱང་རྟོག་པས་སྐྱོ་བཏགས་ནས། གཅིག་ལ་ཐ་དང་དང་། ཐ་དང་ལ་གཅིག་དང་།

གཅིག་ལ་ (181-1-6) གཅིག་དང་། ཐ་དང་ལ་ཐ་དང་དུ་འཛིན་པ་སྟེ་སུ་བཞི་སྲིད་པ་ལས། གཅིག་ལ་གཅིག་དང་

ཐ་དང་ལ་ཐ་དང་ནི་གོ་སྐྱེ་ལ་བཞོག་པ་གཉིས་པོ་བཤད་དོ།།

དེ་དག་ལ་གསུམ་གསུམ་ལས་དང་པོ་ཐ་དང་ལ་གཅིག་ཏུ་སྐྱོ་འདོགས་པའི་རྒྱ་མཚན་ནི།

བྱས་⁽³⁶⁾ དང་མཚན་ཉིད་གཅིག་ (181-2-1) པ་ལ།

ཅན་དན་དང་ག་པ་ལ་སོགས་པ་ཡལ་ག་དང་ལྡན་པ་དང་། དཀར་ཟལ་ལ་སོགས་པ་ཞོག་ལ་སོགས་པ་དང་ལྡན་

པར་མཚན་ཉིད་གཅིག་པ་དང་། མེས་སྤེལ་པ་དང་རྒྱས་འཛིན་པ་ལ་སོགས་པར་འབྲས་བུ་གཅིག་པ་⁽³⁷⁾ ཉིད་

གཅིག་ཏུ་འབྱུང་། (181-2-2) པའི་རྒྱ་ཡིན་ཏེ།

དེ་ཕྱིར་གང་དང་གང་ལས་དོན། །ལྟོག་པ་དེ་ཡི་རྒྱ་ཅན་གྱི། །

རིགས་དབྱེ་⁽³⁸⁾

(36) RT(P) : ཉ་

(37) RTR, RT(M) : པར་

(38) PV.41a~c : तस्माद् यतो यतोऽर्थानां व्यावृत्तिस्तन्निबन्धनाः ।जातिभेदाः .

く一つのものとして存在しているが、〔一方〕相異なった諸物 (=諸個物) は、お互いに混交することなく〔完全に〕相異なったものとして存在しているのである。

(対論者：) もし〔あなたが言うように、諸属性が一つのものとして存在している〕ならば、論証の帰結〔となっている実在物〕の一側面が論証因に〔も〕なっているということになってしまうであろうし、〔諸個物が他のものと混交することがないならば、普遍的な関係はあり得ず、従って〕論証因の肯定的・否定的遍充関係〔も〕存在しないことになってしまうであろう、という〔〈他者の排除〉理論に対する〕ヴァイシェーシカ学派の非難をどのようにして回避することができるのか⁽⁶⁵⁾。

H2 意識の把握形態

(サパン：) その答えとして、意識の把握形態を知る必要がある〔ので〕それを説明するならば、

一つの個別相について〔の把握形態二種〕と、相異なった〔複数の個別相〕について〔の把握形態二種〕とで、〈他者の排除〉による〔対象の〕把握形態は四種類である。

実在物の個別相は上述したような仕方では存在しているけれども、分別知が虚構して、

- (1) 一つ〔の個別相〕を相異なった〔複数のもの〕と把握する〔場合〕
- (2) 相異なった〔複数の個別相〕を一つのものとして把握する〔場合〕
- (3) 一つ〔の個別相〕を一つのものとして把握する〔場合〕
- (4) 相異なった〔個別相〕を相異なったものとして把握する〔場合〕

という四つの場合がある。〔その〕うち、(3) 一つのもを一つのものとして〔把握する場合〕と(4) 相異なったものを相異なったものとして〔把握する場合〕とは理解しやすい〔ので〕、逆のもの〔であると把握する、他の〕二つの場合(1) (2) を説明しよう。

I1 相異なった〔複数の個別相〕を同一のものとして把握する場合

J1 相異なったものを同一のものであると虚構する根拠

結果あるいは特質が同一であるものを

梅檀の木やシンシャパー樹などが〈枝〉〔という木の特質を等しく〕備え、また白斑牛〔や黒斑牛〕などが〈喉の垂れ肉〉など〔の牛の特質を等しく〕備えているというように、特質が同一であること、および、火によって〈燃やされること〉、水によって〈湿らされること〉などのように結果が同一であること、この〔二つ〕が〔相異なった複数のものを〕同一のものであると錯誤する原因である。なぜならば、『プラマーナ・ヴァールティカ』に

それ故、諸々の実在物はある特定のものからの〈異なり〉を〔共通に〕有しており〔、その同じく異なり〉〕を根拠として種 (= 共通性) が分節される。

ཞེས་གསུངས་པས་སོ། །

གཉིས་པ་སྐྱོ་འདོགས་པའི་སྐྱིད་རྣམ་པ་ལ་གཉིས་ཏེ། བ་དང་ལ་གཅིག་ཏུ་འབྲུལ་ཚུལ་དང་། དེ་ལ་མི་
འབྲང་པ་སྦྱང་བའོ། ། དང་པོ་ནི།

བག་ (181-2-3) ཆགས་སྐྱོབས་ཀྱིས་གཅིག་ཏུ་འབྲུལ།

ཡལ་ག་དང་ནོག་དང་སྲིག་པ་དང་ངོས་པ་ལ་སོགས་པ་གཞན་སེལ་གཅིག་པའི་ཡུལ་རྣམས་ལ། ཐོག་མ་མེད་
པའི་བག་ཆགས་ཀྱིས་འབྲུལ་ནས་སྐྱི་གཅིག་ཏུ་བརྒྱང་བ་ཡིན་ཏེ། རྣམ་འབྲེལ་ལས།

བ་དང་དངོས་རྣམས་ལ་ (181-2-4) བརྟེན་ནས། ། རོན་གཅིག་ཏུ་ནི་སྦྱང་བའི་སྐྱོ། (39)

ཞེས་བྱ་བ་དང་།

དངོས་རྣམས་ངོ་བོ་འགའ་ཞིག་གིས། ། བ་དང་མིན་པ་ལྟ་བུར་སྦྱང་། (40)

དེ་ལ་བསམ་པའི་དབང་གིས་ན། ། སྐྱི་ཡོད་པར་ནི་རབ་ཏུ་བསྐྱབས། །

དེ་ཡིས་རི་ལྟར་ཀུན་བརྟགས་(41)པ། ། དེ་ནི་དམ་པའི་དོན་ཏུ་མེད། (42) (181-2-5)

གསལ་བ་རྣམས་ནི་རྗེས་མི་འགྲོ། ། རྗེས་འགྲོ་གཞན་ནི་སྦྱང་བ་མེད། (43)

ཅེས་གསུངས་པས་སོ། །

གཉིས་པ་ནི།

བ་དང་མཚུངས་ལ་འབྲས་བུའི་སྐྱོ། ། གཅིག་དང་བ་དང་འགལ་ཞེ་ན། །

འོ་ན་དོན་བ་དང་པར་མཚུངས་པ་ལ་དཀར་ཟལ་དང་ནག་སྐྱར་ལ་གཅིག་གི་སྐྱོ་སྐྱེ་ (181-2-6) ལ། ཏུ་དང་བ་
ལང་ལ་གཅིག་གི་སྐྱོ་མི་སྐྱེ་བ་འགལ་ལོ་ཞེ་ན།

(39) PV.68ab : धिया । एकार्थप्रतिभासिन्या भावानाश्रित्य भेदिनः ॥

(40) PV.69cd : अभेदिन इवाभान्ति भावा रूपेण केनचित् ॥

(41) RTR, RT(M) : वद्वग

(42) PV.70 : तस्या अभिप्रायवशात् सामान्यं सत् प्रकीर्तितम् । तदसत् परमार्थेन यथा संकल्पितं
तया ॥

(43) PV.71ab : व्यक्तयो नानुयन्त्यन्यदनुयायि न भासते ।

と述べられているからである。

J2 〔同一性を〕虚構する意識の形態

K1 相異なったものを同一のものであると錯誤する仕方

潜在記憶の力によって同一のものであると錯誤する。

無限の過去から〔蓄積されてきた〕潜在記憶〔の力〕によって、〔個々の木が〕〈枝〉を、〔個々の牛が〕〈喉の垂れ肉〉を、〔個々の火が〕〈燃やすこと〉を、〔個々の水が〕〈湿らすこと〉を、等々〔、それぞれの〕〈他者の排除〉を等しく有する諸対象を錯誤して〔、それら諸個物が〕同一なる普遍〔を有している〕と把握するのである。

『プラマーナ・ヴァールティカ』に

〔それ以外のものからの〕〈異なり〉を〔等しく〕有している諸実在に基づいて〔同じ〕一つの対象として顕現する意識によって、

と述べられ、また

諸実在は〔それ自体としては相互に異なっているが〕、ある特定の姿に関して〔相互に〕区別のないものであるかのように現れる。〔人々は〕思惟の力によって、それを普遍が存在していると信憑する。〔しかし、〕思惟によって構想された通りのもの（＝実体的普遍）は第一義的な意味での対象としては存在していない。複数の個物〔自身が相互に〕共通する存在者であるはずはなく、また〔個物とは〕別の実体的共通性が〔意識に〕現れることもない。〔従って、実体的普遍は存在しない。〕

と述べられているからである。

K2 それに対する反論を斥ける

（対論者：）

〔すべての実在物は〕等しく相異なっているが、〔それらの〕結果として、同一であるという意識が〔生じる〕場合と相異なったものである〔という意識が生じる〕場合があるのは矛盾である。

それならば、実在物として相異なっているという点では等しいのに、白斑牛と黒斑牛とに対しては同一であるという意識が生じ、馬と牛とに対しては同一であるという意識が生じないのは矛盾している。

རྣམ་ཤེས་དང་ནི་སྣོན་བཞིན་དུ། །ཐ་དད་ཡིན་ཡང་ཁྱད་པར་ཡོད། །

ཡུལ་དང་དབང་པོ་དང་སྣང་བ་དང་ཡིད་ལ་བྱེད་པ་ཐ་དད་ཡིན་ཡང་རྣམ་ཤེས་གཅིག་སྐྱེད་པ་མི་འགལ་བ་དང་།
སྣོན་ཐ་དད་པར་མཚུངས་ (181-3-1) ཀྱང་སྐྱེ་ཏེས་དང་པམ་ཏ་ལ་སོགས་པས་རིམས་ལ་སོགས་པ་ཞི་བར་བྱེད་
ལ་ཞོ་དང་ག་ཞོན་ལ་སོགས་པས་ཞི་མི་རྣམས་པ་བཞིན་དུ་གསལ་བ་ཐ་དད་དུ་ཁྱད་པར་མེད་ཀྱང་དཀར་ཟལ་ནག་
སྐྱར་ལ་སོགས་པས་བ་ལང་གི་སྤྱི་འོ་སྐྱོ་གཅིག་སྐྱེད་ལ་ཏ་དང་ཤིང་ལ་སོགས་པས་མི་སྐྱེད་པ་མི་ (181-3-2)
འགལ་ཏེ། རྣམ་འགྲེལ་ལས།

གཅིག་རྟོགས་དོན་ཤེས་ལ་སོགས་པ། །དོན་གཅིག་བསྐྱབ་ལ་འགའ་ཞིག་ནི། །

ཐ་དད་ཡིན་ཡང་རང་བཞིན་གྱིས། །ངེས་ཏེ་དབང་པོ་ལ་སོགས་པ་བཞིན། །⁽⁴⁴⁾

ཞེས་བྱ་བ་དང་།

དཔེར་སྣོན་ལ་ཅིག་ཐ་དད་ཀྱང་། །སྣོན་ཅིག་པའམ་ (181-3-3) སོ་སོ་ཡིས་⁽⁴⁵⁾། །

རིམས་ལ་སོགས་པ་ཞི་བྱེད་པར། །མཐོང་གི་གཞན་གྱིས་མ་ཡིན་བཞིན། །⁽⁴⁶⁾

ཞེས་གསུངས་པས་སོ། །

གསུམ་པ་དགོས་པ་ནི།

ཐ་དད་རྣམས་ལ་དགག་སྐྱབ་ཀྱི། །བྱ་བ་ཕྱོགས་གཅིག་རྟོགས་པར་འགྱུར། །

ཡུལ་དུས་རྣམས་པ་ཐ་དད་ཀྱི་ཤིང་ (181-3-4) དང་བ་ལང་དང་མེ་ལ་སོགས་པ་ཐ་དད་རྣམས་ལ་སྐྱེ་གཅིག་ཏུ་གོ་
ནས་དགག་སྐྱབ་ཕྱོགས་གཅིག་ཏུ་རྟོགས་པ་ཉིད་དགོས་པ་ཡིན་ཏེ། རྣམ་ངེས་ལས།

དེའི་ཁྱད་པར་གྱིས་རྟོགས་འགྱུར་བ་དག་རབ་ཏུ་བྱེད་⁽⁴⁷⁾

ཅེས་གསུངས་པ་ལྟར་རོ། །

(44) PV.73 : एकप्रत्यवमर्शार्थज्ञानाद्येकार्थसाधने । भेदेऽपि नियताः केचित् स्वभावेनेन्द्रियादि-
वत् ॥

(45) RTR, RT(M) : ཡི་ .

(46) PV.74 : ज्वरादिशमने काश्चित् सह प्रत्येकमेव वा । दृष्टा यथा वौषधयो नानात्वेऽपि न
चापराः ॥

(47) PVinII.30cd. Tib : དེའི་ཁྱད་པར་ནི་རྟོགས་འགྱུར་བ་དག་རབ་ཏུ་བྱེད་ . Cf. PV.41cd. प्रकल्प्यन्ते

(サパン：)

〔複数の相異なった原因から一つの〕認識知〔が生じたり、相異
なった〕葉〔が同一の結果を生じる〕と同様に、相異なったも
のであっても〔一群のものは同一の結果を生じ、他のものはそれ
を生じない、等の〕違いがあるのである。

対象と感覚器官と明かりと注視作用とは相異なっているけれども、〔それらが共同して〕一つの認識知を生じさせることに矛盾はない。また〔個々の〕葉は〔それぞれ、他のものと〕同様、相異なったものであるが、くらら（苦参）やパルパタ³⁶などは発熱などを癒すのに対し、ヨーグルトやかぶら（蔓青）などは〔それを〕癒すことができない〔という限定性が見られる〕。それと同様に、〔諸〕個物は〔相互に〕異なっていることに違いはないが、白斑牛や黒斑牛など〔のある特定の一群の個物〕はく普遍としての牛〕という同じ一つの意識を生じるが、馬と木などは〔普遍としての牛の意識を〕生じないということに矛盾はない。『プラマーナ・ヴァールティカ』に

〔それ自体としては相互に〕異なっているけれども、ある特定の一群のものは同一の判断や〔同一の〕対象認識など、同じ一つの効果を生み出すように本質的に決まっている。感覚器官〔および対象、明かり、注視作用などは相異なっているけれども、対象認識という一つの結果を生むの〕と同様である。

と述べられ、また、

例えば、〔それぞれは〕個別的なものであっても、一緒にか別々にか〔はともかく〕、ある特定の薬草などは発熱を癒すことが経験され、それ以外のものは〔それを癒さ〕ないのと同様である。

と述べられているからである。

J3 相異なったものを同一であると虚構する効用

相異なったものについて、否定〔判断〕あるいは肯定〔判断〕と
いう目的（=効果・結果）が一まとめに理解〔できる〕ことにな
る。

木や牛や火などのような相異なった〔諸個物〕は、〔皆〕場所・時間・形態を異にしているが、〔それらをそれぞれ〕同一の普遍として理解することによって〔当該対象の〕否定および肯定が一まとめに認識できる〔、これが相異なったものを同一のものであると虚構することの〕効用である³⁷。『プラマーナ・ヴィニシュチャヤ』に

その差異に基づいて〔推理等の〕認識が行なわれる³⁸。

と述べられている通りである。

གཉིས་པ་གཅིག་ལ་ཐ་དང་དུ་སྐྱོད་ (181-3-5) འདོགས་པ་ལའང་གསུམ་ལས། དང་པོ་སྐྱོད་འདོགས་པའི་རྒྱ་
མཚན་ནི།

གཞན་སེལ་སྐྱོད་ཡུལ་ཐ་དང་པས། །གཅིག་ལའང་ལྷོག་པ་ཐ་དང་རུང་⁽⁴⁸⁾། །

སྐྱའི་བྱས་པ་དང་མི་རྟག་པ་ལ་སོགས་པ་དོན་ལ་ཐ་དང་མེད་མོད་ཀྱི། བདེ་བར་གཤེགས་པས་ལུང་པོ་ཐ་དང་དུ་
(181-3-6) གསུངས་པ་དང་། རིགས་པ་སྐྱེ་བས་ཚོས་ཅན་དང་བསྐྱབ་བྱ་དང་གཏན་ཚིགས་ཐ་དང་དུ་བྱི་བ་ནི་
ལོག་པ་ཐ་དང་ལས་ལྷོག་པའི་སྐོ་ནས་ལྲོས་ཐ་དང་དུ་སྐྱོད་གདགས་སུ་རུང་བ་ཉིད་ཡིན་ཏེ།

མིང་དོན་གང་ལྟན་པན་རྒྱན་དུ། །ཐ་དང་པ་འདིའི་⁽⁴⁹⁾ས་པོན་ཡིན། །⁽⁵⁰⁾

ཞེས་གསུངས་ (181-4-1) པས་སོ། །

གཉིས་པ་སྐྱོད་འདོགས་པའི་སྐྱའི་རྣམ་པ་ནི།

སྐྱ་དོན་རྟོག་པའི་འཇུག་ཚུལ་ལྟར། །དོན་ལ་ཐ་དང་ཉིད་དུ་ཞེས། །

གཞན་སེལ་ལ་བརྟེན་ཏེ་སྐྱོལ་ཐ་དང་དུ་སྐྱང་བ་ལྟར་དོན་ལའང་ཐ་དང་ཉིད་དུ་སྐྱོད་བཏགས་ནས་ཞེན་པར་བྱེད་དེ།

དེས་ (181-4-2) ན་བྱང་པར་གང་ཞིག་ཚོས། །གང་གིས་ལོ་བར་འགྱུར་བ་དེ། །

དེ་ལས་གཞན་གྱིས་རྣམ་མ་ཡིན། །དེས་ན་ཐ་དང་རྣམ་པར་གནས། །⁽⁵¹⁾

ཞེས་གསུངས་པ་ལྟར་རོ། །

གསུམ་པ་ཐ་དང་སྐྱོད་བཏགས་པའི་དཔོན་པ་ཡང་།

གཅིག་ལ་གཅིག་དུ་མ་རྟོགས་པ། །རྟོགས་པར་ (181-4-3) བྱེད་བྱིར་རྣམ་པར་བྱ། །

तद्विशेषावगाहिनः ॥. सपानの引用は、『プラマーナ・ヴィニシュチャ』ではなく、『プラ
マーナ・ヴァールティカ』に合致する。Cf. Steinkellner(1979), p. 45, n. 115.

(48) RTR, RT(M) : ཉེ་; RT(P), RT.tsa ba : ཟུང་.

(49) RTR, RT(M) : འདི་; RT(P) : འདའ་; PV.Tib.D : འདི་ཡི་; PV.Tib.PN : འདིའི་.

(50) PV.72cd : इतरेतरभेदोऽस्य बीजं संज्ञा यदर्थिका ॥

(51) PVin.II.31, cf. PV.42 : तस्माद् विशेषो यो येन धर्मेण सम्प्रतीयते।न स शक्यस्ततोऽन्येन
तेन भिन्ना व्यवस्थितिः ॥

12 一つのことを相異なったものと虚構する場合

J1 虚構の根拠

〈他者の排除〉は、〔それぞれ〕働きかける対象 (=排除されるもの) が相異なっているので、同じ一つ〔实在個物〕においても種々の〈異なり〉があることは妥当である。

音声の有する〈作られたもの〉や〈無常なもの〉など〔の〈異なり〉〕は、实在物においては相異なったものではないけれども、善逝 (=世尊) が〔存在の五つの〕構成要素 (=蘊) を相異なったものとしてお説きになったり、また論理学者が〔論証の〕主題や論証されるべきものや論証因を相異なったものとして区別して設定したのは、〔それぞれ〕別々のものを排除することによって意識が〔それらを〕相異なったものとして虚構することができる〔からに〕他ならない。〔『プラマーナ・ヴァールティカ』に〕

それを〔表象させる〕ために命名の行なわれる〔ところの、あるものとそれでないものとの間の〕相互の差異が、その〔錯誤した分別知の〕生因である。

と述べられているからである。

J2 虚構する意識の形態

实在物においても言葉の意味対象は、分別知が働いている (=理解している) 通りの在り方で相異なったものとして存在している、と同一錯視する。

〔言葉の意味対象は、〕〈他者の排除〉に基づいて意識に相異なったものとして現われる通りに、实在物においても相異なったものとして〔存在していると〕虚構した上で同一錯視する⁽³⁹⁾。〔『プラマーナ・ヴァールティカ』に〕

それ故、一つの差異がある属性〔を示す言葉⁽⁴⁰⁾〕によって理解される場合、その〔差異〕はそれ以外〔の言葉〕によっては〔理解され〕ない。従って、〔一つの対象について述べられる二つの言葉は〕相異なった〔意味を持つ言葉〕として確定される。

と述べられている通りである。

J3 一つのことを相異なったものと虚構する効用

一つのことを一つのものであると知らない人に、〔そのことを〕知らせるために〔一つのことを複数のものとして〕分節する。

ང་པོ་གཅིག་ཉིད་དེ་ལྟར་མ་ཤེས་པ་རྣམས་ལ་གཞན་སེལ་གྱི་སྐོན་སྐྱོན་མ་ཡིན་པ་ལས་ལྡོག་པ་དང་། མི་རྟག་
 པ་མ་ཡིན་པ་ལས་ལྡོག་པ་དང་། མ་བྱས་པ་ལས་ལྡོག་པའི་སྐོན་སྐྱོན་ཐ་དང་དུ་བྱེ་བྱེ། རོན་ལ་གཅིག་ཏུ་བསྐྱབས་
 པས་སྐྱོ (181-4-4) ཉིད་མི་རྟག་པ་ལ་སོགས་པར་གོ་བར་བྱེད་དེ།

ཚེས་དང་ཚེས་ཅན་རྣམས་གཞག་དང་། །ཐ་དང་ཐ་དང་མིན་ཅི་འདྲ། །

དེ་ཉིད་རོན་ནི་མ་བརྟགས་པར། །འཇིག་རྟེན་རི་ལྟར་བྲགས་དེ་ལ། །⁽⁵²⁾

དེ་བཞིན་ཁོ་ནར་བརྟེན་ནས་ནི། །བསྐྱབ་བྱ་སྐྱབ་པ་ཀྱན་གཞག་པ། །

དས་ (181-4-5) པའི་རོན་ལ་གཞུག་⁽⁵³⁾བྱའི་བྱིར། །མཁས་པ་རྣམས་ཀྱིས་བྱས་པ་ཡིན། །⁽⁵⁴⁾

ཞེས་གསུངས་པས་སོ། །

འདི་དག་གི་དངོས་ལ་གཞོད་བྱེད་ཀྱི་ཚད་མ་ནི། སྤྱི་དང་ལྡོག་པ་ཐ་དང་རོན་ལ་འགོག་པའི་རིགས་པ་
 བཞིན་ཤེས་པར་བྱོལ། །

གཉིས་པ་གཞན་སེལ་གྱི་རབ་ཏུ་ (181-4-6) དབྱེ་བ་ལ་གསུམ་ལས། དང་པོ་དབྱེ་བ་དངོས་ནི།

ཡོད་དང་མེད་པར་འཇིན་པ་ཡི། །སྐོན་སྐྱོན་གཞན་སེལ་རྣམས་པ་གཉིས། །

བསྐྱབ་བྱ་སྐྱབ་པ་དང་དགག་བྱ་འགོག་པའི་རྒྱལ་གྱིས་ཡོད་པ་གཞན་སེལ་དང་། མེད་པ་གཞན་སེལ་གཉིས་དང་།

སྐྱ་དང་སྐྱ་ཡི་ (182-1-1) དབྱེ་བ་ཡིས། །ཡོད་མེད་དེ་ཡང་གཉིས་གཉིས་ཡིན། །

སྐྱའི་གཞན་སེལ་དང་སྐྱའི་གཞན་སེལ་གཉིས་ཀྱིས་བྱེ་བས་བཞེར་འགྱུར་ཏེ། ཡོད་པ་སྐྱའི་གཞན་སེལ་དང་། ཡོད་

པ་སྐྱའི་གཞན་སེལ་གཉིས་དང་། མེད་པ་སྐྱའི་གཞན་སེལ་དང་། མེད་པ་སྐྱའི་གཞན་སེལ་ (182-1-2) གཉིས་

(52) PV.85 : धर्मधर्मिव्यवस्थानं भेदोऽभेदश्च यादृशः। असमीक्षिततत्त्वार्थो यथा लोके प्रतीयते ॥

(53) PV.Tib : འདྲུག་.

(54) PV.86 : तं तथैव समाश्रित्य साध्यसाधनसंस्थितिः। परमार्थावताराय विद्वद्भिरवकल्प्यते ॥

同じ一つのものであることを知らない人に対して、〈他者の排除〉〔の働き〕によって、音声でないものからの〈異なり〉と無常でないものからの〈異なり〉と作られたものでないものからの〈異なり〉という観点から〔一つのを〕相異なったものとして〔予め〕分節した後、〔それらが〕実在物においては―〔体〕のものであると論証することによって、音声それ自体が無常なものであることなどを理解させる〔、というのが、一つのを複数のものであると虚構することの効用である。『プラマーナ・ヴァールティカ』に〕

属性と基体への分節、あるいは〔一つのが複数のものに〕区別されたり〔複数のものが〕区別されないという、このような〔分節形態〕は、真実なる存在〔であるか否かが〕考慮されることなく日常的な意識において受け入れられているが、まさにその通り〔の分節形態〕に基づいて、智者たちは、最高の存在に到達するため〔の手段として〕論証されるべきものと論証因の全ての設定を構想したのである。

と述べられているからである。

それら〔構想された〈異なり〉 (=属性)〕が実在において〔存在すること〕に対する否定論証は、相異なった普遍や〈異なり〉が実在物において存在することを否定する論理⁽⁴¹⁾と同じ論理に基づいて理解していただきたい。

G2 〈他者の排除〉の分類

H1 分類の本論

〔対象を〕存在していると把握する場合と、存在していないと把握する場合という二つの観点から〈他者の排除〉は二種〔に分類される〕。

存在の定立されるべきものを定立する場合と、存在の否定されるべきものを否定する場合という〔二つの把握〕形態があるので、〈他者の排除〉は、存在に関するものと無に関するものの二つに分けられる⁽⁴²⁾。また、

存在〔に関する〈他者の排除〉〕と無〔に関する〈他者の排除〉〕というそれ〔ら〕も、言葉〔による〈他者の排除〉〕と意識〔による〈他者の排除〉〕という違いによって更に二つずつ〔に分かれる〕。

〔上述の、存在に関する〈他者の排除〉と無に関する〈他者の排除〉は、更に〕言葉による〈他者の排除〉と意識による〈他者の排除〉という二つに分けられるので、全部で四種類になる。すなわち、存在に関する言葉による〈他者の排除〉、存在に関する意識による〈他者の排除〉、無に関する言葉による〈他者の排除〉、無に関する意識による〈他者の排除〉であって、それぞれに二つずつで都合四種類になる。そのこと (=言葉に

གཉིས་བཞིར་འགྱུར་རོ། ། དེའང་རྣམ་འགྲེལ་ལས། །

ཆ་ཤས་སྐྱོ་འདོགས་ཇི་སྟེད་པ། ། དེ་བསལ་ཕྱིར་ན་ཟེས་པ་དང་། །

སྐྱ་ཡང་དེ་སྟེད་ཁོ་ན་དེས། ། དེ་དག་སྐྱོད་ཡུལ་ཐ་དང་ཅན། །⁽⁵⁵⁾

ཞེས་གསུངས་པས་སོ། །

གཉིས་པ་དོན་ལ་གཞན་སེལ་དགག་པ་ལ་ (182-1-3) གཉིས་ཏེ། དོན་ལ་གཞན་སེལ་མི་འབྲང་པའི་ཚུལ་
དང་། དེའི་རྒྱ་མཚན་ནོ། ། དང་པོ་ནི།

གཞན་སེལ་སྐྱོ་ཡི་འདུག་ཚུལ་ཡིན། ། བཅས་པའི་དོན་ལ་གཞན་སེལ་མེད། །

འགའ་ཞིག་དོན་གྱི་གཞན་སེལ་ཞེས་ཡུལ་བཅས་པོ་ཉིད་ལ་གཞན་སེལ་དུ་འདོད་པ་ནི་ཚོས་ (182-1-4) གྱི་
གྲགས་པའི་དགོངས་པ་ལོག་པ་དང་ལྷོག་པ་མ་ཕྱེ་བར་ཟད་དོ། །

གཉིས་པ་དེའི་རྒྱ་མཚན་ལ་གཉིས་ལས། དང་པོ། སེལ་བ་སྤང་བར་འགྱུར་བ་ནི།

དོན་གྱི་གཞན་སེལ་རང་མཚན་ཕྱིར། ། སྤང་ཡུལ་འགྱུར་གྱི་སེལ་བ་ཉམས། །

དོན་ལ་གཞན་སེལ་ཡོད་ན་དོན་ (182-1-5) རང་གི་མཚན་ཉིད་ཡིན་པས་སྤང་ཡུལ་དུ་གྱུར་ལ།⁽⁵⁶⁾ འདོད་ན་
སེལ་བ་ཡིན་པ་ཉམས་སོ། །

གཉིས་པ་སྤང་བ་ལ་མཚུངས་པ་ནི།

སྤང་བའང་དོན་ལ་ཡོད་པར་མཚུངས། ། འདོད་ན་ཡོང་བ་རྒྱན་ཆད་འགྱུར། །

སེལ་བ་དོན་ལ་ཡོད་ན་སྤང་བ་ཡང་དོན་ལ་ཡོད་པར་བསྟེན། ། (182-1-6) འདོད་ན་དོན་ཐམས་ཅད་སྤང་བ་
ཡིན་པས་ཡོང་བ་རྒྱན་ཆད་པར་འགྱུར་རོ། །

སྤང་བ་རྟོག་མེད་གྱི་འཛིན་སྤངས་ཡིན་པས་དོན་ལ་མེད་དོ་ཞེ་ན། སེལ་བའང་རྟོག་པའི་འཛིན་སྤངས་
ཡིན་པས་དོན་ལ་མེད་དོ། །

(55) PV.50 : यावन्तोऽशसमारोपास्तन्निरासे विनिश्चयाः।तावत एव शब्दाश्च तेन ते
भिन्नगोचराः ॥

(56) RTR, RT(M) omit |.

よる〈他者の排除〉と意識による〈他者の排除〉があること)についてもまた、『プラマーナ・ヴァールティカ』に、

〔一つの実在に対して誤った〕内容が虚構されたその数だけ、それを排除するために確定知あるいは言葉が生じる。従って、それら (=確定知と言葉) は、〔同一の実在に対して用いられても各々〕対象を異にしているのである。

と述べられているからである⁽⁴³⁾。

H2 実在物において〈他者の排除〉の存在を否定する

I1 実在物において〈他者の排除〉があり得ない次第

〈他者の排除〉は意識〔に特有〕の対象への働きかけ方である。

〔従って〕物質的なもの⁽⁴⁴⁾である実在物には〈他者の排除〉〔という働き〕は存在しない。

ある者が、「実在物としての〈他者の排除〉⁽⁴⁵⁾」と言って、〈他者の排除〉が、対象である物質的なもの自体に〔存在していると〕主張するのは、ダルマキールティが意図した〈異なったもの〉と〈異なり〉の区別をつけていないにすぎない⁽⁴⁶⁾。

I2 その理由

J1 〈他者の排除〉が〈顕現〉になってしまう

実在物としての〈他者の排除〉は個別相である〔ことになる〕ので、顕現対象⁽⁴⁷⁾であることになってしまい、〈排除〉〔という非実定的なものであることが〕否定されてしまう。

〈他者の排除〉が実在物において存在しているとするならば、それは実在物たる個別相であるので、〔意識に直接〕顕現〔する〕対象であるということになってしまう。もしそれを認めるならば、〈排除〉〔という非実定的なもの〕であることが否定されてしまう。

J2 〈顕現〉においても同じことになる

〈顕現〉もまた実在物に存在していることになる。それを認めるならば、目の不自由な人は絶えてなくなってしまうであろう。

〈他者の排除〉が実在物において存在しているとするならば、〔同じ理屈によって〕〈顕現〉もまた実在物に存在していることになるであろう。その通りだと言うならば、一切の実在物は〔それ自身で〕〈顕現するもの〉であることになるので、目の不自由な人は絶えてなくなってしまうであろう⁽⁴⁸⁾。

〈顕現〉は無分別知の把握形態であるので、実在物においては存在していないと言うならば、〔それならば同様に〕〈他者の排除〉も分別知の把握形態であるので、実在物において存在していない〔と考えるべきである〕。

གལ་ཏེ་སེལ་བ་དོན་ལ་ཡོད་ན་ཡོད་པའི་མཚན་ཉིད་དོན་བྱེད་ (182-2-1) ལུས་པ་ཡིན་པས་དངོས་པོར་
འགྱུར་རོ། ། དངོས་མེད་ལ་ཡོད་པའི་མིང་འདོགས་ན་གསུགས་ཅན་ལ་ནམ་མཁའ་ཡོད་ཅེས་མཚུངས་པར་
འགྱུར་ཞིང་། དེ་ལྟ་ན་ཡོད་མེད་ཀྱི་ཐ་སྲིད་ཐམས་ཅད་འཚེལ་བར་འགྱུར་རོ། །

དེས་ན་གཞན་སེལ་ (182-2-2) ཐམས་ཅད་སློབ་འཇུག་ཚུལ་སྦྱོང་དང་ནམ་པར་རྟོག་པའི་བྱེད་པ་པན་
ཚུན་བསྐྱོད་པ་དང་འབྱེད་པར་བྱེད་པ་ཡིན་ལ། དོན་ནམས་ནི་རང་གི་ངོ་བོ་ཇི་ལྟར་ཡོད་པ་ལྟར་གནས་པའི་བྱིར་
སེལ་བའི་བརྗེས་པོ། །

もし、〈他者の排除〉が実在物において存在しているとするならば、「存在している」ことの特質は「実際的な効果を生み出す能力」であるので、〔〈他者の排除〉もその特質を備えていることになり、〕実在するものであることになってしまうであろう。もし、実在しないもの（＝〈他者の排除〉）に「存在するもの」という名前を付けるとするならば、それと同様に「視覚的存在に虚空（＝実在しないもの）が存在している」とも言えることになってしまうが、そうなると、有るとか無いとかの表現一切が混乱してしまうであろう。

従って、〈他者の排除〉はすべて、意識の〔対象への〕働きかけ方である言葉および分別知の働きによって、〔相異なった個物を〕相互に融合させたり〔一個のものを複数の属性へと〕分節させたりするものである⁽⁴⁹⁾。〔一方〕諸々の実在物は、それ自身が存在している通りの仕方存在しているので、〈排除〉と言われることはない。

訳 注

- (1) この章名における「肯定的存在」を除いては、『リクテル』の本文では「〈顕現〉」という語が使われている。ゲールク派の論理学書では、その同じ内容が「肯定的存在」ないし「定立的働きかけ སྤྲུལ་འདྲུག་ (sgrub 'jug)」として言及されている。おそらく、この「定立的働きかけ」と「排除的働きかけ སེལ་འདྲུག་ (sel 'jug)」という対比はチャパにまで遡るであろう。サバンは、この「肯定的存在」ないし「定立的働きかけ」というチャパ由来の用語より「顕現」という用語を好んでいるように思われる。従って、本章のタイトルもサバン自身のもの付けたものではなく、後代の者の付加である可能性があるように思われる。
- (2) 前巻までとは異なり、本巻ではサチューは本文としてではなく、読み易さを考慮して、各節のタイトルとして訳出し、本文からは省くようにした。
- (3) 「言葉に基づく分別知」という意味ではない。言葉と分別知は本章でもしばしば併記されている。
- (4) 文字通りには「言葉および分別知は〈他者の排除〉である」となっている。序論で詳述したように、サバンはこの〈他者の排除〉という語を多義的に使用しているが、この箇所では、主語「言葉」あるいは「分別知」に対する述語として使われているので、〈他者の排除〉という働きの主体という意味で〈他者を排除するもの〉と訳した。以下、それぞれのコンテキストに合わせて、言葉ないし分別知の対象としては〈他者の排除〉、主体としては〈他者を排除するもの〉、働きとしては〈他者を排除すること〉と訳し分けることにする。
- (5) ここでは「錯誤している・していない」という概念と「〔人を〕欺く・欺かない」という概念が使い分けられている。無分別知には対象それ自身の姿が現われている場合と現われていない場合とがある。前者が錯誤していない知であり、後者が錯誤している知である。一方、分別知および言葉は、いずれも対象それ自身の姿が現われていないので本質的に常に錯誤したものであるが、対象との整合性がある場合とない場合があり得るので、前者が対象について人を欺くもの、後者が対象から逸脱しているものと言われる。
- (6) 「〈顕現〉一般」の「一般」というのは、少し後で言及される錯誤した〈顕現〉と錯誤していない〈顕現〉という下位概念に対する上位概念という意味である。
- (7) མཚན་ཉིད་ (mtshan nyid) は、མཚན་བྱ་ (mtshon bya) およびམཚན་གཞི་ (mtshan gzhi) と関連して用いられる概念である。そのうちmtshan nyidは、対象の側に意識とは独立に存在している、ある「特質」である。それを表示・表現する「名称」ないし「概念」がmtshon bya「特質付けられるもの」である。これは人間の意識が構想し対象に付託したものである。msthan gzhi「特質の基体」は、その「特質」の具体的な担い手の一例である。この箇所では「〈顕現〉一般」が「〔特質付けられる〕名称・概念」であり、以下に述べられる「分別知を持た

ない知云々」が「特質」である。ここでは「特質の基体」については言及されていないが、すぐ後の「錯誤していない〈顕現〉」の節では、その特質が「特質の基体」すなわち、個々の具体的な錯誤していない〈顕現〉においてどのように確認されるかが問題とされている。

- (8) མཐོང་བ་ (mthong ba) は、「見る ལྟ་བ་ (lta ba)」という意志動詞に対する無意志動詞「見える」である。この箇所定義から「見える」ということと「現れている」ということが同じ事態を指していることがわかる。
- (9) 例えば、幻覚・錯覚・夢など。これらにおいては対象が知にありありと顕現しているが、それに対応する個別相は存在していない。
- (10) これらは、次の『プラマーナ・ヴィニシュチャヤ』からの引用にもあるように、似非直接知覚に分類されるものである。サバンはダルマキールティの所説に基づき、似非直接知覚を、無分別知と分別知に分け、更に無分別知の似非直接知覚を、錯誤した感性的知覚と錯誤した非感性的知覚とに分ける。前者は例えば、月が二重に見えるような場合であり、後者は夢における知覚などである(RTR, p.270)。その箇所では、両者とも「錯誤した」という形容詞によって限定されているが、ここでは感性的知覚の方は「錯誤した」と形容されるのに対し、非感性的知覚の方は「惑乱した」と形容されている点が異なっている。この「惑乱した」という形容詞は、次の『プラマーナ・ヴィニシュチャヤ』の引用に用いられているので、それとの関連で使われたのかもしれない。なお、ダルモツラは『プラマーナ・ヴィニシュチャヤ』の注釈の中で、この「惑乱した」という語を「倒錯した対象を有する知 ལྟོ་བྱེད་ལྟོ་བྱེད་ཀྱི་ལྟོ་བྱེད་ལྟོ་བྱེད་」と説明している(PVinT, P.ed. Dse 143b3)。なお、非感性的知覚とは、直接知覚の種類の一つである。仏教論理学では直接知覚は、五つの感覚器官に基づく感性的知覚と、それらが消滅した直後に生じ、五感に基づかない知覚としての非感性的知覚と、自己認識と、ヨーガ行者の超能力的直接知覚との四種に分類される。
- (11) 個物は単一な存在であるので、どのような意味でも分割することができない、という意味。
- (12) 複数の個物に遍在するものである単一なる普遍は存在しない、という意味。
- (13) この第四行目には二つの解釈が可能である。一つは、単一なる普遍が存在するとするならば、それがあある一群の個物においてのみ現れ、別の個物においては現れない、という限定性は成り立たない、という解釈。もう一つは、一個の個物は不可分割なるものであるので、その一部分のみが現れ、他の部分が現れないということはなく、全てが一挙に顕現する、という解釈。シャーキャチョクデンは「単一なる実体において、現われている、即ち〈顕現〉の部分と、現われていない、即ち〈異なり〉の部分という二つに分かれることはない。」(S.19, 507.6~7: ཇམ་གཅིག་པོ་དེ་ལ་གསལ་བ་སྟེ་སྤང་བའི་ཆ་དང་། མི་གསལ་བ་སྟེ་ལྟོ་བྱེད་ཀྱི་ལྟོ་བྱེད་སྟེ་བཞེད་ཀྱི་ལྟོ་བྱེད་)と注釈している。この後の議論の展開からすれば、一つの実在に、現われている部分と現われていない部分とがあることはない、と解釈するのが妥当であるように思われる。い

ずれの解釈でも、現れるか現れないかというのは、ある特定の意識に対して現れているか否かという問題ではなく、対象それ自身において現れているかどうか、という問題である。

(14) 〈異なり〉(ことなり)は、ལྷོག་པ་(ldog pa)の訳である。これは、ある個物がある特定の点でそれ以外のものと異なっている、というその相違のことであり、このような差異こそが言葉の対象である、というのがアポーハ論の根本的主張である。アポーハ論によれば、言葉はポジティブに対象を表現しているのではなく、それでないものとの差異を表現しているにすぎない。この場合の差異は、ソシユール言語学における差異とは若干異なり、概念的な差異の体系を予想せず、ある言葉が端的にそれ以外のものを区別し排除するという働きを持つことである。この〈異なり〉が分別知の上で肯定的表象として現われてきたとき、それがཚོས་(chos、サンスクリット語でdharma)「属性」と言われることになる。あるいはその〈異なり〉を表象するために構想された肯定的表象が属性である。

(15) 「意識の実在物との一致」ないし「実在物と一致している意識」などの解釈も可能であるように思われるが、コラムパによれば「錯誤していない無分別知と、その対象である外界の実在物との二者が、〈対象〉と〈対象を有するもの〉〔として〕一致している。」(G12, 28.4.4: ལྷོག་པའི་སྤྱི་བཤུགས་ལའི་ལེས་པ་དང་། འདི་ལྟལ་གྱི་དོན་གཉིས་པོ་ལྟལ་ལྟལ་ཅན་མཐུན་པ་ཡིན་ཏེ།)とあるので、「意識と対象との一致」と解した。

(16) 『ブラマーナ・ヴァールティカ』では、この詩に続けて、「もし、錯誤〔を生じさせる何らかの〕原因によって、〔その対象に〕他の〔誤った〕属性が付託 (=虚構) されるのではないとするならば (k44: नो चेद् भ्रान्तिनिमित्तेन संयोज्येत गुणान्तरम् ॥) 」と述べられている(この詩は本章でも後に引用される)。ここでダルマキールティは、個物は直接知覚によって全面的に把握されるが、誤解を生じさせるような何らかの原因によって誤った認識が構想されるために、直接知覚以外の他の認識手段が後に必要となる、と述べているのである。しかし、前半の詩のみを引用しつつサパンは、直接知覚によって対象は全面的に、即ちありのままに認識される、と言っていると考えられる。

(17) 仏教論理学の論証因には、異なった二つのもの間の因果関係による論証因(kāryahetu)と、主語それ自身に関する述定としての自己同一性の論証因(svabhāvahetu)の二種類がある。詳しくは『リクテル』第一巻序論参照。ここでは論証因たる「存在を分離できない一体のもの」と帰結たるべき「一方が顕現し、他方が顕現しないことがないもの」とが同一であることを論証することになるので、自己同一性の論証因である。

(18) ここでは、論証因たる「存在を分離できない一体のもの」が、主題たる〈作られたもの〉および〈無常なもの〉において成り立つことが主題所属性である。この主題所属性は、言い換えれば〈作られたもの〉は〈無常なもの〉と一体の関係にある (bdag gcig 'brel, tādātmya) ということ、更に言い換えれば、作られたものは無常なものである、即ち刹那滅である、ということである。従って、これは刹那滅を論証する論証因によって論証される。

この刹那滅論証は『リクテル』では、第六章に記述される。

- (19) 瑠璃とく青いものとは同じもの・一体のものであるが、それらが同時に知覚されるという経験によって、一方が顕現し、他方が顕現しないということのないことが証明される。
- (20) 「勝義的な意味で同一である」という表現の意味は必ずしも明瞭ではない。ここでは、絶対的な意味での同一性と解した。すべてのものは、それ自身とのみ絶対的に同一であり、それ以外のものは、絶対的な意味で同一であるということはない。〈作られたもの〉とく無常なものとは存在としては同一であるが、絶対的な意味では異なった概念である。
- (21) 世俗的な意味での同一性について、世間で認められているものと、哲学書で認められているものが区別されている。前者は、我々が普通に「一個のもの」と言っているときの同一性・単一性であり、後者は「同じ原因から生じたものという意味での同一性」である。〈作られたもの〉およびく無常なものは、世間的な意味で「一個のもの」なのではなく、同一原因から生じたものとして同一存在なのである。མྱེ་མཚེད་ (skye mched) は、サンスクリット語のāyatanaに対応するチベット語であり、普通は「処」と漢訳され、色声香味触法眼耳鼻舌身意の12に分類されるが、それではここの意味が通じない。skye mchedの原義は「生じさせるもの」であるから、原因の同一性に基づく結果の同一性と解釈して訳した。
- (22) これ以降の直接知覚と確定知の関係については序論第3節を参照。
- (23) 「〔他のものと〕共通でない」という表現は、多くの場合、個別相について用いられるが、ここでは正しい認識一般の対象のことを指しているので、「何らかの限定性を持った」という意味に解した。認識の対象は、必ず、他のものと区別された特定のものである必要がある。言い換えれば、認識とはある特定の、主題となる対象についての知に他ならない。
- (24) 実際の『プラマーナ・ヴァールティカ』の文脈では、この詩は無知覚論証因について述べられた詩であるが、内容的には正しい認識手段一般についての言及であると考えて差し支えないであろう。
- (25) 後に述べられるように、サパンの見解では、直接知覚は、ある特定の属性に関してはそれ自身に基づいて確定知を引き出すことができるが、ある特定の属性に関しては自らの力だけでは確定知を引き出すことができず、推理知による確定を必要とする。一方推理知は、分別知であるが故にそれ自身が確定作用を含んでいる。
- (26) ロオケンチェンによれば、ツァンナクパམྱེ་མཚེད་ལྟོང་མཁའ་ལྟོང་等指す(L, 102.16)。
- (27) 原文では「直接知覚は」となっているが、それでは意味が通じないように思われる。サパンは、「ある者」が直接知覚にも無分別知の確定があると主張しているのを受けて、それではその「無分別知の確定」がく顕現自体を指しているとするれば、すべての無分別知が確定をしていることになり、正しい認識手段としての直接知覚の優越性がなくなってしまう、と論駁している、と解釈し、「直接知覚は」を「無分別知は」と訂正して読んだ。

この箇所についてロオケンチェンは、「不確定顕現という直接知覚が存在しないことになってしまうからである。」(L, 103.19: ལྷང་ལ་མ་ངེས་པའི་མངོན་སྲུང་མེད་པར་འགྲུབ་རྟོ།)と注釈している。かれも直接知覚と言って無分別知と言ってはいないが、不確定顕現は、正しい認識手段ではないので、この場合の直接知覚は正しい認識手段ではないものを指しており、正しくは無分別知とすべきであるように思われる。なお、ゲールク派では、直接知覚にも正しい認識手段とそうでないものがあることを認めているが、サバンの意識の分類では直接知覚は必ず正しい認識手段であることになるので、「不確定顕現という直接知覚」という表現は適切ではない。

一方コラムパはこれとは別の解釈をしている。「音声を把握している直接知覚の後では、音声の無常性を論証する論証因と推理知とが無意味になってしまう。なぜならば、その〔直接知覚〕によって音声の無常性が知覚されるとき、それによってその〔無常性〕が確定されてしまうからである。」(G12, 29.1.5~6: ལྷང་ལ་མངོན་སྲུང་གྱི་རྗེས་སུ་སྐྱེ་མི་རྟག་པར་སྐབ་པའི་རྟགས་དང་རྗེས་དཔག་ཏོན་མེད་པར་གྲལ། དེས་སྐྱེ་མི་རྟག་པ་མཐོང་བ་ན་དེས་དེ་ངེས་པའི་ཕྱིར།)。これによれば、もし〈顕現〉だけで対象が確定されるとするならば、直接知覚だけでも対象の全体が確定されてしまい、後に推理などの他の認識手段が生じる余地はなくなる、と解釈していることになる。この解釈を踏襲するならば、本文の「直接知覚」を「無分別知」に訂正しなくともよいが、文脈は理解し難くなる。

(28) この詩の原典チベット語訳では1行目と2行目の順序が逆になっている。これの方が、サンスクリット語原文の文法的な格関係を正確に反映している。またサンスクリット語を参照すれば、最初のviśeṣa (khyad par)は個物を意味し、次のviśeṣa (khyad par)が特質を意味していることが分かるが、このサバンの引用では、本文に訳出したように、二つのkhyad parが「特質」という同じ意味として使われていると考えられる。もちろんこの箇所での『リクテル』の文脈から言えば、両方とも「特質」という意味で正しいことになる。

(29) ここで補った部分は、『ブラマーナ・ヴァールティカ』における、この詩の直前の詩の内容である。その詩は、既に上で引用されている。

(30) 「それ自身」は、རང་ལྡོག་(rang ldog)の訳。「それ自身」という概念は、元々チャパ流の論理学に特有の概念であったと考えられる。そのチャパの論理学を継承する現代のゲールク派の論理学教科書でも使用されている。チャパ流の論理学を批判するサバンが、ここでこの概念を承認して使っているか否かは明確ではない。ゲールク派の理解では、ldog paは、རང་ལྡོག་(rang ldog)、དོན་ལྡོག་(don ldog)、གཞི་ལྡོག་(gzhi ldog)の三種に分けられる。そのうちrang ldogはldog paそれ自身、don ldogはldog paの対象あるいは意味、gzhi ldogはldog paの具体例である。このような使い方でのldog paは、本書で採用している「〈異なり〉」という訳語からは直接理解できないような内容を持っている。例えば、「sngon po'i ldog pa」は「青いものそれ自身」というような意味である。ただし、ldog paに限って言えば「それ自身であること」、即ちそれ以外のものとは異なっていることそのことでもあるので、「〈異な

り」自身」と解することもできるかもしれない。

- (31) 直訳すれば、「違いのない実在物」。ここで分割と言っているのは、もちろん物理的・空間的な分割ではなく、属性への分割である。
- (32) この議論で反論者が譲歩を重ねたあげくに主張しているのは、言葉は〈異なり〉の相違によって相互に区別されるが、しかし実在個物そのものを表示している、ということである。それに対してサパンは、そこまで言うのであれば、言葉が〈異なり〉を表示している、と素直に言うべきであって、同一の実在個物を表示している、と考える必要はない、と反論しているのである。この反論者の見解は、サパンの主張に反してダルマキールティの主張するところである。ダルマキールティにとっては、言葉の表示対象は最終的には実在個物そのものである。ただしそれを全体として表現しているのではなく、ある特定の局面のみを抽象して表現しているにすぎない。属性を言表する言葉が、実在個物それ自身ではなく、そこから抽象され構想されたある属性のみを表示しているかのように見えるのは、その言葉が属性を対象としているからではなく、実在個物を対象としながら、それを表現する仕方が特殊であるからであって、最終的表示対象が異なっているわけではない。これらのダルマキールティのアポーハ論については別稿を予定している。
- (33) この〈他者の排除〉の定義の解釈は難しい。特にཀམ་མཁའ་ལྷན་པའི་ཡུལ་ཅན་ཡིན། (gzhan sel yul can yin) の部分は複数の解釈が可能である。序論でも述べたように、サパンは〈対象〉と〈対象を有するもの〉と〈対象を有するものの対象への働きかけ方〉という三つの項を基本にして、その認識論を構築している。そのうち〈他者の排除〉は、〈顕現〉と並んで〈対象を有するものの対象への働きかけ方〉に分類される。即ち〈他者の排除〉というのは働き(方)であって、対象でもなく、それを有する意識ないし言葉でもない。もしこの箇所でもそのことが前提とされているならば、この"gzhan sel yul can yin"は「〈他者を排除するもの〉という〈対象を有するもの〉である」ないしは本文で訳出したように「〈他者を排除すること〉によって〈対象を有するもの〉である」と読むことができる。一方〈他者の排除〉が分別知や言葉の〈対象〉である、という考え方からすれば「〈他者の排除〉を〈対象〉とするものである」と訳すことができる。元々のダルマキールティの用語法においては〈他者の排除〉は意識の構築物ではなく、意識から独立に対象の側に成立しているものと考えられているので、その場合には後者の解釈が妥当することになる。

ところで、ロオケンチェンはこの部分を次のように注釈している。「この〔定義〕によって、〈対象を有するもの〉である〈排除しつつ働きかけるもの〉の特質を表立って述べることを通じて、〈対象〉である〈排除〉の特質もまた間接的に示されている。」(L, 106.16~17: འདི་མཁའ་ལྷན་པའི་ཡུལ་ཅན་ལུགས་ཀྱི་མཚན་ཉིད་དངོས་སུ་སྒྲིམ་པའི་སྐོན་པའི་ཡུལ་ཅན་ལྷན་པའི་མཚན་ཉིད་ཀྱང་འགག་ལ་བསྟན་པ་ཡིན་པ།)。ロオケンチェンはここで〈排除しつつ働きかけるもの(sel'jug)〉と〈他者の排除(sel ba)〉を対比して注釈している。これは上述の二つの解釈が可能であることをロオケンチェンが意識していたことを示している。その上で、このサパンの文の直接の

意味としては、前者、即ち〈他者を排除するもの〉としての意識ないし言葉の働きが述べられている、と解している。ここでは、このロオケンチェンの示唆に従って本文のように訳した。

(34) このདངོས་ཡུལ་(dngos yul)を自注でདངོས་ཀྱི་ཡུལ་(dngos kyi yul)と言い換えていることに基づいて「直接的な対象」と解釈したが、シャーキャチョクデンは「実在を把握する直接知覚の対象ではない」(S19, 512.4~6: དངོས་པོ་འདིན་པའི་མངོན་སུམ་གྱི་ཡུལ་དུ་མེད་དེ།) すなわち、「実在する対象」の意味と解している。

(35) 二つの非難のうち前者は、例えば、音声は〈無常であること〉あるいは無常なる音声を論証する場合、もし、その基体たる音声において、全ての属性が一体になって存在しているとするならば、〈無常であること〉を論証する論証因たる〈作られたもの〉という属性もまたその基体と一体となっており、従って論証の帰結の基体自身が論証因を自らの一部として含んでいることになってしまうであろう、という非難である。『プラマーナ・ヴァールティカ』自注では、この非難に対するダルマキールティの答釈として〈他者の排除〉論が展開されることになる。その事情はこの『リクテル』でも同じである。これに対してサパンは以下の「一つのことを複数のものとして虚構する把握形態」の説明によって答えている。

また後者の非難は、遍充関係は「ある特定のものが別の特定のものと共存関係にある」ということであるが、もし全ての個物が全く個別的であるならば、そこにはいかなる普遍的な共存関係も成り立たないはずである、という内容である。これに対しては「複数のものを一つのものとして虚構する把握形態」によって答えることになる。

(36) これらの薬草名を具体的に何に当てはめるかについては諸説あるが、ここでは『蔵漢大辞典』の中国語の説明に依拠した。それによれば、སྨྱུ་རྩེ་མ་は「苦参。豆科薬用植物名。一説為蓼科の木天蓼。味甘、苦、渋而辛、性平、功能清風熱、治瘟疫、關節炎、宿熱及初期熱病等。」པུ་རྩེ་མ་は「巴爾巴達。能致瘟疫、疫病的一種有毒細菌。」とある。

(37) 「ひとまとめに」という言葉の意味は理解しづらいが、コラムパの大註には次のようなわかりやすい例が挙げられている。「例えば、『木は存在しない』と言った場合、木の個体全てが存在しないと理解され、また『木の個体が何か一つある』と言った場合、木〔一般〕が存在していると理解されるような場合である。དཔེར་ན་གླིང་མེད་ཅེས་བརྗོད་པ་ན་གླིང་གསལ་གསལ་ཅད་མེད་པར་གྲོ་བ་དང་། གླིང་གསལ་གང་རུང་གཅིག་ཡོད་ཅེས་བརྗོད་པ་ན་གླིང་ཡོད་པར་གྲོ་བ་བཞིན་ནོ།། (G12.34.2)」

(38) この引用は、現在の大蔵経のテキストに基づくならば、『プラマーナ・ヴィニシュチャヤ』ではなく『プラマーナ・ヴァールティカ』のチベット語訳に一致している。内容を考えれば、『プラマーナ・ヴィニシュチャヤ』の現行テキストは誤っていると考えた方がいいかもしれない。ただし、サンスクリット語原文はいずれの訳とも完全には一致しない。サンスクリット語原文では、文法的には、この詩の前半と密接な関係を持っているので、この詩全

体をサンスクリット語原文に基づいて訳すと、「従って、諸々の実在物には様々な〔他者〕からの〈異なり〉があるが、その〔他者〕を根拠として、その〔〈異なり〉の〕違いに基づく様々な種が構想される。」(तस्माद्यतो यतोऽर्थानां व्यावृत्तिस्तन्निबन्धनाः। जातिभेदाः प्रकल्प्यन्ते तद्विशेषावगाहिनः॥)となる。一方、サバンは、推理などの認識が实在個物の持つ〈差異〉という普遍に基づいて行われるということの典拠として、この詩を引用している。

- (39) 序論第2節で述べたように、ダルマキールティやサバンの言う同一錯視には二つのパターンがある。一つはこの箇所に述べられているように、意識に現われた通りに実在物も存在している、と錯視される場合。もう一つは意識に現われた形象と实在個物とが区別されることなく意識される、という錯視の場合である。これらは内実からするならば必ずしも同じ思想ではないが、ダルマキールティもサバンもこれらを異なったものとしては考えていないようである。
- (40) ダルマキールティは『プラマーナ・ヴァールティカ』第1章自注でこの「属性(dharma)」という語を「名称(nāman)」と置き換えている(PVSV.25.24)。
- (41) これがどの論理を指しているのかは明確ではないが、『リクテル』第3章に述べられている諸々の議論を指していると思われる。
- (42) 〈他者の排除〉の分類については若干疑問がある。それぞれの規定は形式的に行なわれているが、必ずしも実態に即していないように思われる。存在しているものを存在していると把握するのが存在に関する〈他者の排除〉であり、存在していないものを存在していないと把握するのが無に関する〈他者の排除〉である、というのがサバンの規定であるが、一方で、存在に関する〈他者の排除〉の中に、真実なものを否定排除するという誤謬知による〈他者の排除〉を含めている。即ち、存在しているものを存在していないと把握する誤謬知は、存在に関する〈他者の排除〉に含められることになる。しかし、存在に関する〈他者の排除〉は、もともと存在しないものを否定排除するものであるが、真実なものを否定排除するものである誤謬知による〈他者の排除〉は、存在しているものを否定排除していることになるので、それが存在に関する〈他者の排除〉に含められるというのは、妥当ではないように思われる。また、存在していないものを存在していると把握する誤謬知はどうなるであろうか。それについてサバンは明確には言及していないが、上の規定に忠実に従うならば、誤謬知であるから、存在に関する〈他者の排除〉に当て嵌まることになるであろう。また、無に関する〈他者の排除〉でも、壺の無と兎角の無とでは、否定の働き方が異なっているように思われる。すなわち、壺の無という場合には、壺という存在するものの存在が「壺の無」という表現によって否定されるが、兎角は、それ自体が既に存在しないものであるので、「兎角」という言葉は、虚空の場合と同様存在しないものに対する名称となっている。従って「兎角の無」という表現は実際には「兎角という無」という意味になるであろう。とするならば、これがどうして存在するものを否定排除するものとしての無に関する〈他者の排

除〉と言えるのであろうか。また「虚空」は、それだけで無に関する〈他者の排除〉の例として挙げられている。それ自体が物的存在の否定排除に対する名称であるので「虚空の無」という表現は適当ではない、ということになるのだらう。しかし、もしそうであるとするならば、同様にそれ自体存在していないものに対する名称である「兎角」についても「兎角の無」と表現することができないか、内侍は、「虚空の無」と言う表現が可能であることになるのではないだらうか。一体「虚空」と「兎角」の違いは何であらうか。これらの疑問については、〈他者の排除〉の分類の本論を扱う次巻において考察したい。

(43) この詩は、直前でサパンが述べた〈他者の排除〉の分類については特に言及していない。サパンは、単に〈他者を排除するもの〉には分別知と言葉がある、ということに対する典拠として引用したのであろう。

(44) サンスクリット語の**मूर्त**(mūrta)の訳。この語は**अमूर्त**(amūrta)「精神的なもの」と対比して用いられる。精神的存在と物質的存在は絶対的に異なったものであり、あるものが物質的なものであるならば、それは精神的存在のあり方を少しも示すことはない。ここでは物質的なものである実在物が精神的存在の徴表である〈他者の排除〉を決して持つことがないということが指摘されている。

(45) 現代のゲールク派の理論では、〈他者の排除〉には **དོན་གྱི་གཞན་སེལ།** (don gyi gzhan sel) 「実在物としての〈他者の排除〉」、**སྒྲིབ་གཞན་སེལ།** (blo'i gzhan sel) 「意識内の〈他者の排除〉」、**མེད་དགག་གི་གཞན་སེལ།** (med dgag gi gzhan sel) 「絶対否定の〈他者の排除〉」の三種があるとされる。ここではそのうち「実在物としての〈他者の排除〉」が取り上げられている。この三種の〈他者の排除〉説は、シャーンタラクシタおよびカマラシーラが『タットヴァサンクラハ』kk.1002~1014において提唱した分類に基づいている。ただし彼らはこのうち「意識内の〈他者の排除〉」のみが真の〈他者の排除〉であると主張している。後代のサキヤ派の注釈者たちは『リクテル』の注釈において、このシャーンタラクシタ等の見解を踏襲して、三種の〈他者の排除〉説を詳しく批判している。

(46) ダルマキールティは〈異なったもの〉vyāvṛta (log pa)と〈異なり〉vyāvṛtti (ldog pa)とを区別している(PVSV.32.13~33.21)。かれによれば、〈異なり〉は、属性(dharma)に対応し、〈異なったもの〉は、〈異なり〉によって指示される場所の基体(dharmin)に対応している。一つの基体、即ち〈異なったもの〉には、複数の属性、即ち〈異なり〉が存在する。このうち前者は特定の〈異なり〉を、他の〈異なり〉を考慮することなく指示する場合であり、後者は、他の〈異なり〉を捨象することなく当の対象を指示する場合である。しかし、ここでサパンがこの区別に言及しているのが、どのような意図であるのかは明瞭ではないが、恐らく、〈異なったもの〉を実在個物に、〈異なり〉を〈他者の排除〉即ち属性あるいは普遍に対応させ、従って実在個物の〈他者の排除〉という概念が成り立たない、と反論しているように思われる。

(47) チベット論理学では〈対象〉は四つに分類される。即ち顕現対象 སྣང་ཡུལ། (snang yul)、把握対象 གཟུང་ཡུལ། (gzung yul)、志向対象 འདུག་ཡུལ། ('jug yul)、同一錯視の対象 ཞེན་ཡུལ། (zhen yul)である。これらの各々の説明については、『リクテル』第一巻および福田(1989)を参照。サバンの主張する存在論的枠組みにおいては、真に対象と言えるのは個別相、即ち実在個物のみであり、四つの対象は全て、この個別相の意識との関係の仕方から規定されるものである。個別相はそれ自身としては顕現対象であり、言い換えれば、直接知覚において〈顕現〉という仕方を通して知られるものである。従って、もし〈他者の排除〉が個別相であるならば、それは直接知覚に顕現するものとなり、排除という否定的なものではあり得なくなってしまうであろう。

(48) 以上の記述から、〈顕現〉もまた実在物において成立しているものではなく、あくまで意識、この場合は直接知覚における対象への働きかけ方だということがわかる。次の議論では、対論者もまたそのことを承認している。

(49) この部分の解釈は難しい。ここではロオケンチェンの次のような注釈に基づいて訳出した。「従って、〈他者の排除〉は全て、意識の働きかけ方の種類である、言葉および分別知の相異なった働きによって、相互に一つに融合させるか、相異なったものとして分節させるものである。」(L, 111.18~19: དེས་ན་གཞན་སེལ་ཐམས་ཅད་སྤོང་འདུག་ཚུལ་གྱི་བྱེ་བྲག་སྒྲི་དང་ནམ་པར་རྟོག་པའི་བྱེད་པ་ཐ་དང་པས་མན་ཚུན་གཅིག་ཏུ་བསྐྱེ་བ་དང་ཐ་དང་ཏུ་འབྱེད་པར་བྱེད་པ་ཡིན་ལ།)。なお次のような訳も可能かもしれない。「従って、〈他者の排除〉はすべて、意識の対象への働きかけ方であり、言葉と分別知の働き〔、即ち、〕お互いに融合させたり区別させたりする〔という働きかけ方の〕ことである。」

付 表

『リクテル』第四章に対する各注釈書の科段表

1. 『リクテル』科段

注記：以下の『リクテル』のサチエーでは、従来の底本である『サキヤ全書』版のみならず、中国で刊行された活字本のページ数・行数を追記した。括弧の中の前半が前者、後半が後者の該当箇所である。

C2. ལྷང་བ་དང་མེལ་བས་རྟོགས་ཚུལ་:

D1. འདུག་ཚུལ་སྤྱིར་བསྟན་པ་ (179-1-4; 86.3)

D2. མོ་མེལ་རང་བཞིན་ངེས་པར་བྱ་བ་:

E1. ལྷང་བ་:

F1. ལྷང་བ་སྤྱིར་མཚན་ཉིད་ (179-1-5; 86.8)

F2. མོ་མེལ་དོན་གཏན་ལ་དབབ་པ་:

G1. ལྷང་བ་འབྲུལ་པ་:

H1. མཚན་ཉིད་ (179-1-6; 86.10)

H2. དབྱེ་བ་ (179-1-6; 86.11)

G2. ལྷང་བ་ས་འབྲུལ་པ་:

H1. མཚན་ཉིད་ (179-2-1; 86.14)

H2. དབྱེ་བ་ (179-2-1; 86.15)

H3. མཚན་གཞི་ལ་མཚན་ཉིད་ངེས་པར་བསྟན་པ་:

I1. ཡུལ་གྱི་གནས་ལུགས་ (179-2-2; 86.17)

I2. སྤྱིར་འཛིན་སྟངས་ (179-2-3; 87.3)

I3. སློ་དོན་མཐུན་པ་:

J1. ཇི་ལྟར་མཐུན་པའི་ཚུལ་ (179-2-5; 87.9)

J2. དེ་ཚད་མས་བསྟན་པ་:

K1. རྟོགས་དགོད་པ་ (179-3-2; 87.20)

K2. དེའི་ཚུལ་བསྟན་པ་:

L1. རྟོགས་ཚེས་ (179-3-3; 88.1)

L2. བྱ་བ་ (179-3-4; 88.2)

K3. བྱ་བ་ལ་ལེ་མི་འཐད་པ་སྟངས་པ་:

L1. རྟོགས་ཚེས་ལ་ལེ་མི་འཐད་པ་སྟངས་པ་:

M1. རྟོགས་མི་སྲིད་པ་སྟངས་པ་ (179-3-6; 88.9)

M2. སྲིད་ཀྱང་མི་དགོས་པ་སྟངས་པ་ (179-4-1; 88.15)

- L2. ལྷ་པ་ལ་མི་འཐད་པ་སྤང་བ་ :
 - M1. ཡུལ་ཅན་ལ་ཉ་ཅང་ཐལ་བ་ (179-4-2; 88.20)
 - M2. ཡུལ་ལ་ཉ་ཅང་ཐལ་བ་ (179-4-4; 89.3)
- G3. དེས་ན་མངོན་སྲུང་མ་ངེས་པར་གྲུབ་པ་ :
 - H1. མ་ངེས་པར་གྲུབ་པའི་འཐད་པ་དངོས་ (179-4-5; 89.6)
 - H2. དེ་ལ་མི་འཐད་པ་སྤང་བ་ :
 - I1. ལྷང་དང་འགལ་བ་སྤང་བ་ (180-1-1; 89.15)
 - I2. དངོས་སྲུང་མ་ངེས་ན་ཚད་མར་འགལ་བ་སྤང་བ་ :
 - J1. ཚྱོད་པ་དགོད་པ་ (180-1-3; 89.20)
 - J2. ལན་ :
 - K1. གཞན་གྱི་ལན་དགག་པ་ (180-1-3; 89.23)
 - K2. རང་གི་ལན་གདབ་པ་ :
 - L1. མངོན་སྲུང་གྲིས་དགག་སྐྱབ་བྱེད་པའི་ཚུལ་ (180-1-5; 90.6)
 - L2. དེས་ན་མངོན་སྲུང་དུ་འགལ་བ་ :
 - M1. རྩོམ་ལྡན་པའི་ལྷ་པ་ལ་ལྷ་པར་བསྐྱབ་པ་ (180-2-5; 91.4)
 - M2. དེས་པས་སྐྱོ་འདོགས་གཅོད་པའི་ཚུལ་ (180-3-3; 91.19)
 - M3. རྩེས་སྲུང་ལྷ་པའི་ལྷ་པས་ལྷ་པར་འགྱུར་བ་ (180-3-5; 92.1)
 - M4. དེ་སྐོབ་དཔོན་གྱི་དགོངས་པ་ཡིན་པ་ (180-3-6; 92.6)
 - H3. ལྷ་པ་ལ་སྐྱོ་ལྷ་པའི་ཚུལ་ :
 - I1. ལྷ་པ་ན་དགག་སྐྱབ་ཅིག་ཅར་རྩོགས་པར་ཐལ་བ་ (180-4-2; 92.12)
 - I2. དོན་གཅིག་གི་མིང་ཐལ་ཅད་རྣམ་གུངས་པ་ཡིན་པ་ (180-4-3; 92.18)
 - I3. ལྷ་པ་ལ་འགྱུར་ན་ལྷ་པར་འགྱུར་བ་ (180-4-5; 93.2)
- E2. གཞན་སེལ་ :
 - F1. མཚན་ཉིད་ (181-1-1; 93.9)
 - F2. དེའི་རང་བཞིན་ངེས་པར་བྱ་བ་ :
 - G1. སེལ་པའི་རྣམ་གཞག་ :
 - H1. ཡུལ་གྱི་གནས་ལུགས་ (181-1-2; 93.13)
 - H2. སྐྱོའི་འཛིན་སྲུངས་ : (181-1-5; 93.21)
 - I1. ཐ་དད་ལ་གཅིག་ཏུ་སྐྱོ་འདོགས་པ་ :
 - J1. ཐ་དད་ལ་གཅིག་ཏུ་སྐྱོ་འདོགས་པའི་རྒྱ་མཚན་ (181-1-6; 94.4)
 - J2. སྐྱོ་འདོགས་པའི་སྐྱོའི་རྣམ་པ་ :
 - K1. ཐ་དད་ལ་གཅིག་ཏུ་འབྲུལ་ཚུལ་ (181-2-2; 94.10)

- K2. དེ་ལ་མི་འཐད་པ་སྤང་བ་ (181-2-5; 94.20)
- J3. དགོས་པ་ (181-3-3; 95.11)
- I2. གཅིག་ལ་ཐ་དད་ཏུ་སྐྱོ་འདོགས་པ་:
 - J1. སྐྱོ་འདོགས་པའི་རྒྱ་མཚན་ (181-3-5; 95.16)
 - J2. སྐྱོ་འདོགས་པའི་སློབ་རྒྱུ་ལ་ (181-4-1; 96.1)
 - J3. ཐ་དད་སྐྱོ་བཏགས་པའི་དགོས་པ་ (181-4-2; 96.7)
- G2. དེའི་རབ་ཏུ་དབྱེ་བ་:
 - H1. དབྱེ་བ་དངོས་ (181-4-6; 96.18)
 - H2. རོན་ལ་གཞན་སེལ་དགག་པ་:
 - I1. རོན་ལ་གཞན་སེལ་མི་འཐད་པའི་ཚུལ་ (182-1-3; 97.6)
 - I2. དེའི་རྒྱ་མཚན་:
 - J1. སེལ་བ་སྤང་བར་འགྱུར་བ་ (182-1-4; 97.10)
 - J2. སྤང་བ་ལ་མཚུངས་པ་ (182-1-5; 97.14)
 - H3. སོ་སའི་རྣམ་གཞག་:
 - I1. ཡོད་པའི་སྐྱོ་དང་སྐྱོ་གཉིས་འདུག་ཚུལ་གཅིག་པས་ཕྱོགས་གཅིག་ཏུ་བརྒྱུད་པ་:
 - J1. མཚན་ཉིད་ (182-2-3; 98.6)
 - J2. དབྱེ་བ་ (182-2-4; 98.10)
 - J3. སོ་སའི་རོན་:
 - K1. མཛོན་གྱུར་ལ་ངེས་པ་ (182-2-5; 98.12)
 - K2. སྐྱོག་གྱུར་ལ་ངེས་པ་:
 - L1. མཚན་ཉིད་ (182-3-2; 98.22)
 - L2. དབྱེ་བ་ (182-3-2; 99.3):
 - M1. བའེན་པ་ལ་འདུག་པ་རྗེས་དཔག་གི་གཞན་སེལ་:
 - N1. རང་གི་འཐད་པ་བརྒྱུད་པ་ (182-3-4; 99.6)
 - N2. གཞན་གྱིས་བཏག་པ་དགག་པ་ (182-3-4; 99.9)
 - N3. དགག་པ་ལ་མི་འཐད་པ་སྤང་བ་ (182-3-6; 99.15)
 - M2. རྒྱན་པ་ལ་འདུག་པ་ལོག་གིས་གྱི་གཞན་སེལ་ (182-4-3; 100.3)
 - M3. གཉིས་ཀར་དོགས་པ་གྲོ་ཚོས་གྱི་གཞན་སེལ་ (182-4-4; 100.5)
 - I2. སེད་པ་གཞན་སེལ་གྱི་སྐྱོ་དང་སྐྱོ་གཉིས་འདུག་ཚུལ་གཅིག་པས་ཕྱོགས་གཅིག་ཏུ་བརྒྱུད་པ་:
 - J1. མཚན་ཉིད་ (182-4-4; 100.8)
 - J2. དབྱེ་བ་ (182-4-5; 100.11)
 - J3. དངོས་མེད་སྤང་ཡུལ་མ་ཡིན་པ་:

- K1. ལྷ་ལྷལ་དྲུ་མི་རླང་བའི་འབྲང་པ་ (183-1-1; 100.16)
- K2. དེ་ལ་མི་འབྲང་པ་སྤང་བ་:
 - L1. དངོས་པོ་དང་མཚུངས་པ་སྤང་བ་ (183-1-3; 101.2)
 - L2. ཚད་མ་དང་འགལ་བ་སྤང་བ་ (183-1-6; 101.13)
 - L3. གྲགས་པ་དང་འགལ་བ་སྤང་བ་ (183-2-3; 102.3)
 - L4. ལྷ་དང་འགལ་བ་སྤང་བ་ (183-3-4; 103.4)
- F3. སེལ་བ་ལ་རྩོད་པ་སྤང་བ་:
 - G1. ལྷུ་མེད་ན་བདེ་སྤྱོད་བ་མི་སྲིད་པ་སྤང་བ་ (184-2-2; 105.7)
 - G2. གཞན་སེལ་ཡིན་ན་ཕན་ཚུན་བརྟེན་པར་གྲལ་བ་སྤང་བ་:
 - H1. རྩོད་པ་ (185-2-1; 108.21)
 - H2. འདིའི་ལན་:
 - J1. མགོ་མཚུངས་ཀྱིས་དགག་པ་ (185-2-4; 109.9)
 - J2. དངོས་པོའི་ལན་ (185-3-5; 110.13)
 - G3. གཅད་བྱ་མེད་པ་ལ་གཞན་སེལ་མི་འཇུག་པ་སྤང་བ་ (185-4-6; 111.16)
 - G4. སེལ་བ་དངོས་པོར་གྲུབ་མ་གྲུབ་བརྟགས་ན་མི་འབྲང་པ་སྤང་བ་:
 - H1. རྩོད་པ་ (186-1-3; 112.2)
 - H2. ལན་:
 - J1. གཞན་གྱི་ལན་དགག་པ་ (186-1-4; 112.7)
 - J2. རང་གི་ལན་ (186-2-3; 113.3)
 - G5. སེལ་བ་ལ་ལྷུ་མེད་ན་གཞི་མཐུན་མི་སྲིད་པའི་རྩོད་པ་སྤང་བ་ (186-3-5; 114.7)

2. コラムバ大註(G12)

- D2. ལྷ་དང་སེལ་བ་རྟོགས་ཚུལ་:
 - E1. འཇུག་ཚུལ་སྤྱིར་བསྟན་པ་ (28-2-4)
 - E2. སོ་སོའི་རང་བཞིན་ངེས་པར་བྱ་བ་:
 - F1. ལྷ་སེལ་གྱི་རྣམ་བཞག་དངོས་:
 - G1. ལྷ་དང་བ་:
 - H1. མཚན་ཉིད་ (28-3-1)
 - H2. དབྱེ་བ་:
 - I1. རྟོག་མེད་འཁྲུལ་པའི་ལྷ་དང་བ་:
 - J1. མཚན་ཉིད་ (28-3-1)
 - J2. དབྱེ་བ་ (28-3-2)

I2. རྟོག་མེད་མ་འབྲུལ་པའི་སྣང་བ་ :

J1. མཚན་ཉིད་ (28-3-3)

J2. དབྱེ་བ་ (28-3-3)

J3. མཚན་གཞི་ལ་མཚན་ཉིད་སྐབ་པ་ :

K1. དུལ་གྱི་གནས་ལུགས་ (28-3-4)

K2. རྫོང་འཛིན་སྣང་ས་ (28-4-1)

K3. རྫོ་དོན་མཐུན་པར་སྐབ་པ་ :

L1. མཐུན་ཚུལ་དངོས་ (28-4-4)

L2. དེ་སྐབ་བྱེད་ཀྱི་རྟོགས་འགོད་པ་ (28-4-5)

L3. དེས་ན་མངོན་སྲུང་མ་དེས་པར་གྲུབ་པ་ (19-1-1)

G2. སེལ་བ་ :

H1. གཞུང་འབྲེལ་ལས་ཇི་སྐད་བཤད་པའི་ཚུལ་ :

I1. གཞུང་ལས་བཤད་པའི་ཚུལ་ (29-2-4)

I2. འབྲེལ་བ་ལས་ཇི་སྐད་བཤད་པའི་ཚུལ་ :

J1. གཞན་སེལ་གསུམ་གྱི་རྣམ་བཞག་ (29-2-6)

J2. གཞན་སེལ་གཉིས་ཀྱི་རྣམ་བཞག་ (30-2-3)

H2. དེ་ལས་པོད་ཀྱི་མཁས་པ་རྣམས་ཀྱི་བཞད་པའི་ཚུལ་ :

I1. གཞན་སེལ་ཡིན་ན་མེད་དགག་གི་གཞན་སེལ་ཡིན་པས་བྱུང་བ་ (31-2-2)

I2. དེ་ཡིན་ན་མེད་དགག་དང་རྫོང་གཞན་སེལ་གང་རུང་ཡིན་པས་བྱུང་བ་ (31-3-1)

I3. དེ་ཡིན་ན་དོན་རང་མཚན་གྱི་གཞན་སེལ་ཡིན་པས་བྱུང་བ་ (31-3-5)

I4. ཚོས་དེའི་གཞན་སེལ་གསུམ་པོ་གང་རུང་དེས་ཚོས་དེའི་གཞན་སེལ་གྱི་གོ་ཚོད་ཀྱི། སྤྱིར་གཞན་སེལ་ཡིན་

མིན་གྱི་དབྱེ་བ་དཔྱད་པ་ (31-4-4)

I5. གཞི་གྲུབ་ན་གཞན་སེལ་ཡིན་པས་བྱུང་བར་འདོད་པ་ (32-3-2)

H3. དེ་ལས་ས་སྐྱུ་པའི་བཞད་པ་དོས་བཟུང་བ་ :

I1. སྤྱིར་བསྟན་པ་ (32-4-1)

I2. བྱེ་བྲག་ཏུ་བཤད་པ་ :

J1. གཞན་སེལ་གྱི་མཚན་ཉིད་ (33-2-5)

J2. དེའི་རང་བཞིན་དེས་པར་བྱུང་བ་ :

K1. གཞན་སེལ་གྱི་རྣམ་བཞག་ :

L1. དུལ་གྱི་གནས་ལུགས་ (33-3-5)

L2. རྫོང་འཛིན་སྣང་ས་

M1. ཐ་དང་ལ་གཅིག་ཏུ་འཛིན་པའི་རྟོག་པ་ :

- N1. ལྷོ་བཏགས་པའི་རྒྱ་ (33-4-5)
 - N2. ལྷོ་འདོགས་པའི་སློབ་རྒྱུ་ (33-4-6)
 - N3. ལྷོ་བཏགས་པའི་དགོས་པ་ (34-1-1)
 - M2. གཅིག་ལ་ཐ་དད་ཏུ་འཛིན་པའི་རྟོག་པ་ :
 - N1. ལྷོ་བཏགས་པའི་རྒྱ་ (34-1-3)
 - N2. ལྷོ་འདོགས་པའི་སློབ་རྒྱུ་ (34-1-4)
 - N3. ལྷོ་བཏགས་པའི་དགོས་པ་ (34-1-5)
 - K2. དེའི་རབ་ཏུ་དབྱེ་བ་ :
 - L1. དབྱེ་བ་དངོས་ (34-2-2)
 - L2. སོ་སོའི་རྒྱུ་བཞག་ :
 - M1. དངོས་པོའི་གཞན་སེལ་ :
 - N1. མཚན་ཉིད་ (34-2-5)
 - N2. དབྱེ་བ་ :
 - O1. མཛེན་གྱུར་ལ་ངེས་པའི་གཞན་སེལ་ (34-2-6)
 - O2. ལྷོག་གྱུར་ལ་ངེས་པའི་གཞན་སེལ་ (34-2-6)
 - M2. དངོས་མེད་ཀྱི་གཞན་སེལ་ :
 - N1. མཚན་ཉིད་ (34-3-4)
 - N2. དབྱེ་བ་ (34-3-4)
 - N3. དངོས་མེད་སྣང་ཡུལ་ཏུ་མི་འགྱུར་བའི་རྒྱ་མཚན་ (34-3-5)
 - M3. མ་ཡིན་དགག་གི་གཞན་སེལ་ :
 - N1. མཚན་ཉིད་ (34-4-2)
 - N2. མིང་གི་རྒྱུ་གངས་ (34-4-3)
 - M4. མེད་དགག་གི་གཞན་སེལ་ :
 - N1. མཚན་ཉིད་ (34-4-5)
 - N2. མིང་གི་རྒྱུ་གངས་ (34-4-5)
 - N3. དབྱེ་བ་ (34-4-6)
- K3. མཚན་གཞི་གཅིག་གི་སྟེང་ཏུ་གནད་མ་ཡིས་པ་གཏན་ལ་དབབ་པ་ :
 - L1. དགག་བྱ་བཅད་རྒྱལ་ (35-1-1)
 - L2. མིང་གི་རྒྱུ་གངས་ (35-2-2)
 - L3. སོ་སོའི་སྒྲ་དོན་ (35-2-3)
 - L4. མཚན་གཞི་གཅིག་གི་སྟེང་ཏུ་བསྟན་པ་དངོས་ (35-3-2)
- J3. སེལ་བ་ལ་རྩོད་པ་སློང་བ་ (36-1-2)

F2. ལྷ་ལ་སེལ་འཇུག་དང་སྐྱབ་འཇུག་གི་རྣམ་བཞག་དབྱེད་པ་ :

G1. གཞན་ལྷགས་དགག་པ་ (36-1-4)

G2. རང་ལྷགས་བཞག་པ་ :

H1. མཚན་ཉིད་ (37-1-3)

H2. དབྱེ་བ་ (37-1-5)

3. コラム/小註(G11)

C2. ལྷང་བ་དང་སེལ་བའི་རྟོག་ཚུལ་ :

D1. འཇུག་ཚུལ་སྤྱིར་བཏགས་པ་ (300-1-4)

D2. མོ་སེལ་རང་བཞིན་ངེས་པར་བྱ་བ་ :

E1. ལྷང་སེལ་གྱི་རྣམ་བཞག་དངོས་ :

F1. ལྷང་བ་ :

G1. མཚན་ཉིད་ (300-1-6)

G2. དབྱེ་བ་ :

H1. རྟོག་མེད་འབྲུལ་བའི་ལྷང་བ་ :

I1. མཚན་ཉིད་ (300-2-1)

I2. དབྱེ་བ་ (300-2-1)

H2. རྟོག་མེད་མ་འབྲུལ་བའི་ལྷང་བ་ :

I1. མཚན་ཉིད་ (300-2-2)

I2. དབྱེ་བ་ (300-2-3)

I3. མཚན་གཞི་ལ་མཚན་ཉིད་བསྐྱབ་པ་ :

J1. ལྷལ་གྱི་གནས་ལྷགས་ (300-2-3)

J2. རྟོག་འཛིན་སྐྱངས་ (300-3-1)

J3. རྟོ་རྟོན་མཐུན་པར་བསྐྱབ་པ་ :

K1. མཐུན་ཚུལ་དངོས་ (300-3-3)

K2. དེ་སྐྱབ་བྱེད་ཀྱི་རྟོགས་དགོད་པ་ (300-3-4)

K3. ངེས་ན་མངོན་སྲུང་མ་ངེས་པར་བསྐྱབ་པ་ (300-3-6)

F2. སེལ་བ་ :

G1. གཞུང་ལས་བཤད་པའི་ཚུལ་ (300-4-4)

G2. འབྲེལ་པ་མཁན་གྱིས་བཀྲལ་བའི་ཚུལ་ :

H1. གཞན་སེལ་གསུམ་གྱི་རྣམ་བཞག་ (300-4-6)

- H2. གཞན་སེལ་གཉིས་ཀྱི་རྣམ་གཞག་ (301-1-4)
- G3. ས་སྐྱ་པའི་བཞད་པོས་བརྒྱུང་བ་:
 - H1. གཞན་སེལ་གྱི་མཚན་ཉིད་ (301-1-6)
 - H2. དེའི་རང་བཞིན་ངེས་པར་བྱ་བ་:
 - I1. གཞན་སེལ་གྱི་རྣམ་གཞག་:
 - J1. ཡུལ་གྱི་གནས་ལུགས་ (301-2-6)
 - J2. སློའི་འཛིན་སྤངས་:
 - M1. ཐ་དང་ལ་གཅིག་ཏུ་འཛིན་པའི་རྟོག་པ་:
 - N1. སློ་བཏགས་པའི་རྒྱ་ (301-3-5)
 - N2. སློ་འདོགས་པའི་སློའི་རྣམ་པ་ (301-4-1)
 - N3. སློ་བཏགས་པའི་དགོས་པ་ (301-4-2)
 - M2. གཅིག་ལ་ཐ་དང་ཏུ་འཛིན་པའི་རྟོག་པ་:
 - N1. སློ་བཏགས་པའི་རྒྱ་ (301-4-4)
 - N2. སློ་འདོགས་པའི་སློའི་རྣམ་པ་ (301-4-5)
 - N3. སློ་བཏགས་པའི་དགོས་པ་ (301-4-6)
- K2. དེའི་རབ་ཏུ་དབྱེ་བ་:
 - L1. དབྱེ་བ་དངོས་ (302-1-2)
 - L2. མོ་སེལ་རྣམ་གཞག་:
 - M1. དངོས་པའི་གཞན་སེལ་:
 - N1. མཚན་ཉིད་ (302-1-5)
 - N2. དབྱེ་བ་:
 - O1. མངོན་གྱུར་ལ་ངེས་པའི་གཞན་སེལ་ (302-1-6)
 - O2. ལྡོག་གྱུར་ལ་ངེས་པའི་གཞན་སེལ་ (302-1-6)
 - M2. དངོས་མེད་ཀྱི་གཞན་སེལ་:
 - N1. མཚན་ཉིད་ (302-2-4)
 - N2. དབྱེ་བ་ (302-2-5)
 - N3. དངོས་མེད་སྤང་ཡུལ་དུ་མི་འགྱུར་བའི་རྒྱ་མཚན་:
 - O1. དངོས་མེད་སྤང་ཡུལ་དུ་མི་འགྱུར་བའི་འཐད་པ་ (302-2-6)
 - O2. དེ་ལ་རྩོད་པ་སྤང་བ་ (302-3-1)
 - M3. མ་ཡིན་དགག་གི་གཞན་སེལ་:
 - N1. མཚན་ཉིད་ (302-3-3)
 - N2. མིང་གི་རྣམ་གྲངས་ (302-3-3)

- M4. མིང་དགག་གི་གཞན་སེལ་ :
- N1. མཚན་ཉིད་ (302-3-5)
- N2. མིང་གི་རྣམ་གྲངས་ (302-3-5)
- N3. དབྱེ་བ་ (302-4-1)
- K3. མཚན་གཞི་གཅིག་གི་སྤྱིང་ཏུ་གནད་མ་ལྟས་པ་གཏན་ལ་དབབ་པ་ :
- L1. དགག་བྱ་བཅད་ཚུལ་ (302-4-1)
- L2. མིང་གི་རྣམ་གྲངས་ (303-1-2)
- L3. མོ་སེའི་སྐྱོ་དོན་ (303-1-4)
- L4. མཚན་གཞི་གཅིག་གི་སྤྱིང་ཏུ་བསྐྱུན་པ་དངོས་ (303-2-3)
- H3. སེལ་བ་ལ་རྒྱད་པ་སྤྱིང་བ་ (303-4-2)
- E2. ཞར་ལ་སེལ་འཇུག་དང་བསྐྱབ་འཇུག་དབྱེད་པ་ :
- F1. མཚན་ཉིད་ (303-4-3)
- F2. དབྱེ་བ་ (303-4-5)

4. シャーキャチヨクテン大註(S10)

- C2. ལྷང་བ་དང་སེལ་བ་བརྟག་པ་ :
- D1. ལུལ་སྐྱང་སེལ་གྱི་རྣམ་གཞག་རྒྱས་པར་བཤད་པ་ :
- E1. ལྷང་བ་བཤད་པ་ :
- F1. མཚན་ཉིད་ (161.6)
- F2. མཚན་གཞི་ :
- G1. དངོས་བཏགས་མ་ཕྱེ་བའི་དབྱེ་བ་ (171.1)
- G2. མཚན་གཞི་ལ་མཚན་ཉིད་དེས་པར་གྲུབ་པ་ :
- H1. ལུལ་གྱི་གནས་ལྷགས་ :
- I1. ཕྱི་རོལ་དོན་གྱི་གནས་ཚུལ་ (171.5)
- I2. བང་ཤེས་པའི་གནས་ཚུལ་ (172.3)
- I3. འདུས་བྱས་ཕྱིའི་གནས་ཚུལ་ (173.4)
- H2. སྐྱོའི་འཛིན་སྐྱངས་ (174.2)
- H3. སྐྱོ་དོན་མཐུན་པའི་ཚུལ་ (174.7)
- E2. སེལ་བ་བཤད་པ་ (/རྣམ་གཞག) :
- F1. འཛིག་ཚུལ་རྒྱས་པར་བཤད་པ་
- G1. མཚན་ཉིད་ (176.5)

- G2. མཚན་བྱི་སྐྱ་བཤད་པ་ (177.2)
- G3. མཚན་གཞིའི་རྣམ་གཞག་གཏན་ལ་ཡབ་པ་ :
 - H1. གཞན་ལྷགས་དགག་པ་ (177.7)
 - H2. རང་ལྷགས་བཞག་པ་ (183.4)
- F2. རོས་འཛིན་བསྐྱུ་ཏེ་བསྟན་པ་ :
 - G1. ཡུལ་གྱི་སྐོ་ནས་དབྱེ་བ་ :
 - H1. དོས་པོར་ཡོད་པ་གཞན་སེལ་ (197.7)
 - H2. དོས་པོར་མེད་པ་གཞན་སེལ་ (199.2)
 - G2. ཡུལ་ཅན་གྱི་སྐོ་ནས་དབྱེ་བ་ (199.6)
 - G3. བརྟེན་གྱི་སྐོ་ནས་དབྱེ་བ་ (201.1)
- D2. ཡུལ་ཅན་སྤང་འཇུག་དང་སེལ་འཇུག་བསྐྱུ་ཏེ་བསྟན་པ་ :
 - E1. མཚན་ཉིད་ (201.7)
 - E2. མཚན་གཞི་ (205.7)

5. シャーキャチヨクデン小註(S19)

- E2. སྤང་བ་དང་སེལ་བའི་རྟོགས་ཚུལ་ :
 - F1. འཇུག་ཚུལ་སྤྱིར་བསྟན་པ་ (507.1)
 - F2. སོ་སོའི་རང་བཞིན་དེས་པར་བྱ་བ་
 - G1. སྤང་འཇུག་བཤད་པ་
 - H1. མཚན་ཉིད་ (507.3)
 - H2. མཚན་གཞིའི་དབྱེ་བ་ :
 - I1. སྤང་འཇུག་འབྲུལ་པ་ (507.4)
 - I2. སྤང་འཇུག་ས་འབྲུལ་པ་ :
 - J1. མཚན་ཉིད་ (507.6)
 - J2. དབྱེ་བ་ (507.6)
 - J3. མཚན་གཞི་ལ་མཚན་ཉིད་སྐྱབ་པ་ :
 - K1. ཡུལ་གྱི་གནས་ལྷགས་ (507.6)
 - K2. སྐོའི་འཛིན་སྤངས་ (507.7)
 - K3. སྐོ་དོན་མཐུན་པའི་ཚུལ་ :
 - L1. ཇི་ལྟར་མཐུན་པའི་ཚུལ་ (508.2)
 - L2. དེ་ཅས་གྱིས་ཚད་མར་འབྲུབ་པ་ :

- M1. ཉགས་དགོས་པ་ (508.3)
- M2. ཚུལ་སྐྱབ་པ་ (508.5)
- M3. ཚུད་པ་སྐྱང་བ་ (508.5)
- L3. དེས་ན་མངོན་སྲིད་ཚད་མར་འཇོག་པ་ལ་ངེས་པ་ལི་དགོས་པར་བསྟན་པ་ :
 - M1. མངོན་སྲིད་ཚད་མར་འགྱུར་བ་ངེས་པ་ལ་མི་ལྟོས་པ་དངོས་ (509.2)
 - M2. དེ་ལ་ཚུད་པ་སྐྱང་བ་ :
 - N1. ལན་དངོས་ (509.3)
 - N2. དེས་ན་མངོན་སྲིད་ཏུ་འགལ་བ་ (509.6)
 - M3. ལྷང་ཡུལ་ལ་སྐྱོད་ཀྱི་མི་འཇུག་པའི་ཚུལ་ :
 - N1. དགག་སྐྱབ་ཅིག་ཆར་ཏུ་ཉགས་པར་ཐལ་བ་ (510.5)
 - N2. སྐྱོད་ཀྱི་མི་ལྟོས་པར་ཐལ་བ་ (510.6)
 - N3. ཉེས་པ་དེ་སྐྱངས་ན་སེལ་འཇུག་ཏུ་གྲུབ་པ་ (511.4)
- G2. སེལ་འཇུག་བཤད་པ་ :
 - H1. མཚན་ཉིད་ (512.3)
 - H2. དེའི་རང་བཞུན་ངེས་པར་བྱ་བ་ :
 - I1. སེལ་བའི་རྣམ་གཞག་ :
 - J1. ཡུལ་གྱི་གནས་ལུགས་དངོས་མེད་ཏུ་བསྟན་པ་ (512.4)
 - J2. སྐྱོད་ཀྱི་མི་ལྟོས་པར་སྐྱོད་བཏགས་སྐྱོད་བཞག་པ་ :
 - K1. བསྟན་པ་ (512.6)
 - K2. དེ་ཉིད་བཤད་པ་ :
 - L1. ཐ་དད་ལ་གཅིག་ཏུ་སྐྱོད་འདོགས་པའི་ཚུལ་ :
 - M1. སྐྱོད་འདོགས་པའི་རྒྱ་མཚན་ (513.2)
 - M2. སྐྱོད་ཀྱི་མི་ལྟོས་པ་ :
 - N1. དངོས་ (513.3)
 - N2. ཚུད་པ་སྐྱང་བ་ (513.4)
 - M3. དགོས་པ་ (513.7)
 - L2. གཅིག་ལ་ཐ་དད་ཏུ་སྐྱོད་འདོགས་པའི་ཚུལ་ :
 - M1. སྐྱོད་འདོགས་པའི་རྒྱ་མཚན་ (514.1)
 - M2. སྐྱོད་ཀྱི་མི་ལྟོས་པ་ (514.2)
 - M3. དགོས་པ་ (514.3)
 - I2. དེའི་རབ་ཏུ་དབྱེ་བ་
 - J1. དབྱེ་བ་མངོན་བསྟན་ (514.7)

- J2. རང་མཚན་གཞན་སེལ་དུ་འདོད་པ་དགག་པ་ :
- K1. དངོས་ (515.4)
- K2. དེའི་ཤེས་བྱེད་ (515.6)
- J3. དབྱེ་བ་སོ་སོའི་རྣམ་གཞག་རྒྱས་པར་བཤད་པ་ :
- K1. ཡོད་པ་གཞན་སེལ་བཤད་པ་ :
- L1. མཚན་ཉིད་ (516.1)
- L2. དབྱེ་བ་ (516.2)
- K2. མེད་པ་གཞན་སེལ་བཤད་པ་ :
- L1. མཚན་ཉིད་ (516.6)
- L2. དབྱེ་བ་ (516.6)
- L3. དབྱེ་རྒྱལ་མི་འཐད་པའི་རྩོད་པ་སྤང་བ་ :
- M1. དངོས་མེད་ལ་དངོས་པོ་ལྟར་དབྱེ་བ་མཚུངས་པའི་རྩོད་པ་སྤང་བ་ (517.1)
- M2. འདུམ་མ་བྱས་དངོས་པོར་ཡོད་པའི་རྩོད་པ་སྤང་བ་ (517.4)
- K3. དེ་གཉིས་ཀའི་མཚུག་བསྟུ་བ་ (518.6)
- H3. གཞན་སེལ་ལ་རྩོད་པ་སྤང་བ་ :
- I1. སྤྱི་མེད་ན་བདེ་སྤོང་བ་རྒྱ་མེད་དུ་གྱུ་བའི་རྩོད་པ་སྤང་བ་ (519.6)
- I2. གཞན་སེལ་ལ་བདེ་སྤོང་ན་རྟོགས་པ་ཕན་རྒྱན་བརྟེན་པར་གྱུ་བའི་རྩོད་པ་སྤང་བ་ :
- J1. རྩོད་པ་ (521.4)
- J2. ལན་ :
- K1. མགོ་མཚུངས་ (521.6)
- K2. དངོས་པོའི་ལན་ (522.3)
- I3. བསལ་བྱ་མེད་པ་ལ་སེལ་བས་འཇུག་པ་མི་འཐད་པའི་རྩོད་པ་སྤང་བ་ (522.7)
- I4. ལྷོག་པ་དངོས་པོར་གྲུབ་མ་གྲུབ་བརྟེན་པའི་རྩོད་པ་སྤང་བ་ :
- J1. རྩོད་པ་ (523.1)
- J2. ལན་ :
- K1. གཞན་ལན་དགག་པ་ (523.2)
- K2. རང་ལན་ (524.2)
- I5. སྤྱི་དངོས་པོ་བ་མེད་ན་གཞི་མཐུན་མི་སྲིད་པའི་རྩོད་པ་སྤང་བ་ (524.6)
- F3. ཕན་ཡོན་བསྟན་པས་མཚུག་བསྟུས་པ་ (525.3)

6. 口オケンチェン (L.)

- D2. ལྷང་བ་དང་སེལ་བའི་རྟོགས་ཚུལ་:
 - E1. འཇུག་ཚུལ་སྤྱིར་བསྟན་པ་ (99.9)
 - E2. སོ་སའི་རང་བཞིན་ངེས་པར་བྱ་བ་:
 - F1. ལྷང་བ་:
 - G1. ལྷང་བ་སྤྱིའི་མཚན་ཉིད་ (100.15)
 - G2. སོ་སའི་དོན་གཏན་ལ་དབབ་པ་:
 - H1. ལྷང་བ་འབྲུལ་པ་:
 - I1. མཚན་ཉིད་ (100.19)
 - I2. དབྱེ་བ་ (100.19)
 - H2. ལྷང་བ་མ་འབྲུལ་པ་:
 - I1. མཚན་ཉིད་ (100.23)
 - I2. དབྱེ་བ་ (100.23)
 - I3. མཚན་གཞི་ལ་མཚན་ཉིད་ངེས་པར་བསྟར་བ་:
 - J1. ཡུལ་གྱི་གནས་ལུགས་ (101.1)
 - J2. སློའི་འཛིན་སྟངས་ (101.8)
 - J3. སློ་དོན་མཐུན་པར་བསྟན་པ་:
 - K1. ཇི་ལྟར་མཐུན་པའི་ཚུལ་ (101.11)
 - K2. དེ་ཚད་མས་བསྟར་བ་:
 - L1. རྟོགས་དགོད་པ་ (101.19)
 - L2. ཚུལ་བསྟར་བ་ (101.19)
 - L3. བྱལ་བ་ལ་མི་འཐད་པ་སྐྱོང་བ་:
 - M1. རྟོགས་ཚེས་ལ་མི་འཐད་པ་སྐྱོང་བ་:
 - N1. རྟོགས་མི་སྤྱིད་པ་སྐྱོང་བ་ (102.1)
 - N2. སྤྱིད་ཀྱང་མི་དགོས་པ་སྐྱོང་བ་ (102.14)
 - M2. བྱལ་བ་ལ་མི་འཐད་པ་སྐྱོང་བ་:
- K3. དེས་ན་མངོན་སུམ་མ་ངེས་པར་བསྟར་བ་:
 - L1. མ་ངེས་པར་འགྱུར་བའི་འཐད་པ་དངོས་ (102.21)
 - L2. དེ་ལ་མི་འཐད་པ་སྐྱོང་བ་:
 - M1. ལྷང་དང་འགལ་བ་སྐྱོང་བ་ (103.8)
 - M2. དངོས་སུ་མ་ངེས་ན་ཚད་མར་འགལ་བ་སྐྱོང་བ་:
 - N1. རྩོད་པ་འགོད་པ་ (103.13)
 - N2. དེའི་ལན་:

O1. གཞན་ལན་དགག་པ་ (103.15)

O2. རང་ལན་བཏབ་པ་:

P1. མངོན་སྲུང་གྱིས་དགག་སྐྱབ་བྱེད་པའི་ཚུལ་ (103.25)

P2. དེས་ན་མངོན་སྲུང་དུ་འགལ་བ་ (105.4)

L3. ལྷང་ཡུལ་ལ་སྐྱོད་ཀྱི་མི་འཇུག་པའི་ཚུལ་ (105.19)

F2. སེལ་བ་:

G1. མཚན་ཉིད་ (106.15)

H1. གང་སེལ་བ་ (106.19)

H2. གང་གིས་སེལ་བ་ (108.8)

H3. ཚུལ་རིམ་ལྟར་དུ་སེལ་བ་ (108.15)

G2. དེའི་རང་བཞིན་གཏན་ལ་དབབ་པ་:

H1. སེལ་བའི་རྣམ་གཞག་:

I1. ཡུལ་གྱི་གནས་ལུགས་ (110.4)

I2. རྗེའི་འཛིན་སྤངས་:

J1. མདོར་བསྟན་པ་ (110.7)

J2. རྣམ་པར་བསྟན་པ་:

K1. ཐ་དད་ལ་གཅིག་དུ་འཛིན་པའི་ཚུལ་ (110.10)

K2. གཅིག་ལ་ཐ་དད་དུ་འཛིན་པའི་ཚུལ་ (110.15)

H2. དེའི་རབ་དུ་དབྱེ་བ་:

I1. དབྱེ་བ་དངོས་ (110.21)

I2. རྣམ་ལ་སེལ་བ་དགག་པ་:

J1. རྣམ་ལ་གཞན་སེལ་མི་འཐད་པའི་ཚུལ་ (111.1)

J2. དེའི་རྒྱ་མཚན་:

K1. སེལ་བ་སྤང་བར་འགྱུར་བ་ (111.5)

K2. ལྷང་བ་དང་མཚུངས་པར་ཐལ་བ་ (111.8)

I3. མོ་སེལ་རྣམ་པར་གཞག་པ་

J1. ཡོད་པ་གཞན་སེལ་:

K1. མཚན་ཉིད་ (111.22)

K2. དབྱེ་བ་:

L1. ལྷང་བ་མངོན་གྱུར་ལ་དེས་པའི་གཞན་སེལ་ (112.4)

L2. མི་སྤང་བ་ལྟོག་གྱུར་ལ་དེས་པའི་གཞན་སེལ་ (112.10)

J2. མེད་པ་གཞན་སེལ་:

K1. མཚན་ཉིད་ (112.25)

K2. དབྱིབ་ (112.25)

K3. དངོས་མེད་སྣང་ཡུལ་མ་ཡིན་པ་:

L1. སྣང་ཡུལ་དུ་མི་རུང་བའི་འཕྲད་པ་ (113.3)

L2. དེ་ལ་མི་འཕྲད་པ་སྣོད་པ་:

M1. དངོས་པོ་དང་མཚུངས་པ་སྣོད་པ་ (113.9)

M2. ཚད་མ་དང་འགལ་བ་སྣོད་པ་ (113.14)

M3. གྲགས་པ་དང་འགལ་བ་སྣོད་པ་ (114.9)

M4. ལྷང་དང་འགལ་བ་སྣོད་པ་ (114.14)

G3. དེ་ལ་ཚིད་པ་སྣོད་པ་:

H1. སྤྱི་མེད་ན་བད་སྤྱོད་པ་མི་སྤྱིད་པ་སྣོད་པ་ (116.6)

H2. གཞན་སེལ་ཡིན་ན་ཕན་ཚུན་བརྟེན་པར་ཐལ་བ་སྣོད་པ་ (117.8)

H3. གཅད་བྱ་མེད་པ་ལ་གཞན་སེལ་མི་འཇུག་པ་སྣོད་པ་ (117.24)

H4. སེལ་བ་དངོས་པོར་གྲུབ་མ་གྲུབ་བརྟགས་ན་མི་འཕྲད་པ་སྣོད་པ་ (118.5)

H5. སེལ་བ་ལ་སྤྱི་མེད་ན་གཞི་མཐུན་མི་སྤྱིད་པའི་ཚིད་པ་སྣོད་པ་ (119.24)

H5. སེལ་བ་ལ་སྤྱི་མེད་ན་གཞི་མཐུན་མི་སྤྱིད་པའི་ཚིད་པ་སྣོད་པ་ (119.24)

文 献 表

- RTR : *Tshad ma rigs pa'i gter gyi rang 'grel*. サキヤ・パンディタ著『リクテル』、
『サキヤ全書』第五卷所収、東洋文庫刊。
- RT : *Tshad ma rigs gter*. 同上書、民族出版社（北京）1988年刊。
- RT(P) : *Tshad ma rigs gter rtsa 'grel*. 同上書、Sakya Center (Dehra Dun) 1985年刊、
Glo Manuscript (Golden Manuscript)。
- RT(M) : *Tshad ma rigs pa'i gter gyi rang 'grel*. 同上書、(Bagra) 1960年代の刊行。
- G11 : Go rams pa bSod nams seng ge. *sDe bdun mdo dang bcas pa'i dgongs pa phyin ci
ma log par 'grel pa Tshad ma rigs pa'i gter gyi don gsal bar byed pa*. 『サキヤ
全書』第十一卷所収。
- G12 : -----. *Tshad ma rigs pa'i gter gyi dka' ba'i gnas rnam par bshad pa sDe bdun
rab gsal*. 『サキヤ全書』第十二卷所収。
- S10 : gSer mdog pan chen Sh'akya mchog ldan. *Tshad ma rigs pa'i gter gyi dgongs
rgyan*. 『シャーキャチョクデン全集』第十卷所収。
- S19 : -----. *Tshad ma rigs pa'i gter gyi rnam par bshad pa*. 『シャーキャチョクデ
ン全集』第十九卷所収。
- L : Glo bo mkhan chen bSod nams lhun grub. *Tshad ma rigs pa'i gter gyi 'grel pa'i
rnam par bshad pa Rigs pa ma lus pa la 'jug pa'i sgo*. 中国蔵学出版社。1988年
刊。
- PV. : Dharmakīrti. *Pramāṇavārttika*. Ch.1, svārthānumānapariccheda. 『プラマー
ナ・ヴァールティカ』第1章「自己のための推理」、『インド古典研究』II、
成田山新勝寺、1971-1972年刊所収。
- PV.Tib. : PV. のチベット語訳。同上書所収。
- PV.III. : *Pramāṇavārttika*. Ch.3, pratyakṣapariccheda. 『プラマーナ・ヴァールティ
カ』第3章「直接知覚」、同上書所収。
- PVSV. : Dharmakīrti. *Pramāṇavārttika, svavṛtti*. 『プラマーナ・ヴァールティカ』
第1章の自注。 *The Pramāṇavārttika of Dharmakīrti, The first chapter with
autocommentary*. Edited by R. Gnoli. Serie Orientale Roma 23. 1960.
- PVin.I. : Dharmakīrti. *Pramāṇaviniścaya*. Ch.1, Pratyakṣa. 『プラマーナ・ヴィニ
シュチャ』第1章「直接知覚」。 *Dharmīrti's Pramāṇaviniścayaḥ, 1. Kapitel:
Pratyakṣam*. Edited by Tilmann Vetter. Wien. 1966.
- PVin.II. : 同上書、Ch.2, svārthānumāna. 第2章「自己のための推理」。 *Dharmīrti's
Pramāṇaviniścayaḥ, 2. Kapitel: Svārthānumānam*. Edited by Ernst Steinkellner.

Wien. 1973.

PS : Dignāga. *Pramāṇasamucchaya*. 『プラマーナ・サムッチャヤ』。 *Dignāga on Perception, being the Pratyakṣapariccheda of Dignāga's Pramāṇasamucchaya from the Sanskrit fragments and the Tibetan versions*. Harvard Oriental Series 47. 1968.

Steinkellner, E. *Dharmīrti's Pramāṇaviniścayaḥ, 2. Kapitel: Svārthānumānam*. Teil II, Übersetzung und Anmerkungen. Wien, 1979.

平成4年3月27日 発行

非 売 品

チベット論理学研究（第四巻）

著 者 チベット論理学研究会
発行者 北 村 甫
印刷所 有限会社 日 本 興 業 社
土 田 等
東京都練馬区大泉町3丁目34番10号
発行所 財団法人 東 洋 文 庫
東京都文京区本駒込2丁目28番21号

本書は東洋文庫に対する平成三年度文部省補助金の一部により刊行された。